

スーパーロボット・ス トラトス(リメイク)

暁海斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リメイクしての投稿になります

ボチボチ更新していこうと思います

目次

転生	1
ユウマのお家	21
希望	40
話し合い	56
初仕事	96
日本	119
誘拐	137
IS 起動	146
帰国とIS学園	173
入学	188
クラス代表	227
ISを作ろう	241

みんなでIS開発	253
ガンダム	282
お泊り会	307
転校生	338
接触	347
転校生 その2	362
ドイツ帰国	378
お出掛け	438
帰国	500
デート	516
お買い物	547
林間学校	576

転生

俺は目を覚ますと知らない場所に居た・・・

ユウマ

「ここは何処だ？俺は何でこんな所に居るんだ？」

「確か家に帰る途中で・・・思い出せない・・・」

アマテラス

「初めまして、朝霧ユウマ様。私はアマテラスと申します」

ユウマ

「どうも。何で俺はこんな殺風景な場所に居るんですか？」

アマテラス

「実は・・・ユウマ様は帰宅途中に事故に遭い、亡くなってしまいました」

ユウマ

「マジで!?!」

アマテラス

「はい。ですが本来ユウマ様は亡くなる筈ではありませんでした」

「コチラ側の天使の管理ミスにより、全く関係のないユウマ様の命を奪ってしまい申し訳ございませんでした!!」

ユウマ

「そうですね・・・もつと色々やりたい事あつただけだな・・・」

アマテラス

「全てはコチラの不手際によるモノです。せめてものお詫びとしてユウマ様に新しい人生を送っていただきたいと思います」

ユウマ

「それは俺が暮らしていた場所に戻るんですか？」

アマテラス

「残念ですが・・・元の世界には戻る事は出来ません。違う世界での新しい人生を送っていただくことになります」

ユウマ

「それはどんな世界なんですか？」

アマテラス

「それはユウマ様ご本人に選んでいただきます。クジで選ぶことも出来ませんが如何なさいますか？」

ユウマ

「折角新しい人生送るなら色々な選択肢から選びたいです」

アマテラス

「では、一つ目の世界はインフィニット・ストラトスの世界です」

「二つ目の世界はハイスクールD×Dの世界です」

「三つ目の世界は魔法科高校の劣等生の世界です」

ユウマ

「知っている名前のモノはありませんね」

アマテラス

「ではくじ引きにしてみました。この箱の中から一枚選んでください」

ユウマ

「・・・これにします」

アマテラス

「インフィニット・ストラトスの世界ですね。コチラの世界は多くの問題を抱えています」

「この世界はISと言うパワードスーツが存在し、そのパワードスーツが女性にしか使えないという欠点があります」

「そのせいで女尊男卑主義が台頭しています」

「この世界に自衛の術を持たずに行くのは大変危険です。なので私からのお詫びとして役に立つアイテムを幾つかお渡ししましょう」

「ユウマ様は何か好きなロボットのアニメやゲームはありますか？」

ユウマ

「スーパーロボット大戦のゲームは好きでしたけど」

アマテラス

「スーパーロボット大戦ですね、少しお時間を下さい。スーパーロボット大戦の情報を調べますね」

「なるほど・・・色々なロボットを使うゲームのようですね。ではスーパーロボット大戦に出てくるロボットのパスワードスツのISサイズにして差し上げますね」

「何かご希望はありますか？」

ユウマ

「ならRシリーズの機体を3機下さい」

アマテラス

「分かりました。もし他の機体が必要になった時用に設計図などのデータが入ったメモリーデバイスをお渡ししますね」

「あと、ユウマ様は今回新しい世界へ転生となりますのでユウマ様の肉体スペックは高めにしておきますね。念のために念能力も使えるようにしておきましょう」

「ユウマ様は、ガンダムは好きですか？」

ユウマ

「まあ、好きですけど」

アマテラス

「ではガンダムからお好きな機体を一つ選んでください。どんな機体でも良いですよ」

ユウマ

「・・・ならHiirガンダムが良いです」

アマテラス

「Hiirガンダムですね。その場合ニュータイプ適正も必要なのでお付けしておきますね」

「これで準備が整いましたが、何かご不明な点等がありますか？」

ユウマ

「新しい世界では俺の境遇等はどうなりますか？」

「出来れば誰にも迷惑を掛けたくないので何処かでひっそりと暮らしたいんですけど」
アマテラス

「そうなりますと・・・無人島などで自給自足の生活を送るのが無難かと思います」

「ですが、ユウマ様はISを使う事が出来る数少ない男性として転生します。なので、世界の思惑に巻き込まれる可能性が大いにあります」

「それだけはご容赦ください」

ユウマ

「分かりました」

アマテラス

「では、転生の儀式に入ります。足元に魔法陣が出てきますので、そこから転生する形になります」

「ユウマさんが転生する時間軸で世界の行く末を決める出来事が起こります。出来ればその出来事で悲しむ少女を助けてあげてください」

ユウマ

「誰かを助ければ良いんですね」

アマテラス

「ユウマ様、何かありましたらお手元の携帯電話で連絡してください」

「ユウマ様の新しい人生に多くの幸せが訪れる事を祈っています」

ユウマ

「アマテラスさん、行ってきます」

こうして俺、朝霧ユウマは新しい世界での人生をスタートさせた……

とある島……

ユウマ

「……ん、ココは？」

~~~~~♪~~~~~♪

「携帯が鳴ってる……もしもし」

アマテラス

「ユウマさん、無事に連絡が取れたので転生できたようで安心しました。ユウマさんが居る島は小さい有人島です」

ユウマ

「あれ？無人島じゃないんですか？」

アマテラス

「無人島だと色々と不便だと思ったので小さい集落ですがコチラで変えさせていただきました。生活に必要な家などは準備出来ていますので使ってくださいね」

「コチラの集落の方達は優しい人達ですので安心してくださいね」

「ちなみにネット環境も整っていますよ」

ユウマ

「何から何までありがとうございます」

アマテラス

「では、ユウマさんに幸福が訪れる事を祈っています」

ユウマ

「さて、集落の人達に挨拶しに行くかな・・・」

俺は集落の人達に挨拶に行くと、全員俺を歓迎してくれた。何故か物凄く可愛がられた・・・

俺がこの世界に来て数週間・・・だいぶ落ち着いて生活できるようになった・・・

ユウマ

「ネット環境完備なんて至れり尽くせりだな。アマテラスさんは、とある出来事が起こるって言うってたけど、この後一体何が起こるのかな・・・」

「それに、悲しむ少女を救ってあげてくれ、か・・・一体誰を救えばいいのかな？」  
「考えても仕方ない。今は情報を集めてみますか」

俺は、家でパソコンを使いながら世界情勢を調べてみた

「今の所は特に何も無いな・・・世界は戦争までは行っていないけど小競り合いはあるんだな。どこの世界も同じか」

そんな時、全世界中継の映像が入ってきた

映像の内容は、篠ノ之束博士のISの発表の記者会見の映像だった

ユウマ

「ISか・・・このパワードスーツが現れた事で世界がおかしくなったって事か・・・しかもこの記者会見は色々説明不足が目立つな」

「まずコンセプトが分からない。そして、ISを開発した経緯は分かるが、目的に關した説明が無い」

「確かにISの完成度は高いけど、このままだと軍人が食いつくぞ・・・博士が泣いて帰っ

てしまったな」

とある隠れ家

東

「どうして誰も東さんの夢を分かってくれないの・・・どうすれば良いの・・・」

そんな時、隠れ家に設置してあるパソコンから緊急アラートが鳴り響いた・・・

「何?! 日本にミサイルが飛んできてる! 数は・・・数千発?!」

「大変だよ! どうしよう・・・」

そんな時、自分が宇宙に行くために開発したISが目に入った

「本当はこんな事に使いたくなかったけど背に腹は代えられないよね・・・ちーちゃん今

大丈夫?」

千冬

「どうしたんだ、東」

東

「いま日本に、何処かの国からミサイルが飛んできているんだよ!」

千冬

「何だと?!」

東

「ちーちゃんにお願いがあるんだ……この白騎士を纏ってミサイルを撃墜してきて貰いたいんだ！」

千冬

「しかし、それだとお前の夢が！」

東

「今はこの状況を何とかしないといけないから仕方ないよ。お願い、ちーちゃん！」

千冬

「……分かった」

千冬は、白騎士を纏って出撃した

それと同じ頃、ユウマは自分に与えられた念能力とニュータイプ能力の恩恵による危機察知能力と先読み能力により、今の日本の危機を察知し、急いでR-1を展開・変形し目的地に急行した

目的地

ユウマ

「ココにミサイルが来るのか・・・機体を変えるか、R-2展開！」

「来た・・・ターゲットロック！ハイゾルランチャーシュート!!」

束

「ちーちゃん！もうすぐ目的の海域だよ」

「これって・・・既に誰かがミサイルを撃墜してるよ！」

千冬

「何?! 自衛隊か！」

束

「・・・違うよ、ロボットが次々とミサイルを撃墜してるんだよ・・・」

千冬

「束、そのロボットとコンタクトは取れないのか？」

束

「やってみるよ。そのロボット君！私の声が聞こえる？」

ユウマ

「聞こえるぞ。悪いけど今取り込み中なんだ！話は後にしてくれ！」



「チツ!!ミサイルがドンドン増えてきやがる!!こうなったら機体を変えるか!R—3展開!」

束

「ウソ・・・男の子の声がした・・・そのロボットはまさかISなの!!」

ユウマ

「確かにISだけど今はそんな話してる暇が無いんだよ!!」

「手が空いてるなら手伝ってくれ!!」

束

「ちーちゃん!あのロボットを助けてあげて!!」

千冬

「分かった!」

ユウマ

「ターゲットマルチロック!テレキネシスミサイル発射!!」

「目標補足!ストライクシールド射出!!ミサイルを撃ち落とせ!!」

千冬

「凄いな、まるで何処からミサイルが来るかが分かっているかのようだ」

「私も協力しないと!全てのミサイルを叩ききってやる!!」

ユウマ

「ミサイルは後少し！もうひと踏ん張りだ!!」

「レーザーキャノン！フルバースト！」

千冬

「一刀両断!!斬鉄剣!!」

ユウマ

「ミサイル全弾撃墜完了。任務完了、これより帰投します」

東

「ちよつと待つて!!少しお話を聞きたいからちーちゃんと一緒に私の隠れ家まで来てくれないかなー!」

ユウマ

「・・・良いぞ。もうじき自衛隊や他国の軍隊も来る頃だ、急いで移動しよう」

千冬

「コツチだ、着いて来てくれ」

ユウマ

「了解」

東の隠れ家……

千冬

「ココが隠れ家だ」

東

「いらつしやい!! 東さんの隠れ家にようこそ!」

ユウマ

「……帰つても良いか?」

東

「そんなこと言わずに少しだけお話したいんだ。ダメかな?」

ユウマ

「俺に話せる事はそんなにないぞ」

東

「それじゃあ聞きたいんだけど、君のロボットは本当にISなの?」

ユウマ

「確かに俺がさつき使っていたのはISだ。この世界には無い技術で作られたモノだけ

どな」

東

「それ見せてくれないかな！」

ユウマ

「駄目だ。これは俺にしか使えない専用の機体だ。おいそれと他人に触れさせるわけにはいかないんだよ」

「それにアンタはさっきの記者会見で発表していたがISで宇宙に行きたいらしいな」

東

「そうなんだよ♪」

ユウマ

「悪いがさっきの説明では誰からも共感は得られないぞ」

東

「それは何でかな？」

ユウマ

「圧倒的な説明不足、自分本位の一方的な説明、他人からの質問に答えない・・・その記者会見でよく人々からの共感を得ようと思ったね」

「まずは段階を追って説明しないといけない所を、自分の言いたい事を一方的に言うだけじゃ誰からの共感も得られない」

東

「じゃあ・・・東さんはどうすれば良かったの？」

ユウマ

「まず、今回のISを作った目的は宇宙での有人飛行の為である事、この技術は戦争用のモノではない事、人間の可能性を模索するモノと言う説明が必須だった」

「オマケにさっきのミサイル迎撃をISでした事で全世界がISの軍事転用を目論むだろう」

「これに関しては俺にも責任があるから強くは言わないけど、君はもう少し他人に歩み寄るべきだ」

「人は、一人では出来る事は限られてくる。それが難しい事なら尚更だ」

「だから君は、まず自分の夢に興味を持つてくれる仲間を見つけないさい。そうすれば少しずつだけど前に進める筈だよ」

東

「仲間・・・君は東さんがお願いしたら協力してくれる？」

ユウマ

「まあ、君の夢に関する詳細な説明を聞いてみないと何とも言えないけど手助けは出来るかもよ」

東

「分かったよ。少しだけ私の話を聞いてね」

こうして彼女は自分の夢を話してくれた・・・

ユウマ

「なるほどね、宇宙でまだ人類が行った事の無い場所に行きたいと」

東

「うん。それでどうかな、君は東さんに協力してくれる？」

ユウマ

「その前に宇宙での危険性って理解してる？」

東

「危険性？」

ユウマ

「宇宙には空気が無い・・・一度操作をミスすれば隕石群に衝突してパイロットが命を落とす可能性は考えてる？」

東

「・・・考えてないです」

ユウマ

「そこからまず考えないと誰も協力してくれないよ。最初に力を入れるのは安全性からやらないとね」

東

「そうだね・・・もう一度設計から考え直してみるね」

千冬

「色々話しているところ申し訳ないが、全世界が私達を探しているぞ。ご丁寧指名手配までしている国もある」

ユウマ

「俺達の素顔はバレていないけど、ISの存在が全世界に露見した以上、製作者である君は全世界から狙われる」

東

「でもこの隠れ家に居れば見つからないよ！」

ユウマ

「無理だと思うぞ？世の中に絶対なんて無い。博士を見つけるために家族を人質に取るうとする国だって出てくるだろうし」

東

「どうしよう・・・」

ユウマ

「まずは安全に身を隠せる場所を探した方が良さだろうな。君の家族も連れて」

「俺の住んでいる島は、島外との繋がりがあまりないから暫くは時間を稼げるだろう。近くに無人島もあるし」

東

「・・・頼つても良いの？」

ユウマ

「俺が片足突っ込んでいる以上無視はできないよ。今は見つからないようにして移動しよう」

「さあ、準備開始だよ」

こうして、俺の穏やかな暮らしはこの世界に来て三週間で終わってしまった・・・



## ユウマのお家

千冬と協力してミサイルを撃墜した後、東博士と千冬の二人を一時的に匿う為に俺の家がある離島に向かった・・・

ユウマ

「悪いけど、ココから長距離移動になる。二人は移動手段はあるか？」

東

「東さんはニンジンロケットがあるから大丈夫だよ！」

千冬

「私は白騎士が有るから問題ない」

ユウマ

「んじゃ、俺の後ろを着いて来てくれよ。迷うと帰れなくなるからな」

「R―I展開！続いてチェンジ、R―ウイング！目的地まで飛ばすぜ！！」

東

「レッツゴー！」

千冬

「このノリには着いていけん。白騎士出るぞ」

そんなこんなで・・・俺達は無事に俺の家まで帰ってきた・・・俺達は人が居ない場所に降りてISやロケットを解除して歩き始めた

東

「本当に離島なんだね」

千冬

「こんな場所に島が有るなんて知らなかったぞ」

ユウマ

「いわゆる秘境みたいな島だからね。島に来るのは地元住民の人達と定期的に物資を運んで来てくれる運搬船だけだから本土の人が知らなくても不思議じゃないよ」

「んで、ココが俺の家。中にどうぞ、お茶淹れるから」

東

「お邪魔しまゝす」

千冬

「失礼する」

ユウマ

「はい、お茶どうぞ」

東

「ありがと〜♪」

千冬

「いただきます」

ユウマ

「それで・・・暫くは世界中が俺達の事を探しているだろうから、当分は大人しくしていた方が良いと思うけど・・・どうする？」

東

「そうだね・・・暫くは何処かで隠れていた方が良いね」

千冬

「だが、そうなると私達の家族が襲われてしまう可能性があるぞ？」

ユウマ

「その事だけど、今さつき調べたら、日本は重要人物保護プログラムって言うモノを適用

「するみたいだよ。これ、その資料ね」

東

「私のせいで家族みんなに迷惑が……どうしよう……」

千冬

「東……」

ユウマ

「プログラムが開始される前に、家族全員を何処かに安全な場所か国に匿って貰えば良いんじゃないか？」

東

「でも、全世界が東さんを探してるんだよ!!そんな状況で私達を匿ってくれる国なんてあるわけないよ……」

ユウマ

「ヒントをあげよう。東博士が先日記者会見を行った時、唯一興味を示した国があります。その国は何処でしょうか？」

東

「……ドイツだね……」

千冬

「確かにドイツは束の発表に興味を示していたが何故だ？」

ユウマ

「ドイツは今宇宙に関する研究を進めているんだよ。宇宙には未知の金属や未知の分子が存在するのは知ってるかな？」

束

「うん、隕石から地球上には存在しない金属反応が出たんだよね」

「それにどの元素記号にも当てはまらない元素、分子も発見されたって」

千冬

「それと、今回の束の発表に興味を持つことに何か関係があるのか？」

ユウマ

「分からない？今まで宇宙に行くにはスペースシャトルで出発して、宇宙ステーションを拠点にして無人探査機で調べるのが限界だったのは知ってるかな？」

束

「当然だよ！でもISで宇宙に行くのはやっぱりスペースシャトルで行かないと無理だ

よっ。」

ユウマ

「またヒントをあげよう。今まで決められた範囲しか調査をできなかった所をISで宇

宙探査が出来るようになると、どうなると思う？」

千冬

「……そうか！そう言う事か!!」

東

「どうしたのちーちゃん？」

千冬

「ISで宇宙探査が出来るようになれば、範囲の制限がかなり緩和される。活動限界時間にもよるだろうが、今まで行けなかった小惑星の調査も出来るようになるという事か」

ユウマ

「大正解！無人機ではサンプル採取も上手くいかない場所でも、有人探査だと確実にサンプルを採取できる可能性が生まれてくるよね？」

「その可能性は人類の可能性を大いに広げる可能性を持っているんだ。ドイツはその可能性に着目したんだよ」

東

「東さんはそんな事考えてなかったよ……」

ユウマ

「多分、いまドイツに連絡すれば喜んで匿ってくれるんじゃないかな？」  
「その代わり、研究に協力する事が交換条件になるだろうけどね」

東

「でも・・・家族の安全は保障されるんだよね？」

ユウマ

「日本の重要人物保護プログラムで家族バラバラになる事も無いだろうし、無理やり研究に付き合わされることも無いんじゃないかな？」

「そこら辺は実際にドイツ本国と交渉かな？」

東

「そうと決まったら早速交渉しないと!!」

ユウマ

「博士はドイツに伝手はあるのか？」

東

「・・・無い!!」

千冬

「ハア・・・全くどうしようもないな・・・」

東

「ちーちゃんが辛辣だよ．．．」

ユウマ

「仕方ないな。まずはドイツとのパイプを作らないといけないだろうね」

「手始めにドイツ大使館にでもメール送ってみるか。これで良しつと」

「話しは変わるが、東博士は最近いつ風呂に入った？」

東

「ん．．．一週間前くらい？」

ユウマ

「女性なら少しは自分の身だしなみくらい整えなさいよ！風呂を沸かしてあげるから

入って来なさい!!」

東

「ええ．．．まだ大丈夫だよ．．．」

ユウマ

「千冬さん、博士を連れてお風呂場に連行してください」

千冬

「了解した。東、行くぞ」

東



「嫌だく!!」

東博士は千冬さんに連行され、強制的に風呂に入らされた

東

「さっぱりしてきました!」

千冬

「綺麗にさせました」

ユウマ

「千冬さん、ご苦労様です。東博士、アンタ何徹したんだ? 隈が凄いぞ・・・」

東

「んく・・・大体三週間ぐらいかな?」

ユウマ

「天災は自分の健康管理も出来ないのか・・・今日は俺が飯を作ってやるから、飯を食ってさっさと寝ろ」

「完全に回復するまで休みなさい。これは命令です」

東

「はくい。それで今日のご飯はなあに?」

千冬

「私も食べて良いのか？」

ユウマ

「今日は近所の人達から貰った食材があるから・・・簡単に野菜炒めとご飯と味噌汁と近所のじいちゃんと一緒に採って来たタケノコと山菜の天ぷらかな？」

東

「超豪勢なご飯だ♪」

千冬

「そんな豪勢な食事をタダで食べさせて貰う訳には・・・」

ユウマ

「気にするな。そろそろ食材を使いきれないと痛んで食べられなくなるからな。それに・・・二人とも料理できないだろ？」

東&千冬

「ギクツ!!」

ユウマ

「何となく言っただけけど、まさか正解だとは思わなかったな。将来結婚するなら料理は出来た方が良いでしょう」

「んじゃ、俺は飯作るから出来るまで待つてくれ。暇ならゲームしても良いでしょう」

「パソコンは触るなよ。俺の機密データが入ってるからな。もし見たら・・・どうなるかわかるよね？」

東

「絶対にパソコンは触りません!!」

ユウマ

「千冬さん、監視お願いしますね」

千冬

「了解した」

ユウマ

俺は台所に行き、人数分の料理を作り始めた・・・暫くすると居間の方からゲームする音が聞こえてきたから二人で楽しんでみるみたいだ

でも、俺の家にあるゲーム機ってアマテラスさんの趣味なのか結構レトロゲームが多いんだよね。俺は好きだけどもね

「二人とも、ご飯が出来たぞ。炊飯器の中にご飯が炊けてるから好きだけ盛ってきて良いぞ」

東

「好きだけ盛っても良いんだね♪」

千冬

「いただきます」

ユウマ

「どうぞ、召し上がれ」

俺達が夕ご飯を食べ始めている頃、ドイツは少し慌ただしくなっていた・・・

秘書

「大統領、先ほど大使館にこんなメールが届いていたそうです」

大統領

「大使館にメール？いったい誰だ・・・何々」

ドイツ大使館の皆さん、私は今とある離島で篠ノ之東博士を保護しています。

今、東博士は日本政府の重要人物保護プログラムにより家族がバラバラになろうとしています。

そこでドイツ大使館の方達にお願いがあります。

もし可能でしたら、東博士とご家族をドイツで保護していただけませんか。

先ほど東博士にそれとなく聞いたところ、保護していただければドイツの宇宙への進

出計画にも協力してくれるとの事です。

日本で重要人物保護プログラムが施行される前に行動したいので、もし保護していた  
だけるのでしたら早めのご連絡をお願いします。

差出人 A・Y

大統領

「大使、今すぐにこのメールを送ってきた人とアポを取ってくれ。アポが取れ次第スグ  
に行動に移るぞ」

大使

「畏まりました」

ユウマの家

ユウマ

「デザートもあるけど食べるか？」

東

「デザートはなあに？」

ユウマ

「近所のばあちゃんから貰ったリングだよ。時期は少しずれてるけど十分美味しいぞ」  
「いま剥くから待っててくれ」

東

「リング、ウサギさんに出来る？」

ユウマ

「出来るぞ。ウサギが好きなのか？」

東

「うん♪」

ユウマ

「千冬さんは何か好きな形はあるか？」

千冬

「綺麗な飾り切りは出来るか？」

ユウマ

「お任せで良ければ出来るよ」

「少し待っててくれ」

俺は、自分出来る飾り切りを施してお皿に盛りつけた後、ウサギさんに切ったリン

ゴを同じお皿に盛りつけて持っていった

ユウマ

「ほい、お待ちどうさん」

ピコン♪

「ん？メールか、リンゴ食べて待っていてくれ」

東

「うん♪」

千冬

「いただきます」

ユウマ

「さて、誰からのメールかな・・・」

「随分と行動が早いな。東博士、ドイツから連絡が来たぞ。博士の家族全員を纏めて面倒見てくれるってさ」

「その代わり、宇宙計画に協力をお願いします・・・だつて」

東

「いつの間に連絡とつたの!？」

ユウマ

「さつきドイツ大使館宛にメール送つといたんだよ。それなのにこの対応の早さは想像以上だな」

「どう返信する？」

東

「よろしくお願いしますって送ってもらえるかな？」

ユウマ

「了解、送信つと」

「後は、向こうから何かしらの指示が来るだろうから、それまでに博士のご家族を一度ココに連れてきた方が良いな」

東

「なら、東さんがバビューンつと迎えに行つてくるよ！」

「そういう訳で行つてきまーす!!」

ユウマ

「ちよつと待てえ!!! 行つちまったよ……俺が居ないとこの島までのルート分からないのに如何するんだ?」

千冬



「東が迷惑を掛けてスマン・・・」

ユウマ

「仕方ない、暫く待っているか・・・」

俺らが待つている間にもドイツから再度連絡があり、三日後にプライベートジェットを極秘に手配してくれることになった

それからまた待つていると、今度は千冬さんの携帯に東博士から連絡があり迷ったとの事だった・・・

俺が少し呆れながら迎えに行くと、泣きじやくりながら博士が俺に抱き着こうとしてきたが俺が華麗に躲したことで顔面から砂浜に突っ込んだ

その後は、俺からのお説教だ。人の話を最後まで聞けだの、落ち着いた行動をしろと少しキツメに怒っておいた

お説教後は、博士のご家族と千冬さんの弟さんとそれぞれの自己紹介をした後はドイツからお迎えが来るまで待機だ・・・

待機中は、博士が俺のISを見せてくれとちよつとワガママを言つて来たのでコメカ

ミを少しグリグリしてやると痛みで大人しくなった・・・

千冬さんは、博士のお母さんと自分の弟から料理の手ほどきを受けていた。そのおかげか簡単な料理は出来るようになったようだ

相変わらず博士はフリーダムだが、昨日お母さんに怒られて少し行動が変わったようだ。前より落ち着いた行動を取るようになった・・・

そして、極秘にドイツに旅立つ日・・・

ユウマ

「それじゃあ、お気をつけて」

束

「ゆくくんも一緒に行こうよ！」

ユウマ

「俺には俺の生活があるので無理です。それに、俺はあまり目立った行動は出来ないんで我慢してください」

千冬

「色々世話になったな」

ユウマ

「千冬さん、博士の事お願いしますよ。目を離すと何するか分かりませんから」

千冬

「分かっているよ。ではな」

ユウマ

「さて、俺は戻るかな・・・」

この時、俺はまだ知らなかった。この後ドイツで自分が大いに巻き込まれる騒動が起  
こる事を・・・

## 希望

東博士達をドイツに送り出した後、俺は家に戻り秘密の地下室に入った・・・  
秘密の地下室には、俺がアマテラスさんから貰ったメモリーデバイスの中に入っていた設計図を基に、俺が組み立て中のフライトユニットが置いてあった

ユウマ

「さて、残りの作業を進めようかな。それにしてもこのサブフライトユニット、何で動力源が無いんだ？」

「形は俺の知ってるドダイ改なのに・・・アマテラスさんに聞いてみるか」

俺は、携帯に入ってるアマテラスさんの番号を呼び出し電話を掛けた・・・  
アマテラス

ユウマ  
「ハイ♪アナタだけのアマテラスですよ♪今日は如何しましたか？」

「アナタは俺の彼女か何かですか？」

アマテラス

「ちよつとした冗談ですよ♪」

「それで、どうしましたか？」

ユウマ

「この前貰った設計図なんですけど、なんでサブフライトユニットは動力源が付いていないんですか？」

アマテラス

「それはISの方から動力を供給出来るようにしてあるんですよ」

ユウマ

「それ・・・エネルギー切れになりませんか？」

アマテラス

「大丈夫ですよ。ISの動力は縮退炉を搭載していますので、ほぼ無尽蔵にエネルギーを生み出せますから」

ユウマ

「マジですか・・・」

「縮退炉ってブラックホールエンジンじゃないですか!!そんなバケモノエンジンをISに積まないでくださいよー!」

「撃墜された時危ないじゃないですか！」

アマテラス

「その辺はしっかり対策してありますし、ユウマさんを撃墜できる相手はそちらの世界には存在しませんよ」

ユウマ

「何処からそんな自信が出てくるんですか・・・」

アマテラス

「ユウマさんを信じていますから♪」

ユウマ

「とりあえず頑張ってみますけど、そこまで期待しないでくださいいね」

「それじゃあ失礼します」

アマテラス

「またいつでもお電話待ってますね♪」

ユウマ

「動力源が無いならもうすぐ完成だな・・・よし！これでドダイ改の完成だ！」

「これなら空中戦が苦手なR―1とR―2も安心だな。Hi―レガンダムも問題ない

な」

「いま空中戦で使えるのR―3だけだったし、いつその事、全部のサブフライトユニット作ろうかな」

俺がパソコンで設計図を探していると……俺の頭の中にビジョンが浮かんできた

そのビジョンは今日博士達が乗った飛行機が撃墜されるビジョンだった……

ユウマ

「今のビジョンは!!マズイ!!」

「俺の予知はほぼ99%の確率で当たる……撃墜なんてさせねえぞ!!」

俺は、急いでサブフライトユニットを全部のISにインストールした後、R―1を展開して即座に変形し飛び出していった

上空 飛行機内

東

「飛行機なんて久しぶりだなあ……」

千冬

「ユウマにはちゃんとお礼が言えなかったな・・・」

パイロット

「皆さん、本日の13時間のフライトを予定しています。もう少ししたら担当の大使館職員がご挨拶に伺います」

エルザム

「皆さん、初めまして。私は今回担当しますエルザムと言います」

「フライト中に何かありましたら遠慮なく言ってください」

束達たづなが飛行機内でそれぞれ寛ひろいでいると、いきなりアラートが鳴りだした

エルザム

「何だ!! 一体何があった!!」

パイロット

「後方より識別不明の戦闘機が近づいてきます!」

無線

戦闘機パイロット



「ドイツ軍所属の輸送機に告げる。そちらに篠ノ之東が乗っているのは分かっている」

「篠ノ之東の身柄を渡せ！もしコチラの要求に従わなければ撃墜する！」

「繰り返し返す……」

東

「何で……何でこうなっちゃうの……私が全部いけないの……？」

千冬

「東……」

東

「夢を追いかけるのが……そんなにいけないの？」

「何でこんなつらい目に遭わないといけないの……もう嫌だよ……」

パイロット

「エルザムさん……どうしますか？」

エルザム

「奴らは無国籍軍だろう。要求を呑んだとしても結果は変わらない」

「奴らを振り切つて逃げるんだ！」

パイロット

「了解！」

戦闘機パイロット

「どうやら我々の要求を無視するようだな．．．仕方ない、目標機を撃墜する！」

パイロット

「マズイ！ロックオンされました！」

エルザム

「奴等め！戦争を起こす事も厭わないのか!!」

戦闘機パイロット

「ターゲットロック．．．熱感知ミサイル発射！」

バシユンツ!!」

パイロット

「ミサイルが発射されました!!」

エルザム

「チャフかフレアで迎撃しろ!!」

パイロット

「了解！迎撃します！」

「チャフもフレアも効果なし！」

「駄目です！撃墜できません！」

エルザム

「マズイ！このままだと本当に撃墜されるぞ！」

東

「・・・ゆ〜くん、助けてよ・・・もう嫌だよ」

「助けてゆ〜くん!!」

ユウマ

「目標補足！Gリボルバー！シユート！」

ドカーン!!

東

「え？」

パイロット

「ミサイルが撃墜された？いったい誰が！」

エルザム

「あれは戦闘機か？」

ユウマ

「ミサイルは無事に撃墜出来たな。敵機は2機か？」

「普通に考えれば戦闘機2機で来るはずがない、おそらく伏兵が居る筈だ」

「ココは広域タイプが適任か・・・チェンジ！Hiirレガンダム！」

「カモン！サブフライトシステム！ドダイ改！」

「飛行機に通信飛ばすか・・・念のためにボイスチェンジャー持ってきて良かったな。ポチッと」

通信

ユウマ

「コチラ独立部隊所属、コードネーム「ゴースト1」

「ドイツ輸送機、聞こえるか？」

「これよりドイツ国内の空港か軍の基地に着くまで自分が護衛を務める。そちらは輸送機を飛ばすことに専念しろ」

パイロット

「護衛感謝します！よろしくお願いします！」

ユウマ

「任務了解」

東

「ゆ〜くんだ・・・ゆ〜くんが助けに来てくれたんだ！」

千冬

「確かに最初の機体はユウマのモノだろうが今の機体は見た事が無いぞ」

エルザム

「君達の知り合いかい？」

東

「私達を匿ってくれていた人です」

エルザム

「そうか。とりあえず君達は席についてシートベルトを着けていなさい」

ユウマ

「目標、正体不明の戦闘機。これより敵機を撃墜する」

「サイコミュシステムリンク！行け、フィンファンネル！」

戦闘機パイロット

「奴は何者だ!! 予備兵をコッチに向かわせる!!」

戦闘機パイロット

「了解! 全機スクランブル!! ドイツ輸送機を撃墜せよ!」

ユウマ

「どうやら伏兵は大勢いたみたいだな。まあ、俺には関係ないがな」

「敵機のエンジン部分のみを撃ち抜け! フィンファンネル!」

戦闘機パイロット

「エンジン損傷! 推力低下! 脱出します!」

「尾翼破損! 脱出します!」

「エンジン破損! 全機能停止! 脱出します!」

ユウマ

「これで全部か? 無国籍軍の割には随分と装備が充実してるな……元締めは何処の国だ?」

「後で調べてみるか。特殊部隊のエンブレム見つけ」

「ドイツ輸送機、聞こえるか?」

「敵機は全て無力化した。そっちはそのまま目的地に向かえ」

「コチラも並走する形で移動する。何かあればコチラで対応するから安心しろ」

パイロット

「了解！」

ユウマ

「もうH i i l lガンダムは良いかな。R-3パワードにチェンジ、航続移動にシフト」

「T-L I N Kセンサー広域モード。常に索敵状態で移動つと」

「ドイツまで後7時間か・・・オートパイロットで移動しようかな、少し眠いし」

「オートパイロット起動、輸送機に追従モードで移動つと」

システム音声

「オートパイロット起動します。前方の輸送機に追従しながら航続移動します」

「ドイツに近づいたら起こします。後はコチラでやっておきますのでお休みください、

マスター」

ユウマ

「後はよろしくね」

俺は移動中、ワリとぐっすり寝ていた・・・

ドイツ上空

システム音声

「マスター、まもなくドイツ上空です」

ユウマ

「ん・・・起こしてくれてサンキユ」

「このまま上空で待機だな」

パイロット

「まもなく滑走路に入ります。着陸準備・・・着陸します」

「着陸完了」

エルザム

「ココまで来ればもう大丈夫だ。まずはドイツ大使館に行こう」

東

「その前に無線貸してもらえますか？」

パイロット

「どうぞで」

東



「ゆ〜くん!! ゆ〜くんでしょ!! 助けてくれてありがとう!」

「一度降りて来てくれる?」

ユウマ

「悪いけど・・・俺、不法入国になるから降りられないよ?」

束

「え〜!!」

エルザム

「今話しているのはさつき助けてくれた人かな?」

束

「そうです!」

エルザム

「軍の施設だけど滑走路内なら不法入国にはならないよ。だから降りてきても大丈夫だよ」  
「よ」

ユウマ

「そう言われても俺顔を見せるわけにはいかないからな・・・R-3 パワードからドッキング解除して降りれば良いか・・・」

俺は、ドッキングを解除して滑走路に降りた

東

「機体は解除しないの？」

ユウマ

「こんな人目の多い場所で機体を解除できるわけないでしょ」

「俺は無暗に何処かの国と関わるつもりは無いの」

東

「むゝ・・・でも仕方ないよね」

「もう島に帰るの？」

ユウマ

「帰るよ。それじゃ」

エルザム

「待ってくれ、君が大使館にメールを送ってきた人なのかい？」

ユウマ

「そうです」

エルザム

「出来れば君と話がしたいんだ。人払いはするから一度機会をくれないか？」

ユウマ

「・・・面倒な事に巻き込まないと約束してくれるなら・・・」

エルザム

「分かった、約束しよう」

「そのままが良いから大使館まで着いて来てくれるかな？」

ユウマ

「分かった」

こうして俺はドイツとの繋がりが出来てしまった・・・

## 話し合い

俺はドイツ大使館の人に応接室のような場所に案内された

ちなみに俺の恰好は、顔にフル・フロントルの仮面を着けている。服装はガンダムSEEDの地球連合軍の軍服を模した服を着ている

この服と仮面は、アマテラスさんから色々貰った中であつた「カッコいい服シリーズと変装に使えるようなアイテムシリーズ」と言うクローゼットの中から選んで来たものだ  
アマテラスさんは良いセンスをしているな・・・個人的には Rond・ベルの軍服が一番のお気に入りだ

エルザム

「その仮面は気に入ってるのかな？」

ユウマ

「確かに気に入ってるが、主な目的は俺の素顔を隠すためだ」

「申し訳ないが、俺の存在は世界を混乱させるからな。それに俺の持っている機体は争

いの種になる」

「出来れば誰にも迷惑を掛けずにひっそりと暮らしたいんだよ」

エルザム

「だが、先ほどの戦闘は流石に隠せないと思うんだが」

ユウマ

「そうだろうな。多国籍軍の戦闘機を片っ端から撃墜したんだ、もう隠居生活は出来な  
いだろうな」

東

「それじゃあ東さん達と一緒に暮らそうよ♪」

ユウマ

「嫌だよ。自分の事が何も出来ない女性と暮らすと、俺の精神衛生上とてもよろしくな  
いから」

東

「ガーン!!」

エルザム

「君も中々に毒を吐くんだね・・・」

「コチラとしては、出来れば君の事を色々と教えてくれると嬉しいんだけど、良いかい

？」

ユウマ

「仕方ない、人払いをしてくれると助かるんだが？」

エルザム

「分かった。君と私だけにすれば良いかな？」

ユウマ

「それで頼む」

俺は、エルザムさんに簡単な生い立ちと今までの生活状況を話した

ユウマ

「こんな所だな」

エルザム

「意外だね、君のような人が表舞台に出ずにひっそりと暮らす事を望んでいるなんて」

ユウマ

「俺は基本的に争い事は嫌いなんでね。でも、俺にも譲れないモノがあるんだよ」

エルザム

「君の譲れないモノとは何だい？」

ユウマ

「夢を守る事だ」

「俺は人の夢を否定して馬鹿にする奴等が大嫌いだ。本人は必死に努力しているのに、無関係の外野の屑どもは簡単に無意味だ、叶うはずが無いと簡単に否定する」

「俺は夢を持っている若者を守ってやりたいんだよ」

エルザム

「それで君は、篠ノ之東博士を匿っていたのかい？」

ユウマ

「まあ、理由の一つはそれだな。他には博士に足りないモノを教えたりしていたけどな」

エルザム

「君はこれからどうするんだい？」

ユウマ

「そうだな・・・何処かの国に移住してひっそりと暮らすのが理想なんだが・・・そもそも言っただけで出来ないだろうし、どうしたもんか・・・」

エルザム

「これは提案なんだけど、良ければドイツに来る気は無いかい？」

「ドイツに来てくれれば衣食住は保証するし、仕事も用意するよ」

ユウマ

「その代わりに、俺に何かをさせるんだろ？」

エルザム

「難しい事じゃないよ。博士のサポートをお願いしたいんだ」

「先ほどの会話で、博士は君に随分気を許しているようだったから、お願いできないかな？」

ユウマ

「それを引き受けた場合、俺の住む場所はどうか？」

エルザム

「必然的に博士と同居する事になるかな」

ヤマト

「それはやめてくれ。博士は片付けが出来ない、料理が出来ない、自己管理が出来ない、専属の世話係が必要だ」

「その役目を俺一人にさせようものなら俺は今スグに逃亡するぞ」

エルザム

「それ程までに酷いのかい？」

ユウマ

「想像以上に酷い。暫く面倒を見た俺が言うんだ、間違いない」



エルザム

「分かったよ。コチラで専属のメイドを手配しよう」

ユウマ

「出来れば歴戦の凄腕メイドを頼む。でないと博士のだらしなさは変わらない」

エルザム

「必ず手配する事を約束しよう。それで……君はドイツに移住する方向で調整をしても良いかな?」

ユウマ

「ああ。改めまして……朝霧ユウマだ」

「それと、俺専用の部屋を用意してくれよ。アパートでも良いから」

「最近は少しマトモにはなってきたが、だらしない博士と一緒に家はイヤだ」

エルザム

「分かったよ。私が責任を持って用意しよう」

ユウマ

「俺は自分の家に荷物を取りに行ってくる。何かあったらこの番号に連絡してくれ」

エルザム

「了解したよ」

ユウマ

「それじゃあな」

東

「あ！ゆうくん、もうお話は終わったの？」

ユウマ

「ああ」

「良かったな。今日から博士達はドイツ国民だ。これで邪魔が入る事も無いだろう」

東

「ゆうくんはドイツに来ないの？」

ユウマ

「俺も成り行きでドイツに来ることになったよ・・・」

東

「なら、また一緒に暮らせるの!!」

ユウマ

「そんな訳あるかい。家は別々だよ」

東

「何で!!」

ユウマ

「自分の胸に手を当てて考えてみなさいよ」

東

「う〜ん・・・分からない！」

ユウマ

「自分の身の回りの事がキッチンと出来ない女性と一緒に暮らすのは無理だ。どうしても共同生活がしたいならキッチンと自分の事が出来るようになってから出直してきなさい」

東

「言ったね！だったら東さん頑張っちゃうもんね！」

「ゆ〜くんをびつくりさせちゃうんだから!!」

ユウマ

「まあ頑張ってくれ」

東博士に適当に返事を返した俺は一度家に戻った・・・

ユウマ

「さて、家の中を片付けてアマテラスさんに連絡して・・・島のみんなに挨拶しないとな」

俺は、家にある必要なモノを纏めてISの量子変換機能を使って全部詰め込んだ  
その後アマテラスさんに電話をした・・・

アマテラス

「はいは〜い♪ユウマさんだけの愛しのアマテラスさんで〜す♪」

ユウマ

「だからアナタは俺の恋人か奥さんですか？」

「あんまり冗談を言っていると本当に求婚しましょうか？」

アマテラス

「あら〜♪それも良いかもしれませぬ〜♪」

ユウマ

「冗談はさておき、俺、アマテラスさんが用意してくれた家とこの島を離れる事になりました」

アマテラス

「大体の事は把握していますよ。家は私の方で管理しておきますのでいつでも帰ってきて  
てくださいね」

「それと、島の人達には私の方からお伝えしておきましょうか？」

ユウマ

「それは俺から挨拶しに行きます。お世話になったのに何も言わずに立ち去るのは失礼ですから」

アマテラス

「分かりました。それと私の方で新しいISを作ってみましたですが、要りますか？」

ユウマ

「神様が気軽に文明レベルを崩壊させる代物を作らないでくださいよ・・・」

「もし悪用されたらどうするんですか・・・」

アマテラス

「その可能性は万が一もありえませんが！ISにはユウマさんの生体データが登録されるので、例え盗まれてもユウマさん以外の人には使えません！」

「それに、私が助けてもらいたかった少女を助けてくれたお礼でもあるんですよ？」

ユウマ

「助けて貰いたい少女って博士の事だったんですね。参考までに聞きますけど、そのISって何ですか？」

アマテラス

「水中対応機体、アトラスガンダムですよ」

ユウマ

「すみません、そのガンダム知らないんですけど？」

アマテラス

「無理ありません。ユウマさんが亡くなった後に出た作品のガンダムなので」

ユウマ

「水中対応機は持つてないんで欲しいですけど、まさかそのガンダムも縮退炉搭載していませんよね？」

アマテラス

「何を言ってるんですか？縮退炉は標準装備に決まっているじゃありませんか」

ユウマ

「マジか・・・縮退炉はオーバーテクノロジー過ぎるんだよなあ」

アマテラス

「オーバーテクノロジー過ぎるISはユウマさんを守る為でもあるんですよ？」

「それに、これは私の愛情でもあります♪」

ユウマ

「とりあえず、そのISは一応貰います。何処で貰えば良いですか？」

アマテラス

「今すぐにそちらに送りますね。送りましたよ」

ユウマ

「もう来たよ。待機状態はベルトか・・・これはこれで使い勝手が良いな」

アマテラス

「無事に届いたようで安心しました。私からは以上ですが何かご不明な点はありますか？」

ユウマ

「大丈夫です」

アマテラス

「では何かりましたら連絡を下さい。またね、ダ〜リン♪」

ユウマ

「だからその彼女風の挨拶は辞めろ!!」

「全く・・・さて、島の人達に挨拶しに行くか」

俺はお世話になった島の人達に挨拶回りをした

みんな、俺が島を出る事を非常に残念がっていた・・・そしてみんなは俺の新しい生活祝いに様々なモノをくれた

家具・島の特産の果物を加工したドライフルーツ・鍛冶師のじいちゃんからは業物の包丁・薬屋のばあちゃんからは役に立つ薬一式が入った薬箱等だ

俺はみんなに別れを告げてドイツに戻った

去りに際に孫の顔を楽しみにしているぞ」と言われた……まだ結婚の予定も恋人も居ないのに何を言ってるんだらうと思ったのは内緒だ

ドイツ大使館

エルザム

「もう準備は良いのかい？」

ユウマ

「ええ。必要なモノは全部持ってきましたし、何か必要なモノがあれば何時でも取りに行けるんで」

エルザム

「では、ユウマ君の家に案内するよ。車に乗って移動しよう」

俺はエルザムさんの運転する車でドイツの市街地から少し離れた場所に向かった……

エルザム



「ココがユウマ君用に用意した家だよ」

ユウマ

「1人で住むには広すぎませんか？」

エルザム

「すまない、博士がいずれ一緒に住みたいから大きい家にして欲しいと言われてね」

ユウマ

「ワガママ博士め・・・俺の意志は無視なのか」

エルザム

「博士にはユウマ君の家の場所は教えてないから、博士が飛び込んでくることは無いと思うが、念のためセキュリティは強化してあるよ」

ユウマ

「後で俺の方でも強化しておきます」

エルザム

「早速だけど家の間取りなどを説明するよ」

俺が家の扉を開けようとする、何故か鍵が開いていた・・・

ユウマ

「エルザムさん、鍵が開いてるんですけど」

エルザム

「おかしいな、昨日確認した時は確実に施錠したはずなんだが」

ガチャ

東

「おかえりさない♪ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・ワ・タ・シ？」

ユウマ

「何で博士が居るんだよ」

東

「東さんの情報網を舐めて貰っちゃ困りますなあ♪」

「天災東さんが調べれば、ゆくくんの家を調べる事は簡単なのさ♪」

ユウマ

「エルザムさん、家を変えてください。それと警察の手配を」

エルザム

「直ちに手配しよう」

東

「ちよつとく!!何でそんな対応なのさ!!」

「こんなに可愛い東さんが家に居るんだからもっと喜んでよ!!」

ユウマ

「不法侵入しておいて開き直るなよ、駄目博士」

東

「ゆ〜くんが辛辣だよ!!」

エルザム

「博士、今回の行動は些か問題が有るぞ」

「不法侵入は重罪だよ。もしユウマ君が本当に通報しようものなら我々でも庇いきれないよ」

東

「・・・ごめんなさい」

ユウマ

「お母さんに迎えに来てもらいましょうか」

エルザム

「そうだね、スグに来てもらえるように頼んでみるよ」

それから暫くして、博士のお母さんと妹さんが迎えに来た・・・

母

「東、よそ様に迷惑を掛けるとは何事ですか!!」

「これからアナタには、圧倒的に足りない常識を徹底的に教えます。覚悟なさい!!」

東

「それだけのご勘弁を〜!!」

箒

「姉さん、今回の事は流石に人として駄目だと思います」

東

「箒ちゃんまで!!」

ユウマ

「それではお母様、妹さん、駄目博士の事をよろしくお願いしますね」

母

「ええ、この子をしっかりと教育してきます」

箒

「姉がご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

東

「ゆ〜くん! お助けを〜!!」

ユウマ

「自分の行いを顧みて反省しなさい」

東

「イヤ〜!!!」

博士は、お母様と妹さんに連れられて帰っていった

エルザム

「ユウマ君、次の家を探そうか」

ユウマ

「はい、今度はアパートの方が良いです。その方がまだ安心できる気がします」

エルザム

「分かったよ。コチラで色々物件を用意しておくからユウマ君自身が選んでくれるかい？」

ユウマ

「分かりました。今日はとりあえず何処かで宿を借ります」

エルザム

「費用はコチラで負担するから領収書を貰っておいて欲しい。そうすれば後ほど返せるからね」

ユウマ

「了解です」

俺は近くに市街地に行き、適当な宿を借りた

今回寄った町は観光地らしく、心の籠ったおもてなしをしてくれた・・・

宿を借りた次の日・・・俺はエルザムさんから物件探しに少々時間が掛かると連絡を

貰った為、ドイツの海が見たくなったので海沿いの街に向かった

ユウマ

「ドイツの海も案外悪くないな。でも俺は島の海の方が好きかな・・・」

その時、俺の頭にふとビジョンが浮かんできた

「海難事故のビジョン？デカイ事故でなければいいけど・・・」

そんな俺の心配を嘲笑うかのように、沖合では巨大タンカーがエンジンから出火し大変な状況になっていた

ユウマ

「何だあの黒煙は・・・まさか!!」

俺は沖合を注視すると巨大タンカーが火事になっているのが見えた

「何で俺の行く先々でこうも事故やトラブルが起こるんだよ!!考えても仕方ない!」

「助けに行きますか!!来い、アトラスガンダム!」

「水中対応型なら海上での救助活動だって出来るだろ!!」

俺は、腰部に付いているサブレッグを脚部に装着した後スキーマの要領で高速でホバー移動しながらタンカー船に向かった

船長

「全乗組員に告げる!!至急船外に避難せよ!!」

「全乗組員、持ち場を放棄しても構わない!至急退避せよ!!」

乗組員

「船長!海上を高速で移動する機影を確認しました!」

船長

「こんな時に一体なんだ!!」

無線

ユウマ

「コチラ独立部隊所属ゴースト1だ。タンカー船の誰でも良い聞こえていたら応答を頼む!」

船長

「コチラタンカー船だ!現在エンジンから出火して船内に延焼している状況だ!」

ユウマ

「船内の避難状況を教えてくれ」

船長

「現在半数が避難完了しているが、機関室でまだ避難が終わっていない！延焼で何人も閉じ込められているんだ！」

ユウマ

「了解した。救助の為に船体に穴を開けるが構わないか？」

船長

「やってくれ!!人命救助が最優先だ！」

ユウマ

「最初にエンジン付近を消火したい。大まかなエンジンの場所を教えてください」

船長

「船後方の船底付近が機関室でエンジンがある！現在火災で機関室に入る通路が使えないー！」

「船の側面を破壊して中に入れてくれ!!」

ユウマ

「了解した。今コチラで海軍に救助要請をした！乗組員を避難ボートで船外に脱出させてくれ！」



「これより消火活動及び救助活動を開始する」

船長

「乗組員を頼んだぞ！」

ユウマ

「任務了解」

無線終了

ユウマ

「船体に穴を開ける時にビームサーベルは使えない、燃料に引火させて更に火災を広げる危険性がある・・・実体剣も同様に火花で火災を広げてしまう・・・」

「振動剣でもあれば良いんだが・・・どうする」

その時、メインモニターに新しい武装の追加情報が表示された

ユウマ

「単分子カッターと水流カッター？俺の今欲しい武装を自動で追加してくれるのか？」

メインモニターにアマテラスさんをデフォルメしたキャラが出てきて説明をしてくれている

デフォルメアマテラス

「私はユウマさんの機体に搭載されているAIです♪ユウマさんの機体全てには今欲しい武装を追加する機能を付けています」

「ただし、人命救助の時限定です！それではユウマさん、頑張ってくださいね♪」

ユウマ

「うん、アマテラスさんは最高の神様だな」

「んじや、始めますか！」

俺は拡張領域から単分子カッターを取り出し、船体に穴を開けて中に入った

だが、機体のサブレッグが引つ掛かり中に入れなかった

ユウマ

「ヤベツ・・・開けた穴が小さすぎた・・・仕方ない、機体チェンジ！R——！」

ユウマ

「火災の範囲が広い・・・消火弾は有るか」

AI

「フォレスター消火弾を武装追加しました」

ユウマ

「よし！フォレスター消火弾発射!!」

「消火完了！後は残された人達を救助するだけだ！」

俺は、目につく部屋の扉を蹴破り中に要救助者を探していった

最後の機関室の扉をブチ破ると、中には五人の乗組員が倒れていた

ユウマ

「おい！助けに来たぞ！しっかりしろ！」

「生体反応は有るけど意識が無いか・・・一酸化炭素中毒の可能性もあるか早急に救急隊に引き渡さないとマズいな」

「この時間は掛けられない、壁を破壊してでも助け出す!!」

「T—L—I—N—Kシステム起動！壁をブチ破る！念動鉄拳、T—L—I—N—Kナツコオ!!」

ドカンッ!!

ユウマ

「急いで搬送をお願いしないと・・・」

俺が5人を外に出そうとしていると、救助艇が近づいてきた

海軍

「アナタが通報してくれた方ですね！要救助者の方達は何名いますか？」

ユウマ

「全員で五名です。一酸化炭素中毒の可能性が有ります」

海軍

「了解です！アナタの事はエルザムさんから聞いていますので後の事は我々海軍にお任せください！」

ユウマ

「お願いします」

俺は、海軍の方に引継ぎを済ませ宿屋に戻った・・・

次の日、俺は何故か海軍本部に呼ばれた・・・あれ？俺海軍を怒らせるようなことしたっけ？

エルザム

「ユウマ君、早速海軍本部に向かうけど前回のマスクは着けるかい？」

ユウマ

「昨日は俺の顔は見られていないんでマスクは着けます。それと服は軍服っぽいのを着ます」

「その方が雰囲気が出るので」

エルザム

「じゃあ海軍の方から送迎車が来ているから行くこうか」

俺とエルザムさんは、送迎車に乗り海軍本部に向かった・・・

## 海軍本部前

海兵

「お待ちしていました。司令室で大将がお待ちです」

「准将殿が案内しますのでこのまま中にお入りください」

エルザム

「このバッチを着けて中に入るんだよ」

ユウマ

「分かりました」

俺達が正門をくぐると、キッチリとした軍服を着たダンディな男性が立っていた

准将

「お待ちしていました。大将が指令室でお待ちです、行きましょう」

俺達は、准将さんに案内されるままに指令室に向かった・・・

准将

「お客様をお連れしました、入ります」

大将

「准将ご苦労。突然お呼び立てして申し訳ない」

「実は先日のお礼と、とある方が協力してくれた方に会いたいと言っていてね」

エルザム

「そのような事は聞いていませんが」

大将

「内密にと頼まれてね、紹介しよう・・・レオナ大統領だ」

エルザム

「大統領!!」

ユウマ

「何で大統領がここに居るんですか？」

レオナ

「それはアナタにお礼を言う為と、交渉をしたくてね」

ユウマ

「交渉ですか？」

レオナ

「ええ。その前に先日はタンカーの乗組員たちを助けてくれてありがとう。我が国ドイツはアナタの功績を称して勲章を与えます」

ユウマ

「勲章は受け取れません」

レオナ

「それは何故かしら？」

ユウマ

「俺は正式なドイツ人ではありません。よそ者の俺が栄えあるドイツ勲章は受け取れません」

レオナ

「そう……では大統領権限を使いアナタを正式なドイツ人として迎え入れる事をココに正式に宣言します！」

「これで問題ないわね♪」

ユウマ

「……大統領がそんな強引で良いんですか？」

レオナ

「あら？大統領が強引なのは意外かしら？」

ユウマ

「そうですね。他の国の大統領は強引な素振りはありませんから」

レオナ

「それで勲章は受け取ってくれるかしら？」

ユウマ

「……やっぱり受け取れません。俺は勲章が欲しいわけではないので」

レオナ

「うん、アナタ気に入ったわ♪良かったらドイツの救助部隊を今度作る予定だからその部隊の隊長をやってみない？」

「部隊名はゴースト小隊で良いわよ♪」

ユウマ

「俺は隊長なんて出来る人間ではないのでお断りします」

レオナ

「あら、自分の部隊を持つのは嫌かしら？」

ユウマ

「俺は一人で行動するのが向いていると思っっているので」

レオナ

「そう、なら大統領直属の救助隊として近隣諸国の災害救助とかに協力してくれないかしら？」

「勿論アナタがメンバーを選んで部隊に入れても良いわよ」



ユウマ

「何でそこまでして俺を引き込もうとするんですか？」

レオナ

「アナタが見ず知らずの人の為に自分の危険を顧みずに助けに行ける人だからよ」

ユウマ

「救助に行くのなら、軍の人達もそうじゃないんですか？」

レオナ

「軍の救助部隊は仕事として救助に行くわ。でもアナタは仕事ではないのに先日巨大タンカーの海難事故から全乗組員を助け出す偉業を成し遂げたわ」

「私はそんなアナタが欲しい。だからアナタをドイツに正式に迎え入れたいの」

「これが私がアナタを迎え入れたい理由よ。これではまだ足りないかしら？」

大将

「ユウマ殿、もし良ければ少しお時間を貰えるかな？」

ユウマ

「構いませんけど・・・」

大将

「では外に行こう。大統領もご一緒をお願いします」

レオナ

「ええ」

俺達は大將殿に着いて行き、外の開けた訓練場のような場所に向かった・・・

そこには大勢の軍人さん達が集まっていた

准将

「総員、先日の大規模な海難事故で乗組員を全員救助する偉業を成し遂げた若き英雄に敬礼!!」

軍人さん達

「英雄に敬礼!!」

ユウマ

「一体これは・・・」

大將

「皆、君の事を尊敬しているんだ。さつきも大統領が君を迎え入れたいと言っていたが、我々も君のような勇氣ある若人と共に働きたいという思いがある」

「だから、私からも是非ともユウマ殿のお力を貸してもらいたい」

レオナ

「これでもまだダメかしら?」

ユウマ

「……ここまでされたらもう断れませんか……分かりました」

「俺で良ければ協力します」

レオナ

「これで決まりね♪後日、正式にドイツ国籍とユウマ君専用の家を用意するわ♪」

「何か希望はあるかしら？」

ユウマ

「今エルザムさんがアパートを探してくれている筈です。アパートが無さそうなら一人用の一戸建てがあれば良いです」

「後、セキュリティが強めの家が良いです。東博士がまた侵入しそうなので」

レオナ

「分かったわ。楽しみにしててね」

「エルザム、今見ている物件の情報をコッチにも回しておいてね」

エルザム

「了解です」

レオナ

「ユウマ君、これから契約書とか待遇とかの話がしたいから一回大使館に戻りましょう」

か?」

ユウマ

「分かりました」

俺は、車に乗り再び大使館に戻った・・・

レオナ

「それじゃあユウマ君の待遇だけど、お給料は毎月1万ユーロを支払うわ」

ユウマ

「日本円に換算すると・・・130万円?!」

「どう考えても貰い過ぎじゃないですか!!」

レオナ

「これでも安い方よ?ユウマ君は今現在、世界で唯一の男性だもの」

「今現在I Sはドイツで製造を開始しているけど、東博士がI Sコアを全世界に提供した事で全世界がこぞって開発競争を始めているわ」

「でも、I Sは何故か女性にしか使えない欠陥があるけど、ユウマ君は男性でI Sが使える希少な存在なのは理解してる?」

ユウマ

「はい、だからひっそりと隠居したかったですから」

レオナ

「そうなのね。でも、ユウマ君の存在をまだ全世界は知らないわ」

「この事はドイツの機密事項に指定しているわ。ドイツ国民のみならずは知っているけどね」

ユウマ

「何でドイツ国民の人達は俺の正体を知っているんですか・・・」

レオナ

「それはユウマ君がタンカー事故の救助活動をしていた後のISを解除した時に顔がバッチリテレビに映ってたわよ？」

ユウマ

「・・・あ！仮面付け忘れてた!!」

レオナ

「でも映像は国内だけに留めてある筈だから大丈夫よ。もし近隣諸国にバレたとしても絶対ユウマ君はドイツが守るからね」

ユウマ

「誘拐されそうになったら撃退しても良いですか？」

レオナ

「許可します！でもやり過ぎないようにね」

ユウマ

「善処します」

レオナ

「ではこの契約書を読んで納得したらサインしてね」

ユウマ

「……この条件で構いません。サインしたのでお願いします」

レオナ

「ありがとう。今日からユウマ君はドイツ軍に籍を置くことになるけど基本は自由に  
ていていいからね」

「何か有事の事があった場合は早急に協力をお願いするけどね」

ユウマ

「了解です」

レオナ

「それとユウマ君の家は候補は絞ったけど、この中で気に入った家はあるかな？」

ユウマ

「……この平屋の家が良いです」

レオナ

「この家ね。セキュリティは最強レベルに強化する？」

ユウマ

「機材を貸してもらえれば俺の方で改造します」

レオナ

「なら今から内見に行きましようか」

ユウマ

「大統領が案内するんですか？」

レオナ

「そーよ？」

ユウマ

「普通、大統領はこのような事はしないとされていますけど？」

レオナ

「私は私よ♪さあ行きましよう」

俺は、大統領に案内されるがままに家の内見に向かった……

レオナ

「ココよ。早速中に入りましようか」

ユウマ

「意外に広いですね。一人だと少し部屋を持って余しそうですね」

レオナ

「少し広い事に越したことはないわよ。この家は私が大統領になる前まで住んでた家だから」

「住みやすさは保証するわ♪」

ユウマ

「そんな思い出のある家を借りても良いんですか？」

レオナ

「持ち主の私が勧めているんだから良いのよ♪」

ユウマ

「ではこの家をお借りします」

レオナ

「ありがとう。それじゃあコレが家の鍵ね」

ユウマ

「では早速セキユリティを強化改造しますので少し待っていてください」

俺は、借りた道具と機材で家のセキユリティを凄まじいレベルまで強化改造した



ユウマ

「終わりました。これが新しい家の鍵です」

レオナ

「随分と家のドアのカギにしては数が多いわね」

ユウマ

「これ位強化しておかないと安心できませんから」

レオナ

「それじゃあ、新しい家で楽しい生活をエンジョイしてね♪」

ユウマ

「ありがとうございます、大統領」

レオナ

「私の事はレオナさんで良いわよ♪堅苦しいのは苦手なの」

ユウマ

「それでは、レオナさんまた何かありましたら連絡ください」

レオナ

「ええ♪」

こうして俺は新しい家を借りて、新しい生活を始めた……

近くに沢山のお店があるから生活には事欠かないな・・・

その頃、東博士は・・・

母

「東、アナタが私の考案した道德のテストを十回やって満点を十回取るまでユウマさんに会いに行くことは許しません」

東

「東さんは天災だからどんなテストも余裕でクリアしちゃうよ♪」

母

「箒も念のためテストを受けておきなさい。箒は満点でなくても良いですよ」

箒

「分かりました、母さん」

母

「では始めなさい」

東博士はテストを受けたが、一般的な常識が抜けていたせいかテストの点数は10点

だった

東

「なんで〜?!」

母

「これが今の東の一般常識レベルです。これから徹底的に叩き直します!」

東

「イヤ〜!!!」

ちなみに、箒の点数は90点だったそうだ・・・

## 初仕事

レオナさんにスカウトされてから数日・・・

俺は新しく借りた家でのんびりと過ごしていた・・・

俺がうたた寝をしかけていた時、電話が鳴った・・・

ユウマ

「はい、ユウマです」

レオナ

「ユウマ君、急で申し訳ないんだけど、お仕事を頼みたいの」

「引き受けてくれるかしら？」

ユウマ

「どんな内容ですか？」

レオナ

「ドイツ国内で禁止されている違法な人体実験を行っている研究所が見つかったの」

「その研究所は、子供達を監禁して薬物による人体実験を行っているらしいの」

「ユウマ君には、その研究所に乗り込んで子供達を救出して貰いたい。それと研究の資料などが有れば回収をお願いしたいわ」

ユウマ

「その研究所は何処にあるんですか・・・」

レオナ

「詳しい事は直接説明するから官邸まで来てくれるかしら？」

ユウマ

「スグに行きます」

俺は事前にレオナさんから貰った特務隊の識別バッジを身に着けて官邸に向かった・・・

特務隊のバッジは、官邸に入る事を許される許可書も兼ねている為、これが無いと官邸に入れない。俺専用の識別バッジだ

官邸前

警備員

「朝霧特尉、お話は何っています。このまま執務室まで向かってください」

ユウマ

「ありがとう、いつも警備ご苦勞様」

警備員

「勿体ないお言葉です！」

執務室

ユウマ

「朝霧ユウマ、入ります」

レオナ

「ユウマ君、待ってたわ。早速だけど説明を始めても良いかしら？」

ユウマ

「お願いします」

レオナ

「先日、とある研究所から内部告発の情報が出てきたの。内容はさつき説明した通りの非人道的な人体実験よ」

「被験者は幼い子供達、それと違法にクローン技術を応用して人工的に超兵を作ろうとしている計画も進行中だそうよ」

ユウマ

「・・・クソツタレが」

レオナ

「我々ドイツ政府は、事の重大性を鑑みて早急に子供達の救出と研究者達の摘発を決めたわ」

「ユウマ君には研究所に乗り込んで、子供達の救助と違法研究の証拠を集めて来てもらいたいので」

ユウマ

「了解しました。研究所の場所は分っていますか？」

レオナ

「北西部の山の中に研究所があるみたいだけど、先日空軍が調査した時は建物らしいモノは発見できなかつたそうよ」

「おそらく地下深くに研究施設がある筈よ」

ユウマ

「地下か・・・俺なら何とか見つけられるか・・・」

レオナ

「大統領からの正式な依頼として朝霧ユウマ君にこの任務をお願いしたいです」

ユウマ

「分かりました。目的地までの地図などがあつたら下さい」

レオナ

「これが目的地までの大まかな地図よ」

ユウマ

「それでは今から行つてきます。救護スタッフの準備だけお願いします」

「来い、R—I。R—ウイングに変形、目的地まで飛翔する」

俺は、目的地付近の山付近に向かった……

北西部の山

ユウマ

「目的地周辺に到着。これより地下の研究所を探索する」

「T—LINKセンサー起動！地中深くの建造物を探知する」

俺は、今使える最大範囲でT—LINKセンサーを起動して探索していった……

ユウマ

「駄目だ、センサーに反応が無い……相当地下深くに施設を作ったみたいだな」



「このままじゃギリ貧になる。もっと効率のいい方法が有る筈だ・・・考えろ」

「・・・ん？そういえばアトラスガンダムは水中対応型だからもしかしたら機体にアクティブソナーが搭載されてるかもしれない！」

「来い！アトラスガンダム！」

俺がアトラスガンダムを展開すると、モニターにデフォルメアマテラスさんが出てきた

デフォルメアマテラス

「お話は聞いていました！ユウマさんのご要望にお応えして、超強力ソナーを追加しました♪」

「これさえ有れば深海でも、地中深くでも、どんな場所でも隠れることなど出来ません！ユウマさんのご武運をお祈りしていますね♪」

ユウマ

「やっぱりアマテラスさんは最高の神様だぜ!!」

「アクティブソナー起動!!地中深くに建造された研究所を見つけ出せ!!」

「・・・見つけた!!地下300メートルも深い場所に研究所を作るなんてよっぽど見つかりたくないんだろな」

「でも、どうやって地下300メートルまで掘り進めて行けば良いんだ？」

「ビームサーベルじゃ圧倒的に長さが足りないし……何処かに入口が有る筈だ」

「お、あそこから研究者が出てきたからあそこが入口だな」

「それじゃあ入りますか……子供達を助けに」

研究所内

ユウマ

「あまり人気は無いな……それにしてもミラーージュコロイドを追加してくれるとは、今度アマテラスさんにお返ししないといけないな」

研究員A

「おい、今日の被験者はどいつを使うんだ？」

研究員B

「今日は銀髪のがきとこの前エクステンテッド化に成功した3人のがき共を使うらしいぜ」

研究員A

「今日はナノマシンの適応実験だったな」

研究員B

「ああ、これが成功すれば超兵が完成するぜ」

ユウマ

「……救いようのない屑共だな。こいつ等の後を着いて行けば研究施設まで行けそうだな」

「今に見てろよ……地獄の底まで叩き落としてやる」

「その前に研究データを丸々コピーしておこう。それにしてもコーディネーターの演算能力はこんな時しか使いどころが無いな」

「今回は大助かりだけど……それにしても念能力者とニュータイプとコーディネーターって俺はどんだけのバケモノなんだよ……普通の人間として生きていきたいのこの有り様だと自信無くすな」

「これで研究データのコピーは終わりつと。さて、子供達を助けに行きますか」

研究室

博士

「これよりナノマシン適応実験、ならびに超兵への進化実験を始める」

「ナノマシン注入」

助手

「ナノマシン注入します」

少女

「う……ん……」

助手

「ナノマシン適応率50%を突破しました」

博士

「良い傾向だ。このままいけばナノマシンに完全適応した治療要らずの超兵完成だ!!」

助手

「博士!! ナノマシンの適合率が120%を突破しました! このまま実験を行えば被検体が死にます!」

博士

「構わん! そのまま実験を続けろ!!」

助手

「しかし!!」

博士

「私が続けろと言っているんだ!!」

ユウマ

「おっと、非道な人体実験はそこまでだ。ドイツ政府直属の特務部隊所属、ゴースト1

だ」

「これより違法な人体実験を行っている者たちを逮捕・抵抗するなら排除する」

博士

「ココまで来て邪魔をするな!!」

ユウマ

「聞き訳が無い野郎は早死にするぜ!!」

「喰らいやがれ!スタングレネード!!」

ボンツ!!

博士

「グアアアア!!目が、目がア!!」

助手

「ギアアアア!!耳が!!!」

ユウマ

「ホイっと、悪いがアンタ達を拘束させてもらうぜ」

俺は博士っぽいジジイと、助手っぽい男を気絶させて拘束した

「この子が被検体にされていた子だな。ナノマシンの過剰適合とか言ってたけど……」

少女

「ここは・・・クウ!!目が!!目が痛い!!」

ユウマ

「落ち着いて、これから君をドイツの病院まで運ぶから」

少女

「待って・・・私の他にも子供達が居ます・・・その子供達も助けて・・・」

ユウマ

「エクステンデットとか言う子供達の事かい？」

少女

「そうですね・・・その子供達も過度な人体実験で憔悴している筈です。今助けないと死んでしまいます」

ユウマ

「場所は分るかい？」

少女

「はい、案内します」

ユウマ

「分かった。俺は朝霧ユウマだ。君の名前は？」

クロエ

「クロエ・クロニクルです」

ユウマ

「クロエちゃんだね。長いからクーちゃんって呼んでも良い？」

クロエ

「はい、他の子達はアッチです」

俺とクーちゃんは一緒に子供達が監禁されている監禁部屋に向かった・・・

クロエ

「ココが他の子達が居る場所です」

ユウマ

「ご丁寧に頑丈に施錠しやがって・・・壊してやる！」

「IS部分展開、Rー展開。ビームソードアクティブ！」

俺は、ビームソードでドアノブと鍵部分を抉りぬいた・・・

ユウマ

「これでよし。子供達は無事か!!」

???

「だれ？」

???

「また実験なのかよ・・・」

???

「いい加減にしろよ!!」

ユウマ

「安心しな、俺はドイツ大統領から正式に依頼されて君達を助けに来た。子供達は君達だけか?」

クロエ

「他にも何人も子供達が居ました。でも、過酷な実験で大勢の子供達が亡くなりました・・・」

「亡くなった子供達は処分されていきました」

ユウマ

「クソツタレが!!何で命をそんな風に蔑ろに出来るんだ!!」

「頭に来た!この研究所を跡形もなく消し飛ばしてやる!!」

俺はインカムを操作してレオナさんに通信を繋いだ

レオナ

「ユウマ君、どうしたの?」

ユウマ



「子供達を保護しました。研究のデータもコピーしました」

「これから子供達を連れて地上に出ます。子供達の保護をお願いします」

「今から座標を送ります」

レオナ

「了解したわ。子供達の名前は分かるかしら？」

ユウマ

「ちよつと待つてください．．．君達の名前を教えてください？」

ステラ

「ステラ・ルーシエ」

アウル

「アウル・ニーダ」

ステイング

「ステイング・オークレー」

ユウマ

「子供達の名前が、クロエ・クロニクル。ステラ・ルーシエ。アウル・ニーダ。ステイング・オークレーだそうです」

レオナ

「スグにこっちで照会を掛けてみるわ」

暫くすると……

レオナ

「照会結果だけど、その子達の登録データは無かったわ」

「恐らくその子達は孤児か試験官ベビーの可能性が高いわね」

ユウマ

「俺……頭に來たんで、この研究所を纏めて消し飛ばしたいんですけど良いですか？」

レオナ

「構わないわ。消し飛ばすなら他の研究員達を全員連行してね」

「他にも違法な人体実験をしている研究所が有るかもしれないし、色々聞きたい事もあるからね」

ユウマ

ユウマ

「了解です」

「これから君達を地上に連れて行くけど、何か心配事は有るかい？」

クロエ

「私は目がおかしいのでこのまま地上に上がる事は出来るのでしょうか？」

ユウマ

「クーちゃん目の目はナノマシンの過剰適合が原因だろうから、病院で詳しい検査してみないと分からないけど、大丈夫だと思うよ」

「今はアイマスクを付けておけば過剰に見えすぎる事は無いと思うから付けておきな」  
クローエ

「ありがとうございます」

ステラ

「私達は定期的に薬を投与しないと動けないよ？」

アウル

「禁断症状って奴？」

ステイング

「ジジイ達が言うには肉体強化薬って言う薬らしい」

ユウマ

「筋肉増強剤の進化薬か・・・君達の体から一度薬を抜かないとダメそうだな」

「3人は暫くりハビリ生活になるかもしれないけど、ドイツ政府が最大限サポートしてくれる筈だから安心して良いよ」

「とりあえず、この天井をブチ破って君達を助け出すから、俺の近くに来てくれるか？」

クーちゃん達は俺の側に寄ってきた

ユウマ

「さて、天井と岩盤をぶち抜くには・・・高出力のビーム兵器に限るでしょ!!」

「てなわけでカモン! Hiールガンダム!!」

「エンジンに縮退炉積んでるんなら単機でも余裕でぶっ放せるだろ! ハイパー・メガ・バズーカ・ランチャー! アクティブ!」

「アマテラスさん! 上空に障害物は有る?」

A I

「上空には何もありませんよ。念のために各地の飛行場と空軍基地に通達しておきますね」

ユウマ

「上空の安全確保! ターゲットロック! ハイパー・メガ・バズーカ・ランチャー! 発射!」

ドカーン!!!

ユウマ

「レオナさん、今から地上に上がります」

レオナ

「了解よ。スグに回収班を向かわせるわ」

ユウマ

「サブフライトシステム起動、ドダイ展開。クーちゃん、ステラ、アウル、ステイング、この飛行台に乗ってくれる？」

クロエ

「分かりました」

ステラ

「みんなで乗ると狭いね」

アウル

「落ちそうなんだけど」

ステイング

「もつと大きいのは無いのか？」

ユウマ

「悪いけど、今はこのサイズしかないんだよ。近い内に大型サイズの飛行台作るから」「クーちゃんは俺が抱えれば大丈夫かな。それじゃあ地上に上がりまゝす」

地上

レオナ

「ココがユウマ君が送ってくれた座標の場所ね」

ユウマ

「レオナさん！朝霧ユウマ、任務完了で御座います!!」

レオナ

「おかえりユウマ君。その子達が助け出した子供達ね」

ユウマ

「はい、クーちゃんは今ナノマシンの過剰適合で目に障害があります。ステラたちは薬物中毒の傾向があります」

レオナ

「急いで病院に運びましょう。精密検査をしてから治療を始めるわ」

ユウマ

「では、この子達をお願いしますね」

レオナ

「ドイツ政府が責任を持ってこの子達を治してみせるわ!」

クロエ

「もうユウマさんには会えないんですか?」

ステラ

「私もまたお兄ちゃんに会いたい」

アウル

「俺らもまた兄ちゃんに会いたいよ」

ステイング

「これでお別れかよ・・・」

ユウマ

「時々お見舞いには顔出しに行くよ」

ステラ

「お兄ちゃんと一緒に居たい」

ユウマ

「俺まだ未成年だからクーちゃん達の保護者にはなれないぞ」

レオナ

「そうよね。ユウマ君まだ17歳だから法律的に保護者にはなれないし・・・そうよ！  
みんな私の養子にすれば良いのよ♪」

「勿論ユウマ君もね♪」

ユウマ

「俺もですか!!」

レオナ

「当然よ！そうすればみんな兄妹になるじゃない♪」

「それなら誰も悲しまないし、離れ離れにもならないから問題解決よ♪」

ステラ

「えつと・・・お母さん？」

レオナ

「そうよ♪今日からみんなのお母さんよ♪」

ユウマ

「相変わらず母さんは強引なんだから」

レオナ

「・・・ユウマ君、今なんて言ったの？」

ユウマ

「母さんって言いきましたけど・・・」

レオナ

「母さん・・・なんて良い響きなのかしら♪」

「ユウマ君もつと言って頂戴！」

ユウマ

「それはまた今度にしましょうね。今はクーちゃん達を病院に運びましょう」



レオナ

「そうね！思いっきり忘れてたわ。みんな救急車に乗ってくれる？」

クーちゃん達は救急車に乗り、病院に運ばれた

それから精密検査の結果、クーちゃんの目は治る事は無いが、治療の甲斐もあり日常生活を送れるようになった

でも、ナノマシンのせいで目の色が金色になってしまった・・・

クーちゃんは自分の目が金色になってしまった事に悩んでいたが、俺がアマテラスさんに相談して同じ金色の目にしてもらおうと悩む事は無くなったようだ

ちなみに俺は毎日カラーコンタクトを付けるようになったのは言う迄もないだろう・・・だって世界中探しても目の色が金色の人なんて居ないもん！

ステラ達も無事に薬から解放されて、普通の生活が送れるまでに回復した・・・

みんなが回復した後は、レオナさんが手続きを済ませて無事にみんなレオナさんの養子になった

普段は俺が住んでいる家に暮らす事になり、レオナさんも大統領専用の家を離れて俺達と一緒に暮らす事になった

俺はドイツに来て、何故か大家族の仲間入りを果たしてしまった・・・

俺が養子になった頃、東博士はと言うと・・・

母

「東、今日もテストの結果は悪いですね。毎日10点から20点の間をウロウロとしていますが、キチンと毎日復習はしているのですか？」

東

「天災の東さんが道德の勉強がこれほどまでに出来なかったなんて・・・」

母

「もつと厳しく行くべきでしょうか・・・」

東

「東さん生きていられるかな・・・ゆ〜くん、助けて・・・」

東博士がテストで100点を取るのはまだまだ先になるようだ・・・

## 日本

今日、俺は何故か日本に居る・・・

理由は仕事だけど、なんで俺がこんな面倒な仕事をしないとイケないんだよ・・・

俺の仕事とは、千冬さんがISの大会「モンドグロツソ」に日本代表として出場する為の話をするためだ

なんで態々日本代表で出場する必要が有るんだろうか・・・千冬さんは今はドイツ国籍なのに

ユウマ

「千冬さん、なんで日本代表で出場するんですか？」

千冬

「私は今回の事は断るつもりだぞ？態々面倒な事を引き受けるほどお人好しではないからな」

ユウマ

「なら、なんで日本に出向くんですか？」

千冬

「今後私達に関わらないように。それと警告の為だな」

ユウマ

「そうでしたか。まあ、俺は俺の仕事を全うするだけですけど」

千冬

「では話し合いの場所に行こうか」

俺と千冬さんは、日本政府が指定してきた場所に向かった・・・

ユウマ

「ココみたいです。何で国会議事堂なんだか・・・」

千冬

「大方日本政府のトップが出張ってくるんだろうな。適当に断って帰ろう」

総理

「お待たせしました。織斑千冬さん、今回はアナタにお願いがあります」

「今度行われる I S の大会、モンドグロツソに日本代表として出場していただけますか？」

千冬

「お断りします。私は今ドイツ人です。モンドグロツソに出場するのであれば、ドイツ

代表として出場します」

「なので、日本代表にはなりません」

総理

「・・・そうですか。分かりました、ご無理を言つて申し訳ありませんでした」

秘書

「総理！良いのですか?!」

「この機会を逃せば日本は勝てませんよ!!この際人質を取つてでも要求を呑ませるべきですー!」

ユウマ

「おい、今聞き捨てならない事を言いやがったな・・・人質を取つてでも?」

「俺の前でよくそんな事が言えたな・・・覚悟があつてそんな事ほざいてんのか?」

秘書

「私はキサマのようなガキなど知らん!!お前のようなガキが偉そうにするんじゃない!!」

ピッ

ユウマ

「今の音声はしっかりと録音させてもらったぜ?」

「俺にケンカ売るとは命知らずも良い所だな・・・俺の名前を教えてやるよ」

「俺の名前は、ユウマ・朝霧・ガーシユタイン。ドイツ大統領、レオナ・ガーシユタインの息子だ」

「今ココで起こった事を母さんにチクればお前、どうなるんだろうな？」

秘書

「私を脅す気か!!」

ユウマ

「人質取つてでも言う事聞かせようとした下種野郎にとやかく言われる謂れはねえよ」

「総理、こんな奴を秘書にしておくとは碌な事無いぜ」

総理

「そうだね、悪いが君は今日限りでクビだ。今すぐに荷物を纏めて出ていきなさい」

秘書

「クツ!!俺をクビにしたことを後悔させてやる!!」

千冬

「今ので余計に日本代表になるのは嫌になりましたのでお断りします」

総理

「申し訳ない。今日はお手数をお掛けしました」

「帰りはお送りします」

俺達は、送迎者に乗って空港まで帰ってきた……

ユウマ

「用は終わりましたし、帰りましょうか」

千冬

「そうだな、お土産を買って帰ろう」

帰りの飛行機内……

ユウマ

「千冬さんは今回のモンドグロツソには本当にドイツ代表で出るんですか？」

千冬

「ドイツから正式な打診があれば出るだろうな。まあ、ISは戦争の道具ではない事をアピールする為だったら協力は惜しまないさ」

ユウマ

「そうですね……俺はISが戦争に使えるという事をアピールしたようなモノだから耳が痛いです」

千冬

「あの時はあれしか方法が無かったんだ。それに私も同罪だ」

「1人で全てを背負おうとするなよ？」

ユウマ

「そうですね。せめてこれ以上I Sが悪用されないようにしましょう」

その時、客室後方から爆発音がした・・・

テロリスト

「アンタ達全員手え挙げな!!この旅客機は我々ブルーコスモスがジャックさせて貰ったわ!!」

「アンタ達は全員人質よ!!大人しくしなさい!!」

ユウマ

「なんで俺はこうもトラブルに遭遇するんだ・・・今度アマテラスさんに頼んで俺の運を上げてもらおう・・・」

テロリスト

「アンタ、何ブツブツ言ってるのよ!!男の癖に生意気なのよ!!」

ユウマ

「今話題の女尊男卑主義者か・・・俺は女尊男卑って考えがキライだ」



「自分自身が強くなってもいないのにISを使えるだけで偉そうに・・・お前殺すぞ？」  
テロリスト

「ヒッ!!!」

千冬

「ユウマ、落ち着くんだ。この場所で何かあれば大勢の人達が危険な目に遭う」

「ココはなるべく手短に済ませよう」

ユウマ

「そうしますかね、ちーちゃん」

千冬

「ユウマまでその呼び方は辞めてくれ・・・」

ユウマ

「ごめんごめん、それじゃあ始めますか？」

千冬

「ああ、行動開始だ」

ユウマ

「了解!! テメエ等、覚悟しやがれ!! 全員刑務所にぶち込んでやるぜ!!」

テロリスト

「男が舐めるんじゃないわよ!! I Sも使えない存在の癖に偉そうにするんじゃないわよ!!」

テロリストの女は、ナイフを取り出して俺に襲い掛かって来た・・・

ユウマ

「俺相手にナイフ一本で勝てるわけねえだろ!!」

俺は、女の腕をつかみクイツと捻ってナイフを落として遠くに蹴っ飛ばした・・・

テロリスト

「クソツ!!こうなればI Sを使つても殺してやる!!」

女は、腕に着けていたバングルを掲げるとI Sを纏つた・・・

ユウマ

「この狭い客室内で正気かよ!!お前何考えてんだ!!」

テロリスト

「五月蠅いのだよ!!アンタがこの旅客機に居なければこんな事にはならなかったのだよ!!」

千冬

「そのI Sはフランスの第一世代・ラファールゼロだな・・・となるとお前達はフランス系のテロリストだな」

ユウマ

「お前達はISを戦争にしか使えないのか!!博士の夢を侮辱しやがって!!」  
テロリスト

「夢?そんな下らないモノなんかを使うより、こんな風に戦争に使った方がよっぽど役に立つわ!!」

千冬

「・・・ユウマ、悪いが今から私がやる事に目を瞑つてくれないか?」

ユウマ

「大丈夫ですよ、母さんには内緒にしておきますから」

千冬

「ありがとう」

千冬さんは、女に近づくとおもむろに頭を掴んで持ち上げた・・・

千冬

「キサマ等は束を夢を馬鹿にした・・・生きて帰れると思うなよ?」

ミシミシ!!!

テロリスト

「ギャアアアア!!!」

ユウマ

「片手でISを纏った相手をアイアンクローって・・・俺も頑張れば出来るかな？」  
俺が千冬さんを見て考え事していると、奥からもう一人のテロリストの女が出てきた・・・

テロリストB

「どうなってるのよ!!全然ハイジャック出来てないじゃない!!」

ユウマ

「まだいたのかよ・・・五月蠅いからもう制圧させてもらうぞ」

テロリストB

「男の癖に!!」

ユウマ

「だから五月蠅いんだよ!!」

俺はテロリストの後ろに回り込み、首と叩いて気絶させて拘束しておいた・・・

ユウマ

「これで制圧完了かな？」

千冬

「そっちは終わったか？」

ユウマ

「ええ、千冬さんの方は・・・」

千冬さんの後ろを見ると、テロリストが白目を？いて泡を吹いて倒れていた・・・

ユウマ

「千冬さん、どんだけ力込めたんですか」

千冬

「安心しろ、殺してはいない」

ユウマ

「それなら良いですけど・・・ハア、国に帰った後が面倒だな」

「母さんに報告しないと」

千冬

「もうじきドイツに着く、コイツ等の身柄を警察に引き渡してからにしよう」

ユウマ

「そうですね。その後報告に行きましょう」

俺達は無事にドイツに着いたあと、馬鹿共を警察に引き渡してから今回の事を母さんに報告しに行った

官邸・・・

コンコン

レオナ

「どうぞで」

ユウマ

「朝霧ユウマ、入ります」

千冬

「織斑千冬、入ります」

レオナ

「2人共、今日はお疲れ様。日本とのお話はとうだったかしら？」

千冬

「モンドグロツソで日本代表で出場して欲しいとの事でしたが、勿論断りました。その際に色々ありましたか？」

レオナ

「何があつたのか聞いても良いかしら？」

ユウマ

「人質を取つてでも千冬さんに要求を呑ませようって言ったお馬鹿が居ました」

レオナ

「へえく……抗議した方が良いかしら？」

ユウマ

「そこは大丈夫だと思います。総理大臣が謝罪してくれましたから」

レオナ

「それなら良いわね。他には何かあった？」

ユウマ

「帰りの飛行機でハイジャックに遭遇しました」

レオナ

「ハイジャック?! それでハイジャック犯はどうしたの?!」

千冬

「私とユウマで制圧し、警察に引き渡しました」

ユウマ

「他の乗客の方達には特に被害は出さずに制圧しました」

レオナ

「二人が無事で良かったわ。千冬さんはドイツ代表でモンドグロツソに出場する？」

「もし出場するなら、専用機を準備しないとイケないけど」

千冬

「そうですね、出場した方が良いのであれば出ると思います」

「でも、今はあまり興味はありませんね。ISの本来の使い方ではないので」

レオナ

「ISは宇宙に行くための翼だものね。ユウマ君のISは宇宙に行けるの？」

ユウマ

「ロケット等で大気圏を突破すれば単機での宇宙空間での活動は理論上は可能だと思いますよ」

「試した事無いので分かりませんが」

レオナ

「その事は博士は知っているの？」

ユウマ

「教えてません。分解して調べさせて言いそうだったので」

レオナ

「それもそうですね。この事は内緒にしないとね」

千冬

「そうですね、この事を束が知ったら大変な事になりそうですし」

レオナ



「報告ありがとね、後の事は私の方でやっておくから」

千冬

「失礼します」

ユウマ

「それじゃあ母さん、無理しないでね」

レオナ

「ありがとう、ユウマ♪」

帰り道・・・

千冬

「ユウマはこのまま家に帰るのか？」

ユウマ

「帰りますよ。子供達の夕ご飯作らないといけないんで」

千冬

「子供達？いつの間に結婚したんだ？」

ユウマ

「俺、まだ18歳ですよ？結婚なんてする気はありませんよ」

千冬

「18歳?! 私と同じ年だったのか・・・」

「大人っぽいからってつきり年上かと思っていた・・・」

ユウマ

「俺は普通じゃないんで」

千冬

「学校は行っているのか?」

ユウマ

「学校は行ってません。行かなくても大学院を卒業できるほどの学力は持っているの  
で」

千冬

「ユウマも東と同じ天災タイプだったのか・・・」

ユウマ

「俺は博士みたいにな常識知らずじゃありませんよ!!」

千冬

「そうだったな、すまない」

「子供達は何人居るんだ?」

ユウマ

「4人で、一緒に暮らしてます。母さんも一緒にですけど」

千冬

「そういえば大統領がお母さんだったな」

「今度会いに行っても良いか？」

ユウマ

「いつでも来てください、みんなも喜びます」

千冬

「分かったよ。それではまたな」

「困った事があれば言えよ？相談ぐらいは聞いてやるからな」

ユウマ

「ええ、その時はお願いしますね」

俺は千冬さんと別れて家に帰り、子供達のご飯を作った

ご飯を作って皆に食べさせた後、お風呂に入れて寝かしつけて俺もウトウトしていたら母さんが帰ってくるまで一緒に寝ていた

その時の姿を帰ってきた母さんに写真に撮られて携帯の待ち受けにされていた

寝顔を写真に撮られるなんて恥ずかしすぎるだろ!!

## 誘拐

日本からのオフア―を断つてから数か月後、千冬さんはドイツ代表としてモンドグロツソに出場する事にしたそうだ

ドイツは、千冬さんの専用機を東博士と共同で製作して完成したのが東博士と千冬さんの要望を積み込んだIS「暮桜」だ

何故かドイツのISなのに日本的な名前なのは2人の好みらしい・・・

それから数週間後・・・

今日は待ちに待った第2回モンドグロツソ当日、今日俺は観客として来ているが母さんが特別席を用意したとの事で何故かVIPルームに居る・・・

ユウマ

「なんで俺はVIPルームに居なきやいけないんだ・・・直接会場に来なくてもテレビ中継で見れるんだし、それでいいじゃん」

「まあ、有事の際の保険的な役割でここに居るんだろうし、大人しく観戦してますか」

今現在、試合は準決勝だ：準決勝が滞りなく終わり、残るは決勝戦のみとなった：ユウマ

「決勝戦は・・・千冬さんとアメリカの選手か」

「今現在、千冬さんに勝てる相手ってこの世に居るのかな？」

「俺は例外だけだな。だって俺、ニュータイプだし念能力者だしコーデイネーターだし・・・完璧人外だし」

「オマケにアマテラスさんの加護も貰ってるから、本当にバケモノなんだよなあ・・・俺は目立たずに平凡に生活したかったのになあ」

「まあ、今はそのこと言っても仕方ないよな。大人しく試合を見てよう」

あと少しで決勝戦が始まろうとしていた時、俺の携帯に電話が掛かってきた・・・

ユウマ

「もしもし?？」

レオナ

「ユウマ！今VIPルームに居るの?！」

ユウマ

「大人しく観戦してるよ」

レオナ

「ユウマ、よく聞いてね。千冬さんの試合を妨害するために、女尊団体ブルーコスモスが  
一夏君を誘拐したの！」

ユウマ

「その事は千冬さんには？」

レオナ

「勿論スグに伝えたわ。ユウマにお願いがあるの・・・一夏君を助けてあげて！」

ユウマ

「了解。誘拐犯は何処に行つたか分かる？」

レオナ

「会場近くの監視カメラに西の方に走つて行く黒いワンボックスカーが映っていたわ。  
西側には多くの廃工場が有るからその何処かに潜伏している筈よ」

ユウマ

「今から助けに行つてくるから、試合までの時間稼ぎよろしくね」

レオナ

「お母さんに任せなさい！」

ユウマ

「朝霧ユウマ、一夏を救出する為に出撃します！」

俺は即座にR―1を展開し、ミラージュコロイドを起動してモンドグロツソの会場から飛び立った……

ドイツの西側 廃工場地帯

ブルーコスモス構成員達

「小僧を誘拐するだけなんて、簡単な仕事ね」

「以前織斑千冬は、我々の計画を邪魔してくれたからね……I Sの大会の大舞台で惨めに棄権をすればいいのよ♪」

一夏

「アンタ達は何で千冬姉の邪魔をするんだよ!!」

「前回のハイジャックもアンタ達の自業自得じゃねえか!!」

構成員

「ガキの癖に偉そうに言うんじゃない!!アンタは織斑千冬が棄権したらもう用済みよ。スグに殺してあげるわ」

一夏

「俺の人生ココまでなのか……」



その頃、ユウマは廃工場一帯をセンサーで調べていた

ユウマ

「生体反応は・・・あそこの建物だな」

「手早く一夏を助けだして会場に戻ろう・・・千冬さんも待つてるだろうしな」

「と言う訳で、壁を破壊して突入しよう・・・念動集中！天上天下念動破碎剣！！」

「壁を貫け！！破ア！！」

ドガガガガガ！！

構成員

「今の音は何よ！！」

「キヤアア！！壁が破壊されて・・・」

ユウマ

「子供を誘拐する馬鹿は何処のどいつだ〜」

一夏

「ユウマさん！！」

ユウマ

「一夏見つけ。お前達を拘束させてもらおうぞ」

構成員

「男がISを使っているの!! あり得ないわ!!」

「ISは女性にしか使えないはずよ!!」

ユウマ

「残念だが目の前の出来事は現実だ。まあお前達は刑務所に放り込まれるからこの現実を知ってもバレる事も無い」

俺が、誘拐犯と話していると建物の反対側から誰かが壁を破壊して入ってきた

ドカンッ!!

千冬

「無事か一夏!!」

一夏

「千冬姉!!」

千冬

「キサマ等・・・許さんぞ!!」

ユウマ

「殺すのは無しだぞ、ちーちゃん」

千冬

「分かっている、それとちーちゃんは辞めてくれ」

「さて・・・覚悟は出来ているんだろうな、キサマ等」

「地獄のような苦しみを味あわせてやる!!」

構成員

「ギヤアアア!!!」

ユウマ

「これにて一件落着つと。千冬さんはそろそろ戻った方が良いんじゃないんですか?」

千冬

「安心しろ、試合は棄権してきた」

一夏

「何で棄権なんかしたんだよ!俺の事なんか放っておけば良かったじゃないか!」

千冬

「たった一人の家族を見殺しに出来るわけが無いだろう!!私は一夏を助けられればそれでいい」

ユウマ

「千冬さん本人がそれでいいなら良いか。一夏を病院に連れて行こうぜ」

千冬

「そうだな」

俺達三人は、無事に帰る事が出来た・・・一夏もケガも無く健康体だったそうさ

それから数日後・・・

レオナ

「ユウマ、ブルーコスモスの実態は掴めた？」

ユウマ

「実態も何も、女尊男卑主義を全世界に広める事を目標にしてる新興宗教って事しか掴めなかつたよ」

「でも、代表者の名前は分かつたよ」

レオナ

「誰？」

ユウマ

「代表者の名前は、アギラ・セトメ。残忍な科学者として有名ならしいよ」

レオナ

「アギラ・セトメ・・・聞いた事があるわね。所在は掴めた？」

ユウマ

「それが全然分からない。何処かに雲隠れしてるところ」

レオナ

「分かったわ。諜報部でも調べてみるわね」

ユウマ

「了解。それじゃあ俺は帰るよ」

レオナ

「気をつけてね」

俺は仕事を終えて無事に帰宅した・・・帰ってスグに寝てしまい、気付いたら子供達に囲まれて寝ていた・・・

その光景をまた母さんに写真に撮られて待ち受けにされていた・・・恥ずかしいからやめて欲しい

## I S 起動

一夏を救出してから数か月・・・

一夏は進学するために高校の入試会場に来ていた・・・

一夏は、高校は留学したいとの事だったので日本の学校を受験するために東京にやっ  
て来ていた

箒も、一夏と一緒に留学する事にしたらしい。理由は色々あるだろうけど乙女の秘密  
と言うモノなのかな？

一夏

「日本は久しぶりだな。久しぶり過ぎて土地勘が全く無いな」  
箒

「私も土地勘が全く無い。道に迷わなければいいが・・・」

ユウマ

「その為に俺と一緒に付いてきたんでしょ？」

一夏

「ユウマさん、こんな事に付き合わせてすみません」

箒

「いつも姉さんがご迷惑をお掛けしているのに、こんな私情に付き合わせてしまつてごめんなさい」

ユウマ

「確かに博士には碌な目に遭わされてないけど、それとこれは別でしょ？」

「俺は別に学校行かなくても問題ないし、大学院卒業レベルの証明書も貰つてるから俺は好き勝手に生きる事にしてるんだよ」

「それで何処の試験会場に行くの？」

一夏

「藍越学園って言う普通科高校です」

箒

「私達は、少し世間を騒がせてしまうので偽名を使つての受験になりますけど」

ユウマ

「それもそうか。えつと・・・藍越学園はコッチだね」

移動中・・・

ユウマ

「無事に到着つと。俺は適当に時間潰してるから試験頑張つてな」

一夏

「行つてきます！」

箒

「頑張つてきます！」

ユウマ

「行つてらっしゃい」

「さて、スタ○でも行つてのんびりコーヒーでも楽しめますか。コーヒーを飲んでいると知的に見えるのは何故だろうか？」

某コーヒーショップ・・・

ユウマ

「うん、流石世界的チェーン店だな。何処でコーヒー飲んでも美味しいな」

店員

「お客様、随分お若いですけど学校は行かなくて良いんですか？」

ユウマ

「良いの良いの。俺、ドイツの学校を飛び級で卒業してるから♪」



店員

「そうなんですか!! お若いのに凄いですね・・・」

ユウマ

「俺って天才なんで」

店員

「クスッ♪不思議とおお客様がそう言うとお全然嫌味に感じられませんね♪コーヒーはおかわり自由なので何時でもお声がけくださいね」

ユウマ

「ありがとう、お姉さん♪」

店員

「では、ごゆっくり」

それから1時間程コーヒーを飲みながら時間を潰していたが・・・

ユウマ

「2人の試験が終わるまであと半日か・・・ココで半日潰すのは至難の業だな」

「近くに美味しい料理屋があるみたいだから、そこに飯を食いに行こう。ついでに散歩しに行こう」

五反田食堂・・・

巖

「らっしやい！好きな席に座りな！」

蘭

「いらっしやいませ。お冷になります」

「メニューは壁に貼ってあります。ご注文がお決まりになりましたらお声がけください」

ユウマ

「ありがとう」

「おススメは・・・業火野菜炒め定食か」

「困った時はおススメを選んでおけば間違いないだろ。すみませくん！」

蘭

「ハクイ！今伺います！」

「お待たせしました、ご注文はお決まりですか？」

ユウマ

「業火野菜炒め定食を一つと、餃子を一人前お願いします」

蘭

「ご注文承りました！お爺ちゃん、業火一つと餃子一つね！」

巖

「ハイよー！」

ユウマ

「後は、テレビでも見ながら待ってますか」

俺が、水を飲みながらテレビを見ていますと……

テレビ

「速報です!! I Sを動かせる男性が見つかりました! 名前は織斑一夏君です!」

ブーツ!!! (水を噴き出す音)

ユウマ

「何やってんだ一夏!!」

蘭

「一夏さん!!」

巖

「一坊!!」

テレビ

「織斑一夏君は、ドイツ国籍なのでドイツ本国との交渉次第では日本の代表候補生になる可能性もあるとの事です!」

ユウマ

「面倒な事になったな・・・とりあえずこの事を母さんに伝えないとな」

俺は携帯を取り出して母さんに電話を掛けた・・・

レオナ

「もしもしユウマ、久しぶりの日本は楽しんでる？」

ユウマ

「それ所じやなくなっちゃったよ。一夏がI Sを動かした」

レオナ

「・・・それ本当？」

ユウマ

「テレビで大々的にニュース報道してるよ。ドイツ本国との交渉次第では日本の代表候

補生になるかもだつて」

レオナ

「私の方にはまだ何も連絡は来ていないわよ？」

「外務省の方で何かあればスグに私の方に連絡が来るはずだし」

ユウマ

「日本が有利に交渉できるように準備でもしてるんじゃない？」

レオナ

「一夏君と箒ちゃんは今どこに居るか分かる？」

ユウマ

「今回の騒動で日本政府が何処かに匿ってるか、隔離してるんじゃないかな」  
「まあ、俺ならスグに調べられるけど」

レオナ

「なら今すぐに一夏君と箒ちゃんを救出してあげてくれる？」

ユウマ

「了解」

「すいませんけど、コンセントお借りしても良いですか？」

巖

「それは構わねえが・・・一体何するんだ？」

ユウマ

「ちよつと機密情報をハッキングしようと思ひまして」

蘭

「ハッキングですか?! そんな事したら犯罪なんじゃ?」

ユウマ

「大丈夫♪ドイツ大統領からの直々の依頼だし、一夏達を助けないといけないからね」

巖

「お前さん、一坊の知り合いか？」

ユウマ

「今日、一夏と箒ちゃんのお受験の引率みたいなものですかね」

蘭

「一夏さんはドイツに行ってたんですか？」

ユウマ

「そうそう、ドイツで篠ノ之博士共々保護して暮らしてたんだよ」

「二人とも、学校は日本の学校が良いって言ってたから今日受験に来ただけど……良し、ハッキング成功！」

巖

「俺達も見てても良いのか？こんな機密情報を」

ユウマ

「大丈夫つすよ。何かあればドイツが全面的に保護しますんで」

蘭

「お兄さんは有名な人なんですか？」

ユウマ

「俺？ドイツ大統領の息子だよ。義理だけどね」

「それに俺、ドイツ大統領直属の特務部隊の隊長だからドイツの権限も一部使えるからもし何か有れば相談してね」

巖

「お前さん、年は幾つだ？」

ユウマ

「18歳ですよ」

蘭

「三つ年上なんですね・・・」

ユウマ

「さて、一夏達は何処に居るのかな？」

俺は、藍越学園近くの監視カメラを見て調べていると・・・黒塗りのワゴン車に一夏と箒が載せられる場面が映し出されていた

ユウマ

「この車は何処の車だ？ご丁寧ナンバープレートも特別な奴付けてるな」

蘭

「分かるんですか？」

ユウマ

「まあね。日本であんまり見ないタイプのナンバープレートだから、国賓を載せるタイプの車だよ」

「それにしても目的地は何処なのかな。ドイツ国民を拉致したらどうなるか思い知らせてやるからな」

「場所は・・・国会議事堂か。俺は二人を迎えに行くかな」

「申し訳ないけど、料理は一夏達を連れて帰って来てから食べるんでその時にお願ひします！」

巖

「分かった！一坊たちを頼んだぞ！」

蘭

「気をつけてくださいいね！」

その頃、一夏達は・・・

一夏

「何でこんな事に・・・」



箒

「とんだ災難だな、一夏」

一夏

「災難どころじゃねえよ。絶対碌な事にならないよ」

総理大臣

「お待たせしたね。少々手荒な真似をしてしまい申し訳ない」

「二人には申し訳ないが、IS学園に入学して貰いたいんだ」

箒

「一夏はまだ分かりますが、なんで私まで？」

総理大臣

「君が、篠ノ之束博士の妹さんと言う事は分っているよ」

箒

「何故それを?!」

総理大臣

「以前要人保護プログラムを実行しようとした際に、君達の顔写真などは登録されているからね」

「今回の事は、マスコミが嗅ぎ付けて騒動になってしまったが我が国としても穏便に事

を済ませたい」

「出来れば二人にはI S 学園に入学して貰いたいんだ。それにI S 学園なら他国からの干渉は受けない特務規定が有るから何処かの国から干渉される心配はない」

「この事はこれからドイツ本国と協議をして決めたいと思う」

一夏

「質問良いですか？」

総理大臣

「何だい？」

一夏

「仮にI S 学園に入学するとしたら俺達はドイツからの留学生扱いですか？」

総理大臣

「そこは問題なく留学生扱いになると思うよ。無理に日本の企業に所属する必要の無いからね」

「それに君達は特例入学になるから、入学金も要らないし、寮完備・食堂は使い放題・福利厚生は破格の条件だと思う」

一夏

「食堂が使い放題・・・」

箒

「寮完備・・・」

総理大臣

「私はこれからドイツに連絡をするから少し待っていてもらえるかな？」

総理は、電話と持つと電話を掛け始めた・・・

日本にあるドイツ大使館

大使

「コチラドイツ大使館です」

総理

「私は、日本の総理だ。いきなりで申し訳ないがレオナ大統領に取り次いでいただきたい」

大使

「畏まりました、スグにお繋ぎします」

暫くすると・・・

レオナ

「お電話変わりました。ドイツ大統領のレオナ・ガーシュタインです」

総理

「日本の総理大臣の水無瀬大鉄です。今此方で織斑一夏君と篠ノ之箒さんを保護しています」

「相談なのですが、2人をI S学園に入学して貰いたいんですが・・・」

レオナ

「今回の事は、息子から聞きました。二人を匿っていたきありがとうございます」  
「ご相談ですが、前向きに検討させていただきたいと思えます」

総理改め、大鉄

「分かりました。では一度お二人をドイツまでチャーター機でお送りします」

レオナ

「ありがとうございます。その内、私の息子が其方に乗り込んでくると思えますが気にしないでください」

大鉄

「了解しました。ではスグにチャーター機をご用意します」

そんな時、ユウマが部屋に入ってきた

ユウマ

「お邪魔しまゝす！一夏と箒を迎えに来ました！」

大鉄

「今回は少々手荒な方法を取ってしまったし申し訳ない。これから空港までお送りしますのでご一緒に乗っていただけますか？」

ユウマ

「あら？随分と穩便に事が済んだのかな？」

一夏

「そうみたいです」

箒

「大統領に先ほど連絡していたので」

ユウマ

「そっか。空港行く前に寄りたい所が有るんですけど」

大鉄

「表に送迎車を用意させるから、行先は運転手に伝えてくれれば大丈夫だ」

ユウマ

「了解です。それじゃあ五反田食堂までレッツゴー！」

五反田食堂・・・

ユウマ

「今戻りました！注文はさっきのままです！3人分お願いします！」

厳

「待ってたぜ！とびつきり美味しい奴作ってやるからな！」

「一坊久しぶりだな！」

一夏

「厳さんもお元気そうで良かったです！」

蘭

「一夏さん！お久しぶりです！」

一夏

「蘭じゃないか！元気そうだな！弾の奴は如何したんだ？」

蘭

「お兄は今日学校行事で居ないんですよ」

一夏

「そっか、会いたかったんだけどな」

蘭

「タイミングが合えば帰ってくるかもしれないよ？」

一夏

「そうだな、今日は敵さんの料理を楽しみますか！」

箒

「一夏の知り合いの店か？」

一夏

「ああ、昔よくお世話になったんだ。ウチ親がいなかったから飯をどこ馳走になってたんだ」

箒

「一夏の思い出の味と言う奴か」

一夏

「まあな。滅茶苦茶美味いんだぜ」

「特に業火野菜炒めがオススメなんだよ」

箒

「そうか、一夏の思い出の味を堪能するでしょう」

敵

「お待ちどうさん！業火野菜炒めと餃子のセットだぜ！」

蘭

「お爺ちゃんの餃子は美味しいですよ♪」

ユウマ

「いただきます！」

一夏

「敵さんの業火野菜炒め・・・いただきます！」

箒

「いただきます」

ユウマ

「美味い!!」

一夏

「この味だよ!!懐かしすぎて泣けてくるぜ！」

箒

「美味すぎる!!」

敵

「そうだろそうだろ!!俺の自慢のメニューだからな！」

ユウマ

「餃子も美味い!!美味すぎる！」



一夏

「敵さん、やっぱり敵さんの料理は最高です!!」

箒

「是非ともこの味を覚えたいな・・・」

蘭

「一夏さん、I S学園には通うんですか？」

一夏

「今の所は通う方向で調整が進んでるよ」

テレビ

「速報です！織斑一夏君がI Sを動かしたことを受けて、全世界で男性を対象としてI Sの起動試験を実施するとの発表がありました！」

「早くても今月から試験が始まるそうです」

ユウマ

「ヤベエ、今のうちに雲隠れしないとマズい事になる」

一夏

「確かに・・・」

箒

「でも何処に雲隠れするんですか？」

ユウマ

「島に帰る」

一夏

「ドイツでの仕事はどうするんですか?!」

箒

「そうですよ！それに助けた子供達は如何するんですか?!」

ユウマ

「それを言われると困る・・・」

蘭

「一体何がマズいんですか？」

巖

「二坊の他にも動かせる男が居るのか？」

ユウマ

「ここに居ます」

蘭&巖

「・・・え？」

ユウマ

「だからココに世界第一号のISを動かせる男が居ます！」

蘭

「一夏さんより先に動かせる人が居たなら何で全世界にバレていないんですか？」

ユウマ

「それは徹底した情報の秘匿の成果だよ」

「それに、俺は秘境の島出身だし。ドイツで母さんの息子になるまであまり世間とは接点なかったし」

巖

「つて事は、今回の調査で世界中にISを使える事がバレちまうのか」

ユウマ

「そうなりますね。面倒だしさっさと使える事を公表しちまうかな」

「そういう訳で、飯食ったらドイツに帰るぞ。そんでもってドイツの代表候補生にでも就任する」

一夏

「特務部隊隊長なら、代表候補生にならなくても良いんじゃないですか？」

ユウマ

「それもそうだな。大統領直属なら何処の国も容易に手出しは出来ないもんな」

「ついでに一夏と箒を名前だけでも所属させておくか。母さんからメンバーは追加しても良いって言われてるしな」

一夏

「特務部隊に所属すれば、何処の国からも邪魔されませんか？」

ユウマ

「大丈夫でしょ。他国の軍隊からメンバーを引き抜くなんて並大抵の交渉じゃ出来ないし」

「それに、他国と戦争してまで男一人手に入れようとドイツに侵攻なんかすれば、俺が暴れた挙句、国が一つ滅ぶと思うから」

箒

「怖い事言わないでください・・・」

ユウマ

「まあ、そこまでするつもりは無いけどな」

一夏

「それなら良いですけど・・・」

ユウマ

「ごちそうさまでした。そろそろチャーター機も準備出来てるだろうし帰りますか」

一夏

「厳さん、ごちそうさまでした！」

箒

「ごちそうさまでした、凄く美味しかったです」

厳

「おう！また来いよ！」

「ちなみに聞くが、お嬢ちゃんは一坊の彼女か何かか？」小声

箒

「か、か、彼女?!」

厳

「まだそこまでは行ってないみたいだな。ほれ、一坊の好きなメニューを簡単に纏めておいたぜ」

「レシピも書いてあるから、これ作って一坊の胃袋掴んじまえよ？」

「男なんて単純なモンだからな、美味しいもの食わせて惚れさせちまえばこつちのもんだ。頑張れよ、お嬢ちゃん」

箒

「ありがとうございます、巖さん」

蘭

「箒さん、私負けませんからね！私だって一夏さんの事狙ってるんですから！」

箒

「私は負けないぞ？今は只の幼馴染だが、再びココに来た時に驚かせてやるからな！」

蘭

「受けて立ちます！」

箒

「ではまたな。元気にしてるんだぞ、蘭」

蘭

「箒さんもお元気で♪」

一夏

「箒、蘭と何話してたんだ？」

箒

「乙女の秘密だ」

一夏

「まあ、深くは聞かないけど。そろそろ行こうぜ」  
箒

「ああ」

ユウマ

「運転手さん、空港までお願いします」

運転手

「畏まりました」

移動中……

運転手

「お待ちせしました、空港に到着しました」

ユウマ

「ありがとうございます」

運転手

「既に話を通ってる筈なので、そのまま搭乗口まで行ってください」

一夏

「ありがとうございます！」

箒

「ここまでありがとうございます」

運転手

「お気をつけて」

ユウマ

「さて、ドイツに帰りますか」

こうして俺達3人は、ドイツに帰国した・・・



## 帰国とI S学園

俺達がドイツに帰国すると、母さんと東博士と千冬さんが出迎えてくれた

レオナ

「今回はとんでもない事になっちゃったわね」

東

「まさかいつくんがI Sを動かせるだなんて、東さんビックリだよ！」

千冬

「胸騒ぎがすると思えばこの騒動だ。一体何があったんだ？」

箒

「実は、試験会場が複合施設だったんです」

一夏

「貰ったマップ通りに進んだら何故かI Sが安置されている部屋に辿り着いたんだよ」

「よくマップ見たらI S学園受験者用って書いてあつてさ」

箒

「それで物珍しきで I S に触ったらこんな騒動になりました」

ユウマ

「今回の事は想定外で俺も一部始終は見てないし、知らないんだよ」

「食堂のテレビで見て知ったからさあ。ホントビックリだよ」

東

「とりあえずいつくんの診察をしてみよつか！」

千冬

「変な事をするなよ」

東

「分かってるよ！東さんは道德心をマスターして生まれ変わったんだから！」

「いつくんの生体情報をモニタリングするだけだよ♪」

「とりあえず研究所にレッツゴー！」

「あ！ゆくくんも一緒に来てね♪」

ユウマ

「何で俺まで……」

研究所……

束

「ではこれからいっくんとゆーくんの生体データをモニタリングしたいと思います！」

「二人とも、上着を脱いでベッドに横になつてくださーい♪」

一夏

「何でこんな事するんですか？」

束

「いっくんとゆーくんが何でISを動かせるのか解明する為なのです！」

ユウマ

「こんな事しても分からないと思いますよ？」

束

「良いから良いから♪」

俺と一夏は、博士に言われるがままにベッドに横になつた・・・

束

「うわ！ゆーくん、鍛え過ぎじゃない？何そのマッチョなボディは!!」

ユウマ

「別に普通じゃないですか？」

一夏

「一般男性はそんなにムキムキじゃありませんよ!!」

束

「とりあえずデータを取ってみようか」

データ採取中……

束

「今の所特に珍しい所はなさそうだね……身体能力は、ゆうくんはずば抜けて高いけど」「いっくんは、目立ったところは無いね」

一夏

「何かそう言われると傷付きます……」

ユウマ

「俺は別にどうでも良いけどな」

束

「ん? いっくんからちーちゃんと同じ反応があるね……何々、遺伝子レベルで99%一致?」

「ちーちゃんといっくんは双子だっけ?」

千冬

「年が離れているのに双子な訳ないだろう」

束

「だよねえく．．．もしかして遺伝子が同じだからISが反応したのかな」

「そうだとしたら納得がいくけど．．．ゆくくんの場合は何でISが使えるのかが分からないよ!!」

ユウマ

「俺は特別だからな」

束

「こうなったらゆくくんのパーソナルデータを隅々まで調べちゃうんだから!」

ユウマ

「いくら調べても分からないと思うぞ。俺人外レベルで可笑しいし」

束

「そう言われちゃうと科学者魂に火が付いちやうのたく♪」

博士は、俺のパーソナルデータを隅々まで隈なく解析していった．．．

俺のデータをいくら解析しても俺が何故ISが使えるかは分かる筈がない。何故なら俺がアマテラス様によって作られたスーパーコーディネーターで、しかも神の加護を貰っているからだ

俺のコピーやデータを流用して強化兵を作らせないとアマテラス様が調整し

てくれたそうだ

故に、俺の全てのデータはトップシークレットと言う訳だ

東

「あゝ!!!全然ゆゝくんの詳細データが汲み取れない!!」

「ゆゝくんは一体何者なの?!」

ユウマ

「俺の存在はトップシークレットなんだぜ」

東

「そこんところを詳しく教えてください!!」

ユウマ

「嫌だ」

東

「何でえゝ!!」

ユウマ

「だって博士に俺のデータ渡したら碌な事にならないさそうだから嫌だ」

東

「そんな事しないよ!! 東さんを信じてよ!」

ユウマ

「ならこの誓約書にサインしてください。これに同意するなら俺の秘密を教えても良いですよ」

東

「ハイ!サインします!」

ユウマ

「では内容の確認を・・・1つ、俺の秘密を絶対に口外しない事」

「2つ、俺の詳細データを宇宙に行くIS開発だけに使う事を約束する事」

「3つ、俺のISを無理やり解析したり、勝手に使ったりしない事」

「4つ、俺に関するデータは博士が厳重なセキュリティで管理する事」

「この約束を1つでも違えた場合、俺はこの研究所とデータを全て跡形もなく破壊します」

「これに同意する場合は、この誓約書にサインをする事」

東

「内容はしっかり確認したのでサインします!」

ユウマ

「はい、確認しました」

「それで俺の何が知りたいんですか？」

東

「ゆ〜くんがどうして I S を使えるのかを教えてください！」

ユウマ

「それは俺が神様に選ばれた人間だから」

東

「ゆ〜くんが使ってる I S は誰が作ったの?!」

ユウマ

「俺を選んでくれた神様お手製の I S です。この世界には存在しないオーバーテクノロジー  
ジーが満載です」

東

「どんなオーバーテクノロジーが搭載されてるの?!」

ユウマ

「無尽蔵にエネルギーを生み出せる動力源と、特殊な念動装置と、単機でどんな過酷な環境でも活動できる汎用性」

東



「それは宇宙でも活動できるの?!」

ユウマ

「理論上は可能だな」

東

「そのI Sを見せてください!」

ユウマ

「はい、これですよ。俺が持っているのは5機です」

東

「詳しく見ても良い?」

ユウマ

「壊さないでくださいね」

東

「壊さないよ?!」

東博士は、俺のI Sをマジマジと観察し始めた・・・

「これって誰でも使えるI Sなの?」

ユウマ

「現状、俺専用の機体です。他の人が使ってもフルスペックを発揮するのは無理です」

東

「なんで？」

ユウマ

「特殊な能力が必要になるんですよ。いわゆる超能力ですね」

「先読み能力だったり、高度な空間認識能力だったり」

「後、生まれつき強化された肉体が必要になったりもしますね」

東

「ゆ〜くんは、人工的に作られた人間なの？」

ユウマ

「受精卵の段階で遺伝子弄って生まれた人間って言えば分かりやすいかな」

「一応、人外スペックの人間ですけどね」

東

「そうなんだね・・・ゆ〜くんは私の事恨んでない？」

ユウマ

「何でですか？」

東

「だって東さんが未完成の I S を発表したせいで世界情勢がおかしくなってやって・・・」

「世界が女尊男卑主義って言う可笑しい思想に支配されたから・・・」

「世の中の男の人達が住みにくい世の中にしちゃったから・・・」

ユウマ

「俺は別にこの世界にそこまで執着してるわけじゃないし、島に戻れば平穏な生活が出るし、束さんを恨む節がありませんし」

「それに、俺は自分がしたいように生きていく方が楽なんで」

束

「ねえ、束さんはこれからどうすれば良いのかな？」

ユウマ

「俺は神様じゃないからどうすれば良いかは分かりません」

「でも、束さんは今どうにかしようと、毎日ISの研究と開発を頑張ってるじゃないですか」

「今日、俺と一夏のデータを取ってたのも、男性でも使えるISを作る為だったんでしょ？」

「なら、自分の心の赴くままにやってみれば良いと思いますよ」

「失敗したって諦めなければ何とでもなりますよ」

束

「そうだね・・・束さん頑張っちゃうよ！」

「研究に行き詰ったら、ゆうくんの手伝ってもらうけど良いかな？」

ユウマ

「別に良いですよ。仕事が無ければやる事も特に無いですし」

束

「ならこれからよろしくね、ゆうくん♪」

ユウマ

「コチラこそよろしくです、束さん♪」

それから数日後、ドイツでも I S が使える男性を探す為に大規模な検査が行われた・・・

ユウマは、仕方なく、非常に仕方なく検査会場に来ていた・・・

ユウマ

「絶対面倒な事になるじゃん、コレ」

「検査をバツクレると母さんに怒られるしなあ・・・もう検査無しで公表すればいいじゃん」

「ハア・・・憂鬱だ」

検査官

「次の方どうぞ」

ユウマ

「は～い」

検査官

「お名前をお願いします」

ユウマ

「朝霧ユウマです」

検査官

「ではＩＳに触れてください」

俺は、言われた通りにＩＳに触れると頭の中に色々な情報が流れ込んできた・・・

俺のＩＳはこんな情報流れてこないのに、なんでまたこんな無駄な情報ばかり流し込んでくるのかね・・・

検査官

「ウソ!! 新たな男性操縦者を発見! 急いで国に報告しないと!」

ユウマ

「やっぱり面倒な事になった・・・」

それから俺は、なんやかんやの手続きをして正式にドイツ専属の二人目の男性 I S 操縦者になった・・・

ついでに俺も I S 学園に入学する事になってしまった・・・何で今更学校に行かないといけないんだよ・・・

そんなこんなイベントが有って、気づけば正式に I S 操縦者になってから半年が経っていた・・・

半年の中で少し面白い事になっていた・・・

ラウラ

「隊長、本日の訓練は如何いたしましたでしょうか？」

この子はラウラ・ボーデヴィツヒ。先日、俺のゴースト小隊に入隊してきた女の子だ。何でも、束さんが違法な研究をしていた研究所から保護してきたらしい。ラウラはいつも俺の側に居て、俺の後ろを着いて来てくる可愛い子だ

ラウラも母さんが養子として引き取ったので、実質俺の妹になる。クロエ達との仲も良好で仲睦まじい光景が俺の癒しの一つになっている・・・

そんなラウラは、ゴースト小隊でISの試作機のパイロットをしている。ISの適合率が高かったので本人が望んでこの仕事に就いている

ちなみにラウラもIS学園に入学するとの事なので、同級生になる。年が離れた同級生って・・・なんか複雑な感情があるな・・・

それからまた数週間経って、今日はIS学園に向けて出発する日だ。向かうメンバーは、俺・一夏・箒・ラウラが生徒として

千冬さんと束さんは教師としてIS学園に向かう事になっている

ドイツを出発しておよそ十三時間後・・・俺達はIS学園に到着した

## 入学

俺達は、IS学園に来て、教室まで案内された・・・

ユウマ

「視線がウザイ・・・」

一夏

「気まずい・・・」

「ユウマさん、俺どうしたらいいですか？」

ユウマ

「目を閉じて無心になれ。それしか乗り切る方法は無いぞ」

一夏

「目を閉じて無心になる・・・」

ユウマ

「そのまま寝ちまえ」

一夏



「・・・グウ・・・zzz」

俺は一夏が寝たのを見届けた後は、俺も寝た・・・

キーンコーンカーンコーン♪キーンコーンカーンコーン♪

真耶

「皆さん入学おめでとうございます♪」

「今日からこのクラスの副担任を担当します、山田真耶です♪」

「これから皆さんの自己紹介をしてもらいますね♪」

自己紹介中・・・

真耶

「織斑君・・・織斑君！」

一夏

「おわっ!!」

真耶

「ごめんね、自己紹介の順番が織斑君の番なんだけど自己紹介をお願いできるかな？」

一夏

「あ、はい。織斑一夏です」

「得意な事は、家事全般・・・趣味は、散歩する事かな」

「これからよろしくお願いします」

女子達

「キヤアアアア!!!」

「爽やかタイプ的男子よ!!!」

「家事全般が得意なんて・・・私をお嫁さんにしてください!」

「イヤ、むしろお婿に来てください!!!」

プシュー（ドアが開く音）

千冬

「相変わらず五月蠅いぞ。なんでまたこんな事になったのやら・・・」

女子達

「キヤアアア!!!千冬様よ!」

「私、千冬様に憧れてこの学園に来ました!!」

「どうか私を罵って!!そしてつけあがらない様に躡けてください!!!」

バンツ!!（机に出席簿を叩きつける音）

千冬

「この学園に来る奴らは馬鹿ばかりか？そんな軽い気持ちでこの学園に来たのなら今すぐに出ていけ」

「ココはI Sの正しい使い方を学ぶ場所だ!! そのようなくだらん理由で来るな!! 真剣に学びに来たモノの邪魔だ!!」

女子達

「・・・」

千冬

「山田先生、自己紹介は終わりましたか？」

真耶

「まだ朝霧君の自己紹介が終わってません。気持ち良さそうに寝てまして・・・」

千冬

「朝霧、いい加減起きて自己紹介しろ」

ユウマ

「ん？ちーちゃんどつたの？」

千冬

「この学園では、織斑先生だ」

千冬は、出席簿で軽くユウマの頭を叩いた・・・

ユウマ

「痛っ!!自己紹介?そんなのしてもしなくても変わらないだろうに・・・」

「ドイツから来ました、ユウマ・朝霧・ガーシユタインです。得意な事は特にありません」  
「趣味もそこまで自慢するほどのモノは有りません。俺の事はあまり構わずにそつとしておいてください」

「くだらない理由で、近づかれると迷惑なので」

「これで良いですか?」

千冬

「色々と言いたい事は有るが、今回は良からう」

「良いか、お前達はこの学園にI Sの事を学びに来たI S操縦者の卵達だ」

「何事にも真剣に取り組むように」

真耶

「それでは今後の事をお話ししますね。I S学園では、クラス対抗戦を行うのでクラス代表を選出する必要が有ります」

「クラス代表は、今回は自己推薦か誰かからの推薦でも構いませんよ」

千冬

「誰か代表をやりたい奴は居るか?」

## 女子達

「ハイ!!織斑君が良いと思います!」

「私は、朝霧君が相応しいと思います!!」

「折角の男子だもん!有効に使わないとね!」

## ユウマ

「ふざけるな、俺と一夏は客寄せパンダじゃねえ。お前達のオモチャじゃねえんだよ」

「一夏、俺達は学園内を見学しに行こうぜ」

## 一夏

「そうですね、ここに居てもめんどくさそうな事になりそうですし」

## 千冬

「ちよつと待て、せめてクラス代表が決まるまで教室内には居てくれ」

## ユウマ

「面倒なんですけど」

## 小声 side

## 千冬

「ユウマ、今日はどうした?いつもより性格が捻くれてないか?」

ユウマ

「この状況で普通に居ろつてのが無理ですよ。何ですか、この珍獣みたいな扱いは」  
「女子達全員が女尊男卑主義に汚染されている訳じゃないからまだマシですけど」

千冬

「それに関しては学園の意向で、貴重な男性操縦者はバラバラのクラスにするより一つのクラスに纏めた方が管理がしやすいとお達しだ」

ユウマ

「チツ!!どうせならもつと大人しい女子達が居るクラスに入れてもらいたかつたぜ」

千冬

「少し待っててくれれば、私の方で学園長に交渉してクラスを変えてもらえるように頼んでみよう」

「最悪、束にも協力してもらえば良いからな」

ユウマ

「分かりました。出来ればラウラと同じクラスに移動出来るようにして下さい」

千冬

「確約は出来ないが、最善は尽くそう」

ユウマ

「了解です」

小声 side out

千冬

「さて、自推でも他推でも良いと言ったがお前達は何故織斑と朝霧を推薦したんだ？」

女子達

「だって珍しい男性操縦者ですよ？こんな希少なチャンスは生かすしかないじゃないですか！」

「そうですねよ！私達は他のクラスよりチャンスが多いんですから、他のクラスに男子の情報とかを売ったりできませんし」

「例え弱くても関係ありませんよ！私達が優位に立てれば良いんですから！」

???

「お待ちなさい！！アナタ方は一体何を考えているのですか！！」

「ご本人達の意志を無視して勝手に押し付けて・・・淑女として恥ずかしくはありませんの！！」

女子達

「男なんて女性の言いなりになるしか能のない低俗な存在じゃない。そんな相手にそんな感情湧かないわよ！」

「そうよそうよ！男なんて利用するくらいの価値しか無いのよ！」

千冬

「お前達、今すぐに荷物を纏めて出ていけ。私は女尊男卑主義が大嫌いなんだから……」  
S学園に屑どもは要らん」

女子達

「そんな事認められるわけじゃないですか!!今は女性中心の世界ですよ！」

「そんな自分勝手な言い分、いくら千冬様でも許されませんよ!!」

東

「屑共の気配を感じて東さん、参上!!」

千冬

「東、何をしに来たんだ？」

東

「ちよつと屑共を追放しようと思つてね♪ゆくくんもかなり頭に来てるみたいだからね」

「ここら辺でゆくくんの東さんへの印象をアップさせようと思つたのだあ♪」

「と言う訳で、これ屑共の今までやって来た犯罪紛いの証拠ね。もう学園長には伝えてあるよ」



「おい、お前達・・・今すぐにココから出ていけ。目障りなんだよ」  
女子達

「I Sを作った生みの親ってだけで偉そうに・・・」

「私達の方がI Sを上手く扱えるの!!」

東

「ハア？ 東さんよりI Sが上手く使える？」

「寝言は寝て言えよ、ガキ共が。私の方が誰よりもI Sを熟知してるんだよ」

「そんな東さんが、半人前以下の層共に負けるかよ」

ユウマ

「東さん、少し落ち着きましようね〜」

東

「はう!! ゆ〜くんの体温が東さんを包み込んでいくよ〜♪」

ユウマ

「ただ頼つぺた摘まんだだけですよ。抱きしめてるわけじゃないんですから、変な事言わないでくださいよ」

???

「お話し中の所申し訳ありません。お初にお目にかかります、篠ノ之博士。私は、イギリ

スから参りましたセシリア・オルコットと申します」

「この度は、大変不快な気分にならせてしまい申し訳ありませんでした。コチラの問題の生徒はイギリス籍のモノなので先ほど大使館と女王陛下に打診をしたところ強制送還となりました」

「直ちに大使館から担当のモノとイギリス籍の捜査官が参ります。スグにこの不屈きを排除いたしますわ」

東

「ありがとう♪もう束さんイライラしちゃってね〜。こいつ等始末しようかと思つてたんだよ〜」

セシリア

「アナタ達、イギリスに戻ったら国外追放とイギリス籍の剥奪が処されますわ。精々女王陛下への弁明でも考えていると良いですわ」

女子

「没落貴族の分際で調子に乗るんじゃないわよ!!」

セシリア

「たとえ没落していたとしても、貴族の誇りと女王陛下の名に恥じぬ行いを心掛けていますわ。それに人間の尊厳を踏みにじる最低の行為は断じて許しませんわ」

「さあ、ご退場を」

千冬

「私が摘まみ出そう。ほら、出ていけ屑共」

千冬さんは、女尊男卑主義に染まった屑共の首根つこを掴んで引きずっていった…

それから暫くして…

千冬

「済まない、想定外の事が起きてしまったがクラス代表は如何したモノか…」

セシリア

「でしたらこのセシリア・オルコットが自推いたします。これは個人的なお願いなので、織斑様と朝霧様と模擬戦をさせて頂けませんか？」

千冬

「模擬戦？」

セシリア・オルコット

「世界初の男性操縦者の方がどのような人と成りをしているのか気になりました。ご無理なら模擬戦は無しで構いません」

ユウマ

「俺は別に構わないぞ」

一夏

「俺も構わないけど、IS 持っていないんだよな」

千冬

「ふむ・・・では後日模擬戦の機会を設けよう。織斑は、学園に用意されている IS を使えるように手配しておこう」

真耶

「あら？織斑先生、たった今日本政府からこんな打診が・・・」

千冬

「チツ!! ロクでなし共が・・・束、お前の方で織斑の IS を見繕ってやれ。量産機のカスタマイズ版で良い」

束

「どうしたのちーちゃん？」

千冬

「これを見ろ」

束

「何々？織斑一夏に日本企業の IS を提供する代わりにデータを寄越せ？」

「こんなの認められないね！東さんに任せなさい！いつくんに一番マッチするISを用意してあげましょう♪」

セシリア

「朝霧様のISは篠ノ之博士がご用意するのですか？」

ユウマ

「あ、俺専用機持つてるんだよ。これでもドイツ特務部隊所属だからさ」

セシリア

「ドイツ特務部隊?!あの巨大タンカー船から要救助者を全員救い出す偉業を成し遂げたあのゴースト小隊に所属していらっしやるのですか?!」

ユウマ

「ゴースト小隊ってそんなに有名なの？」

セシリア

「有名どころではありませんわ!!世界各国でゴースト小隊を参考に日夜訓練を行っていると聞きます」

「イギリスでも、ゴースト小隊は憧れの部隊なのですよ」

ユウマ

「マジか・・・」

ヤベエ・・・そんなに有名ならR-1とかアトラスガンダムは使えないじゃん・・・  
R-2とR-3もR-1と同じコンセプトで作られている以上、絶対何処かでバレる  
可能性が有る・・・

いつその事、自分で簡単な量産機系のISを組むか・・・

小声 side

東

「ゆ〜くんも何か量産機要る？東さんの方で用意してあげようか？」

ユウマ

「お願いできますか？」

東

「この天災東さんに任せなさい！どんな感じが良いとか要望はある？」

ユウマ

「このデータを渡すんで、この中に有る量産機の外側だけ作ってください。動力炉は  
コッチで用意しますんで」

東

「外側だけで良いの？」

ユウマ

「この世界の技術レベルだと、外側を作るだけで精一杯だと思います。俺も手を貸しますんで協力してください」

「お礼はしますから」

東

「いっくんのI Sもこの中から作っても良い？」

ユウマ

「あまり派手じゃない奴なら良いですよ。機体内容は後で説明しますから」

東

「了解だよ。お礼って何でも良いの？」

ユウマ

「俺に出来る範囲なら出来るだけご希望に添えるように努力します」

東

「じゃあお礼内容は考えておくね♪この後、整備棟に行つて色々プランを練ろうね」

ユウマ

「分かりました」

小声 side out

千冬

「では模擬戦の日取りはコチラで調整しておく。何かあれば遠慮なく相談するように」

真耶

「では、本日のホームルームはこれで終わりです。この後は、寮の案内等がありますので各自割り当てられた寮に向かってくださいね」

「そこで寮生活での注意事項等の説明がありますから」

「織斑君と朝霧君は、特別寮が用意されていますので案内しますね」

移動中・・・

真耶

「ココが織斑君と朝霧君が暮らす事になる職員寮です」

一夏

「何で職員寮何ですか？」

ユウマ

「一夏、考えてもみろ・・・見ず知らずの女生徒と同じ部屋で生活・・・考えただけでも身の危険を感じるだろ？」



一夏

「確かに・・・」

真耶

「ココはセキュリティ対策もかなり強化しているので、そうそう侵入して来る人は居ないと思いますよ。入室には指紋認証とIDカードが必要なので」

ユウマ

「なら安心ですね」

一夏

「知り合いを呼ぶのは構いませんか？」

真耶

「その場合は職員棟の受付で入館手続きをしてもらえば大丈夫ですよ。一応誰が来たかを管理しないと危険ですので」

一夏

「分かりました」

真耶

「では、これがお二人のIDカードです。IDカードを読み込ませたら指紋登録をして完了です」

「少し手順が面倒なので一緒に説明しますね」

「まずIDカードを差し込みます・そして指紋認証システムに自分の両手の指紋を登録します・その後もしもの時用の認証パスワードを登録して完了です」

「ここまでで何か分からない事はありますか？」

一夏

「大丈夫です」

ユウマ

「俺もです」

真耶

「何かありましたら内線が付いていますので使ってくださいね。内線は織斑先生と私の方に繋がりますので」

ユウマ

「了解です」

一夏

「分かりました」

真耶

「では、今日はゆっくり休んでくださいね。明日から通常授業が始まりますからね、寝坊

「しちやダメですよ？」

「そう言つて山田先生は、帰つていった……」

ユウマ

「一夏、これから整備棟に行くぞ。そこで一夏と俺のISを組み上げる」

「俺の特別データを使うから、その中から好きな量産機を選んで良いぞ。東さんも協力してくれる」

一夏

「分かった」

整備棟……

ユウマ

「東さん、居ますか？」

東

「待つてたよ♪早速お宝データを見せて♪」

ユウマ

「はいはい、一夏も入つて来いよ」

一夏

「お邪魔します」

束

「早速2人のISを作る為に、ゆくくんのお宝データを见よう♪」

ユウマ

「えつと・・・俺の秘蔵パスワードを入れて、本人認証を済ませれば・・・これで閲覧で  
きますよ」

「量産機系のデータはこれかな・・・この中から好きな機体を見繕ってみな」

束

「何これ♪凄いや！こんなテクノロジーが組み込まれたISは束さんでも作れないよ  
！」

一夏

「俺、このISが良いです」

ユウマ

「ん？アストレイ系が良いのか？」

一夏

「このガーベラストレートって言う日本刀がカッコよかったので」

東

「確かに格好いいね♪他にもカスタムが出来るんだね」

「でも、このアストレイ・レッドフレームが良いの？」

一夏

「これが良いです」

ユウマ

「一夏がレッドフレームを選ぶとは意外だな。俺はどれにするかな・・・無難にジム・カスタムにしようかな」

「外側は量産機でも中身を徹底的に弄ってエースパイロット級の化け物機体に作り変えるのも面白そうだな」

「搭載武装も本来搭載していない武装もガン積みにして、ニュータイプ専用のジム・カスタムに改造しちまおう」

東

「使いたいISも決まった事だし、レッツ・クリエイティブ♪」

一夏

「レッツ・クリエイティブ」

ユウマ

「製作開始」

俺達は、模擬戦までの間は織斑先生が公欠扱いにしてくれたので思う存分開発に専念できた・・・模擬戦は2週間後に行う事になったそうだ

一夏の勉強の方は、俺と束さんでしっかり教えておいた・・・天才と天災のお勉強会はそれはもうしんどかったそうさ

2週間後・・・

束

「出来ました！いっくんのI S、アストレイ・レッドフレームです♪」

一夏

「出来た・・・俺だけのI S」

ユウマ

「レッドフレームは、もう量産機の領域を超えてる機体だから振り回されないように頑張れ」

一夏

「・・・マジですか・・・」

ユウマ

「本来初心者が使う機体じゃないからな。玄人レベルの機体だからな、毎日鍛錬を頑張れ」

東

「ゆくくんの方はどんな感じ?」

ユウマ

「出来ましたよ? デタラメスペックの機体が」

「本来搭載されていない武装も満載で正直量産機の面影はありませんね」

「I Sの世代的には第五世代くらいの性能かな」

東

「マジで?!」

「東さんも専用の機体が欲しいよ!!」

ユウマ

「俺を丸め込めたら考えましょう」

東

「ホント?! なら東さん頑張っちゃおう!」

ピロリン♪

東

「ん？ちーちゃんからだ・・・そろそろ模擬戦の開始時間だつて！」

ユウマ

「なら行きましょうか」

一夏

「ぶつつけ本番でどこまで行けるか分からないけど、頑張ってみるか」

東

「二人とも頑張つて行けく!!」

アリーナ管制室・・・

千冬

「そろそろ時間か・・・各員準備は良いか？」

ユウマ

「準備出来てます」

一夏

「問題なしだぜ」

セシリア



「準備完了ですわ」

千冬

「では1回戦は、朝霧とオルコットだ。格納庫から発進して来い」

ユウマ

「朝霧ユウマ、ジム・カスタム出る！」

セシリア

「セシリア・オルコット！ブルーティアーズ行きます！」

ユウマ

「初戦はお嬢様ですか」

セシリア

「私と踊っていただけですか？今回はISでの模擬戦ですが」

ユウマ

「生憎俺はダンスは苦手ですね・・・模擬戦で戦う事で良ければお付き合いしましょう」

セシリア

「では、私の円舞曲にお付き合いくださいな♪」

千冬

「それでは試合開始!!」

ブーツ!!!

セシリア

「お行きなさい! ブルーティアーズ!!」

ユウマ

「ファンネルか? ISにはサイコミュ技術でも搭載してるのか?」

「まあ、俺相手にファンネルは無意味だぜ!」

「インコム射出!! ターゲットを撃ち落とせ!!」

セシリア

「クツ!! 高機動状態で動きながらBT兵器を使えるなんて!!」

「私でもまだ出来ていないのに!」

ユウマ

「動きながらの攻撃は基本中の基本だぞ、お嬢さん」

「ファンネル使っている時に本体が動いてない状態なのは狙ってくれて言ってるよう  
なもんだぜ!」

「目標補足! ビームライフフル発射!!」

バシユン!!

セシリア

「ティアーズが撃墜された!!でもまだティアーズは生きていますわ!!」  
「お行きなさい!!」

ユウマ

「うーん・・・インコムだと射程に限界があるな・・・」

「こうなったら本来コイツには搭載されていない武装を解放するか!」  
「シールドビツト射出!!目標を追い詰める!!」

セシリア

「新しいB T兵器?!」

「一体幾つのB T兵器を搭載しているんですの?!」

ユウマ

「コイツ以外にも他の機体に色々積んでいるぜ!」

「今回はインコムとシールドビツトだけしか積んでないぜ」  
セシリア

「ドイツはそこまで技術革新が進んでいるのですか・・・」  
「ですがイギリスも負けてはいませんわ!!」

「相対位置予測・・・ターゲットロック!フルファイア!!」

ユウマ

「おわ!!俺の行動を予測してきたのか・・・だったら俺は連射で受けて立つぜ!」

「シールドビット射出!!ターゲットロック!乱れ撃つぜ!!」

バシユシユシユ!!!

セシリア

「キャアアア!!!」

「物凄い弾幕ですわ・・・でも私は負けるつもりは毛頭ありません!」

「目標は既に見えていますわ!!スターライトシユート!!」

パァン!!!

セシリア

「まさかダミー?!」

ユウマ

「君は凄いな・・・初めて見た攻撃にここまで食いついて来るなんて」

「でも今回は俺の勝ちだ」

俺は、ビームサーベルを引き抜きセシリアを攻撃した・・・

アナウンス

「ブルーティアーズ、シールドエネルギーEMPT Y。朝霧ユウマ君の勝利です」  
セシリア

「負けましたわ・・・お強いですね」

「流石ゴースト小隊に所属されているだけの事はありますね」

ユウマ

「ココだけの話、ゴースト小隊の隊長は俺だよ」

セシリア

「では、巨大タンカー船から人々を救い出したのは・・・」

ユウマ

「俺だよ」

セシリア

「後でその事でお話ししたい事が有ります。お時間を頂けますか？」

ユウマ

「分かった。後でエントランスで合流しよう」

セシリア

「ええ、では失礼しますわ」

千冬

「次は織斑、お前の番だ」

一夏

「ぶつつけ本番でどこまで行けるか分からないけど、やるしかねえか」

ユウマ

「頑張れ若者よ。何事も経験だ」

千冬

「一夏、勝ってこいとは言わん。負けても良い、自分が成長できるような勝負をして来

い」

一夏

「分かった。頑張ってくるよ千冬姉、ユウマさん」

ユウマ

「ここで重大事実だ。一夏、お前のレッドフレームは機動性はそれなりに高いが装甲が薄いからな」

「攻撃には当たるなよ、当たれば中々のダメージが来るぞ」

一夏

「マジですか!?!」

ユウマ

「発泡金属は、軽くて使いやすいが装甲が紙つぺら同等と思ってくれて構わない。まあ、防御シールドが有るから致命傷にはならないさ」

「男は度胸だ!当たって砕けろ!」

一夏

「何の励ましにもなっていないですよ!!」

セシリア

「織斑先生、コチラ準備完了しました」

千冬

「了解した。織斑、カタパルトで発進しろ」

一夏

「織斑一夏、レッドフレーム行きます!」

セシリア

「お待ちしてました、織斑様・・・では始めましょうか」

一夏

「俺じゃあ相手になるか分からないけど、お相手お願いしますよ」

千冬

「それでは試合開始！」

セシリア

「インターセプト！接近戦でどこまで行けるか試させていただきますわ！」

一夏

「接近戦ならコイツの得意分野だ!!ガーベラストレート!!」

ガキンツ!!!

セシリア

「間合いはそちらの方が有利ですが、懐に入ってしまったえばコチラの独壇場ですわ!!」

一夏

「ナイフの使い方が上手い!!」

「だったら俺もナイフに切り替えるだけだ!アーマーシユナイダー!」

セシリア

「私の得意な間合いに飛び込んでくるなんて・・・流石日本男児ですわね♪」

「ですが、格闘戦はココまでにしましょう・・・織斑様は射撃戦は出来ますか？」

一夏

「あまり得意ではないけどな・・・」



セシリア

「では私と射撃戦をしましょう、お互いに全力を尽くして」

一夏

「分かった。ビームライフルアクティブ！」

セシリア

「お行きなさい！ティアーズ！」

一夏

「これってファンネルか?!」

「撃墜するしかねえか!!バルカン!!」

バラバラララ!!

セシリア

「その程度ではティアーズは落とせませんわ！」

「撃墜させてもらいますわ！」

一夏

「クソツ!!狙いが定まらない!こうなったら本体を狙うしかないよな・・・」

「至近距離からの射撃なら外さねえ!!喰らえ！」

セシリア

「甘いですわ！ティアーズはまだ残っていらしてよ！」

一夏

「マズイ!!」

セシリアは、本体に残っていたティアーズからミサイルを発射した

ドカ〜ン!!

一夏

「グアアア!!」

アナウンス

「レッドフレイム、シールドエネルギーEMPTY。セシリア・オルコットさんの勝利で

す」

一夏

「負けちゃったか・・・」

セシリア

「初めてI Sを使ったのに、このレベルで操縦できるのは凄い事ですわ」

「自信を持ってくださいな。これからは共に切磋琢磨していきましょう、織斑様」

一夏

「俺の事は一夏で良いよ。これからよろしくな、オルコットさん」

セシリア

「私の事もセシリアで構いませんわ。これからクラスメイトとして、ライバルとしてよろしくお願いしますわ、一夏さん」

一夏

「コチラこそよろしく、セシリア」

試合後……

セシリア

「お待ちしてましたわ、朝霧様」

ユウマ

「ユウマで良い。それで話つてのは何だ？」

セシリア

「では、私の事はセシリアとお呼びください。お話は巨大タンカー船の事です」

ユウマ

「タンカー船がどうした？」

セシリア

「そのタンカー船に私の両親と私とメイドのチエルシーが乗っていました」

「ユウマさんのお陰で皆が助かりました、本当にありがとうございます」

ユウマ

「ちよつと待て、俺が助けたのは動力室に取り残されていた人達だけだぞ」

「家族一行を助けた覚えは無いぞ」

セシリア

「その動力室に取り残されていた一人が父です」

「父は貴族でしたが、元は船の操舵士をしていたんです」

「母と結婚してからは船乗りは引退していたんですが、火事の知らせを受けて消火に向かったのですが煙に巻かれてしまい意識を失っていたそうです」

「そんな時、ユウマさんが助けに来てくれたそうです」

「父は感謝していました。直接お礼が言いたいと」

ユウマ

「気持ちだけ受け取っておくよ」

セシリア

「この事は父に伝えても構いませんか？」

ユウマ

「俺の名前は伏せておいてくれ。色々と面倒な事になるのは嫌いなんだ」

「それと礼も要らないと伝えておいてくれ。俺はあくまで困っている人を助けただけだからな」

セシリア

「分かりました。そのように伝えておきますわ」

ユウマ

「話しは終わりで良いのかな？」

セシリア

「はい、お時間を取らせてしまい申し訳ありませんでした」

ユウマ

「気にしないでくれ。何か困った事があれば相談には乗るよ」

「俺に出来る範囲に限られるけどね」

セシリア

「その時はお願いしますわ♪」

ユウマ

「これからは友人としてよろしくな、セシリア」

セシリア

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますユウマさん」

この日、俺は新しい友人と出会った・・・

## クラス代表

模擬戦が有った次の日・・・

千冬

「先日のクラス代表の件だが、代表は朝霧とオルコットからの推薦で織斑になった。これから頑張れ」

一夏

「何で俺?!」

ユウマ

「だって俺がクラス代表になったら、勝負にならないもん」

セシリア

「私も、日夜訓練に励んでいるお陰か代表候補生の中では実力派トップクラスだと織斑先生からお墨付きを頂きましたので今回は一夏さんに代表をお譲りする事に致しました」

一夏

「俺、負けただろ!!」

ユウマ

「俺とセシリアと戦って、初心者の一夏が勝てるわけないでしょ。でも、一夏には今後成長の余地がある、と言う訳で今後の一夏の成長に期待して推薦しました♪」

セシリア

「一夏さんは、これからしっかりと鍛錬を積みあげれば候補生以上の実力になれる可能性がありますわ」

「私達がサポート致しますので頑張りますよ♪」

一夏

「分かった。何処まで行けるか分からないけど推薦された以上頑張ってやらせてもらおうよ」

生徒

「せんせえ、どうしてゆくゆくがクラス代表になると勝負にならないんですか?」

千冬

「布仏の疑問は当然か。朝霧はドイツの特務部隊に所属している」

「織斑と篠ノ之も一応所属しているが、まだ実力的にはひよっ子だな」

布仏



「特務部隊？」

千冬

「ドイツ軍特務部隊、通称ゴースト小隊。ドイツ国内では知らないモノは居ない伝説レベルの特務部隊だ」

「設立されたのは割と最近だがな」

生徒

「最近設立されたばかりなのに何でもう伝説レベルなんですか？」

千冬

「簡単な事だ。誰もが助けられないと絶望した災害現場から、全ての要救助者を救い出す偉業を常に成し遂げているから伝説レベルの部隊なんだ」

「世界的には知られていないだろうな。なんせ、ドイツが朝霧を守るために徹底的に情報が流れない様になっているんだからな」

生徒

「それは部隊の隊長さんがやっているんですか？」

千冬

「そうだ。他にも、もう一人部隊に所属している奴がいる」

「最近は二人組で様々な災害現場に救助に行っていたがな。これ以上は機密情報漏洩に

引っ掛かる可能性があるから説明は出来ん」

「もし知りたければ、捕まる事覚悟で調べてみると良い」

生徒

「調べて捕まるんならやりませんよ!!」

千冬

「それが賢明だな。では授業を始める!」

それから授業は滞りなく進み、お昼休みになった・・・

食堂

ユウマ

「おぼちゃん、カレーライスとラーメンと餃子をセットでお願い」

おぼちゃん

「お兄ちゃん食べるねえ。スグ用意するから待つてな!」

一夏

「俺は、かき揚げそばと天丼セットをお願いします」

箒

「私は、サラダうどんセットをお願いします」

セシリア

「私は、サンドイッチセットと紅茶のセットをお願いしますわ」

ラウラ

「私は、カレーライスを頼む」

おばちゃん

「ハイよ♪出来上がり次第呼ぶから待つてな」

セシリア

「ユウマさんは、一度にそんなに食べて大丈夫なんですか？」

ユウマ

「俺は、ちよつと特殊でね。脳みその方で必要以上にエネルギーを使うんだよ」

「だからハイカロリーの食事を摂らないと時々眠くなるんだよね」

セシリア

「BT兵器の適性を持つ私はそんな事にはなりませんのに・・・」

ラウラ

「兄さんは、過度なBT適性がある故に常にそんな感じだぞ」

セシリア

「お兄さん？ 兄妹と言う割には似ていませんね」

ユウマ

「俺とラウラは義兄妹だからな」

ラウラ

「ドイツに帰ればまだ4人の弟達と妹が居るぞ」

「こう見えても私達は、大統領の子どもだからな」

セシリア

「大統領の子どもなんですか!!」

ユウマ

「俺達はみんな養子だからな。母さんに引き取られて今に至るし」

ラウラ

「私達は、みんな仲良しの兄妹だからな」

セシリア

「兄弟が居るのが羨ましいですわ・・・私は一人っ子なので」

ユウマ

「例え兄弟がいなくても家族が居れば良いじゃないか」

「それに、友達を沢山作れば楽しくなるよ」

セシリア

「そうですね・・・」

ユウマ

「それに、俺達はもう友達だろ？」

セシリア

「ユウマさん・・・ハイ♪」

箒

「そっちのクラスは良い感じのようだな」

一夏

「2組は如何なんだ？」

箒

「相変わらず女尊男卑主義に支配された馬鹿が居たよ」

「姉さんがブチ切れて、即退学処分になったよ」

一夏

「そっちもか・・・」

「コツチも千冬姉と束さんとユウマさんとセシリアがキレて早くも二人が退学処分になったよ」

ユウマ

「どのクラスも変わらないな。俺がその気になれば世界を滅ぼせることを公表して恐怖で世界を支配するか?」

一夏

「洒落にならないんでやめてください」

箒

「姉さんがノリノリで賛同しそうなんでやめてください」

ユウマ

「半分冗談だ。最悪そういう事になるかもしれないという可能性の話だ」

「これ以上女尊男卑主義者が俺の前に現れなければやらないさ」

布仏

「あ、ゆくゆく達だあ!私とかんちゃんも一緒に食べても良い?」

ユウマ

「構わないよ」

布仏

「改めまして、布仏本音で〜す♪長いので、のほほんさんて呼んでね〜♪」

箒

「更識箒です。一応日本の代表候補生をやってます」

ユウマ

「朝霧ユウマだ。またの名を、ユウマ・朝霧・ガーシユタインだ。ユウマで良いよ」

一夏

「織斑一夏だ、俺の事も一夏で良いよ」

箒

「篠ノ之箒だ、私の事も箒で構わない」

セシリア

「セシリア・オルコットです、セシリアとお呼びくださいいな」

ラウラ

「ラウラ・ガーシユタインだ、ラウラで良い」

簪

「ガーシユタイン？二人は兄妹なの？」

ユウマ

「義兄妹だ。全然似てないだろ？」

ラウラ

「私と兄さんは固い絆で繋がった家族だ」

「それと私の上官でもある。立派な上官殿だ」

簪

「上官殿？」

本音

「二人はドイツ軍の特務部隊に所属してるんだって〜」

簪

「特務部隊ってゴースト小隊の事？」

ユウマ

「そうだよ。これは内緒だけど俺が隊長で、ラウラは俺直属の部隊員だ」

簪

「え、それじゃあドイツで色んな場所に救助に行ってるのって・・・」

ユウマ

「それ、俺」

簪

「・・・サインください!!」

ユウマ

「サインって俺の？」

「新手的勧誘か何かか？」



簪

「違いますよ！」

本音

「かんちゃんはねー、ロボットとかが大好きなんだよー」

簪

「少し前、ネットでドイツの記事を見たんです。そこにカッコいいロボットが写っていらんす」

「そのカッコいいロボットを一目見て、凄いと思ったんす。是非会ってみたいって」

ユウマ

「その時にどのIS使ってたのかは知らないけど、実際に会って見た感想は？」

簪

「意外と普通の人だなって」

ユウマ

「そりやそうだよ。俺一般人だもん」

ラウラ

「兄さんが一般人？兄さんは常に規格外の存在だぞ？」

「単身一人で巨大船に乗り込んで取り残された人達を全員助け出したり、違法な研究を

している研究所から被検体にされていた子供達を全員助け出したり、ISを使ってテロ行為をしていた女尊団体を1人で壊滅させてきたりと、一般人ではとても出来ないぞ？」

「それに白騎士事件で、白騎士が来るまでの間を単身一機で乗り切る時点で規格外だろう」

ユウマ

「ラウラ！白騎士事件の事は機密事項なんだから言っちゃダメでしょうが!!」

ラウラ

「しまった・・・今の事は聞かなかったことにしてくれ」

セシリア

「そんな機密情報をサラツと言わないでください!!」

簪

「なら、あの青いロボットと赤いロボットに乗っていたのって・・・」

ユウマ

「・・・俺だよ」

「くれぐれもこの事は内密に頼むぞ。バレたら世界中から追われて面倒な事になる」

簪

「ですよね……その後、日本中であのロボットは何者だ！捕まえて解析しろって騒いでましたから」

本音

「あの時は凄かったね。更識家でも情報を集めろって国からお達しが来てたもんね」

簪

「あの時はお姉ちゃんが気の毒だったな……忙しすぎて倒れちゃったし」

ユウマ

「なんかゴメン……」

「はい、俺のサインと俺の秘蔵のI Sの写真を何枚かあげる」

簪

「秘蔵の写真？」

ユウマ

「俺の持つてる専用機の写真。何処の国も知らない超秘蔵レアアイテムだよ」

簪

「カッコいい!!」

ユウマ

「そろそろ昼休憩が終わるから、何か聞きたい事が有れば何時でもどうぞ」

「大概は、整備棟か自室に居ると思うから。これ俺の連絡先ね」

「I Sの整備からI Sの設計、開発まで何でもご相談受け付けております！」

「それじゃあね〜」

簪

「はい・・・」

本音

「かんちゃん・・・」

この時、簪さんの顔は少し覚悟を決めた顔をしていた・・・

## I Sを作ろう

今日、学園は休みだ

俺は事前に整備室の休日使用の申請を出しておいたので、今日は朝から自分のI Sの整備だ

アマテラス様から貰ったI Sは、基本的に整備無しでも運用できるけどいつも自分が使う相棒なので偶にはメンテナンスしたいんだよなあ

俺が、R-1・R-2パワード・R-3パワード・Hi-ルガンダム・アトラスガンダムをハンガーに掛けてとりあえず装甲面を磨こうとした時、電話が掛かってきた

ユウマ

「はい、朝霧ですけど」

簪

「簪です。ユウマさんに相談が有るんですけど・・・」

ユウマ

「今、第三整備室に居るからおいで」

簪

「分かりました」

数分後……

簪

「お邪魔します」

ユウマ

「いらつしやい。それで、相談事は何かな？」

簪

「ユウマさんは、I Sを作れますか？」

ユウマ

「出来るよ。設計図と資材があればね」

「俺が作るとスペックがおかしい事になるよ？今ハンガーに吊るしてあるこの機体みたいに」

簪

「これが、白騎士事件で使われたI S……」

ユウマ

「これが俺のI S……Rシリーズとガンダムだ」

簪

「ガンダム・・・カッコいい・・・」

ユウマ

「それで、なんでＩＳを作りたいの？」

簪

「私のＩＳは、開発途中で計画自体が凍結されてんです」

「世界初の男性ＩＳ操縦者用のＩＳを作る為に・・・」

ユウマ

「ハア？俺達は既に専用機持つてるぞ？」

「それに日本製のＩＳを使う道理が無い。俺達ドイツ籍の人間だし」

簪

「倉持技建が勝手に作って、使わせようとしたみたいです」

「でも、織斑先生と東先生が猛反対の抗議と脅迫をして中止になったみたいです」

ユウマ

「なるほど・・・あの時のメールはそういう事か」

「それで開発が凍結されたＩＳは今は如何してるの？」

簪

「私と協力してくれる人達と少しずつ組み立てています。でも私達ただだと出来ない所があつて困つてるんです……」

ユウマ

「だったら、東さんに言えば協力してくれるんじゃない？」

簪

「東先生は、ゆくくんなら簪ちゃんの好きなロボットにしてくれると思うから聞いてみたら？つて」

ユウマ

「俺に丸投げしたな……まあ、協力するのは構わないけど俺が協力するのは出来ない所だけだけどそれでも良い？」

簪

「構いません」

ユウマ

「なら俺のI Sのメンテナンス終わったら案内してくれる？」

簪

「分かりました。ユウマさんのI Sのメンテナンスする所見ても良いですか？」

ユウマ



「別に良いよ。特に目立ったことしないけど」

俺は、ISの装甲を綺麗に磨いていった・・・

ユウマ

「とりあえず俺の方は終わったから、簪さんのISがある所まで案内よろしく」

簪

「分かりました。コッチです」

## 第6整備室

簪

「これが私のIS・・・打鉄式式です」

ユウマ

「外側は、大体完成してる感じかな？」

簪

「はい、でも中身が未完成なんです」

ユウマ

「プログラムとかが出来てないの？」

簪

「はい、マルチロックオンシステムが未知のプログラムで全然進まないんです」

ユウマ

「マルチロックオンシステムねえ……それは絶対に必要なの？」

簪

「山嵐っていうミサイルポットを搭載しているので、その武装を完全に使いこなすには如何してもマルチロックオンシステムが必要なんです」

ユウマ

「なるほどね……パソコン借りても良い？」

簪

「大丈夫ですけど……」

ユウマ

「えっと……マルチロックシステムを構築開始」

「複数機をロックする際のプログラムの干渉を排除……マルチロックのスムーズ化を最優先に再構築」

「不要なプログラムの排除及び不具合を起こしている箇所の修正」

「ついでに武装展開時のタイムラグを完全に無くして、瞬時にマルチロック出来るように再調整」

「ターゲットロック後のミサイル発射のタイムラグを廃止」

「ハイパーセンサーの感度を搭乗者に負担が掛からないレベルで感度を再調整」

「ISのリンクシステムを再調整。搭乗者の動きを確実にトレースできるように調整」

「シールドエネルギーの無駄が無くなるように使用時のエネルギー効率を向上」

「ミサイルの残弾を大幅に増量出来るように拡張領域内を整理して、搭載武装もコンパクトになるように容量を調整」

簪

「……」

ユウマ

「出来た。これをISにプログラミングすればマルチロックオンシステムはもちろん使えるし、他の所も修正してくれるようにしておいたから」

簪

「ユウマさんは、一体何者なんですか？」

ユウマ

「俺？規格外のスペックを持った人間かな」

「他にも天才的頭脳と桁外れの身体能力とか、まあ要するに超人並みの人間って事だね」

簪

「超人並みの人間・・・」

ユウマ

「試しにI Sにプログラム入れてみたら？」

簪

「分かりました。インストール開始」

ユウマ

「他に何か困った事はある？」

簪

「この打鉄式式の見た目を変える事は出来ますか？」

ユウマ

「別に出来るけど、折角みんなで作ったI Sを一度分解しないといけないからオススメ

はしないよ」

簪

「そうですか・・・」

本音

「話しは聞かせてもらったよ、かんちゃん!!」

虚

「お嬢様のお好きなように作り変えましょう」

生徒達

「簪さんは、ロボットが好きだったもんね♪」

「折角だし、倉持技建が返せって言って来ても門前払いできるくらいに魔改造しちゃおうよ♪」

簪

「みんな……」

刀奈

「簪ちゃん……いい友達を持ったね♪」

簪

「お姉ちゃん……うん、私は良い人に巡り合えたんだね」

ユウマ

「とりあえず改造する方向でいくとなると、どんなロボットにするかが問題なんだけど」

「ガンダムが良いです！」

ユウマ

「即決かい……この紙に今の所資材があれば作れるリストがあるから好きなの選んでね」

簪

「ガンダムが一杯!!」

ユウマ

「後悔の無い選択をしてね」

それから暫くして……

簪

「ユウマさん、私このヘビーアームズが良いです!」

ユウマ

「この機体、射撃専用のガンダムだよ?」

「格闘戦は殆んど出来ないけど良いの?」

簪

「良いんです。このヘビーアームズがカッコよくて気に入ったので」

ユウマ

「簪さんがそれで良いなら、俺からは特に言う事は無いよ。ちなみに、打鉄式を完全に分解して一から作るから、結構時間掛かるけどそれでも良い?」

簪

「はい、みんなで協力して作るので時間が掛かっても構いません」

ユウマ

「了解。ガンダムを作るにはどうしても難しい部分があるから、俺がそこはやるからみんなは出来そうなところはやってみてね。これ、設計図ね」

本音

「分かりました〜♪」

ユウマ

「俺は、動力系統の部品作ってくるからみんなで作業を進めててね」

俺は、一度整備棟を出て第三整備室に戻った……

ユウマ

「アマテラス様、縮退炉じゃない動力系統の設計図って有りますか？」

アマテラス

「彼女が使うとなると……ニュートロンジャマーキャンセラー等は如何ですか？」

ユウマ

「却下です！核エンジンは駄目です！」

アマテラス

「そうですね……では、簡略化したトロニウムエンジンは如何ですか？」

「大幅に簡略化していますので、デメリットもありませんし出力調整も簡単ですよ」

ユウマ

「トロニウムエンジンか・・・簡略化されているなら大丈夫そうですね。その設計図を送ってくださいますか？」

アマテラス

「私が作ったモノが有りますので現物を送りますね」

ユウマ

「随分と小型だな」

アマテラス

「I S用に小型化しましたからね。何かありましたらいつでも相談してくださいね」

ユウマ

「お手数お掛けします」

「さて、動力炉は手に入ったから・・・残りはボディ系統だけだな」

「後は、彼女達にお任せしますか」



## みんなで I S 開発

簪さん達が I S を作り始めて、数日が経過した・・・

ユウマ

「簪さん達の進捗はどんな感じかな」

本音

「ゆ〜ゆ〜！かんちゃんのお I S で分からない所教えて〜」

ユウマ

「ん？良いよ。何処が分からないの？」

本音

「電気回路と駆動系統の図面が分からないの！」

ユウマ

「了解。今日の放課後整備棟に行くよ」

本音

「待ってるね〜♪」

放課後・・・

本音

「ゆ〜ゆ〜、整備室行こ〜」

ユウマ

「はいはい」

第6整備室・・・

本音

「到着〜!!」

ユウマ

「それで、電気系統と駆動系統は全部分からないの？」

本音

「全く全部分かりません！」

ユウマ

「そうなのね・・・図面貸してくれる？」

本音

「はい」

ユウマ

「えつと・・・ココはこうして、コッチはココとコッチの回路を組んで、駆動系は・・・こう組み込めば・・・ほい、これで大丈夫だよ」

「試しに起動プログラム動かしてみ」

本音

「は〜い！プログラム起動します〜す！」

テスト用の起動プログラムを動かすと・・・

ヒビヒビッ

IS

「起動テスト開始します」

ユウマ

「これで機動は無事に完了だよ。あと、分からない事はある？」

本音

「かんちゃんか、外部装甲の製造が上手くいかないって言っていました」

ユウマ

「外部装甲か・・・東さんに協力してもらおう方が良いかな・・・」

東

「呼ばれて飛び出て、東さん登場！」

ユウマ

「何処で聞いてたんですか、東さん」

東

「ゆ〜くんが居る所に東さんは大体居るのさ♪」

ユウマ

「まあ、細かい事は今更気にしません。それで、東さんは協力してくれるんですか？」

東

「ゆ〜くんが東さんをギュツと抱きしめてくれたら協力しましょう♪」

ユウマ

「まあ、それ位なら良いか・・・東さん、おいで〜」

東

「わ〜い♪ゆ〜くん大好き♪」

ユウマ

「はいはい。東さんは、以前に比べて優しく可愛くなりましたね〜」

東

「東さんは、ゆ〜くに相応しい女性になる為に努力したんだよ♪」

ユウマ

「それは嬉しいですよ。俺をその気にさせたら、東さんの望む関係にもなれるかもしれませんよ」

東

「東さん、もつと頑張る♪」

ユウマ

「それで、話は戻りますけど・・・ISの外部装甲を作りたんですけど、協力してくれますかね？」

東

「東さんに任せなさい!! IS学園にある機材を使って、かんちゃんに相応しいガンダムを作つてあげましょう!」

「本音ちゃん! みんなを集めて来るのだ!!」

本音

「あいあいささ!!」

本音は駆け足で、いつもISを製作してるメンバーを集めに行った・・・

本音

「みんな集めてきました!」

簪

「東先生、私のI S制作を手伝ってくれるんですか？」

刀奈

「良かったね、簪ちゃん」

虚

「お嬢様、これで最高のI Sが作れますね」

生徒達

「I Sの生みの親が協力してくれるんだから、物凄いのが作れるよ！」

「カッコいい最高のガンダムを作ろうね♪」

束

「若いつて素晴らしいね〜」

ユウマ

「東さん、ガンダリウム合金をどうやって作るんですか？」

「俺、正確な作り方なんて知りませんよ」

束

「忘れてた〜!!」

「ガンダリウム合金が無いと、ガンダムじゃないじゃん!!」

## 簪

「なら、ガンダムは作れないんですか？」

ユウマ

「・・・仕方ない。俺の秘密の伝手を使う」

「ちよつと席を外すよ・・・」

「さて、アマテラスさん・・・ガンダリウム合金の作り方を教えてください」

アマテラス

「はいはい！神様である私に任せなさい！」

「簡略化したガンダリウム合金の設計図をパパッと書いて送りまゝす！お礼は、ユウマさんの愛の告白で良いですよ♪」

ユウマ

「アマテラス様、大好き♪」

アマテラス

「ごちそうさまです♪出来ましたよ！劣化版ガンダリウム合金の設計図でゝす」

「ユウマさんのパソコンに送っておきますね」

ユウマ

「ありがとうございます。今度こつちの世界に遊びに来てください」

「精一杯おもてなししますよ」

アマテラス

「なら後日、お忍びで遊びに行っちゃいますよ♪」

ユウマ

「待ってますね。さて、パソコンから設計図取り出さないと・・・」

「えっと・・・有った、この設計図だな。ダウングレードされてるけど、性能はオリジナルと比べても30%減に収まっている」

「これならI Sに使うには丁度いいな。ご丁寧に合金の生成方法まで書いてくれてあるな・・・アマテラスさんは、最高の神様だよ」

「お待たせ。ほい、ガンダリウム合金の設計図」

「作り方は、しっかり書いてあるからこの通りに作れば出来るよ」

簪

「緻密な設計図・・・とても学生が作ったとは思えない・・・」

束

「流石ゆ〜くん!! 束さんを凌ぐ天才っぷりだね♪」

ユウマ



「この設計図書いたの俺じゃないですよ。俺の秘密の知り合いに書いてもらいました」  
東

「その人紹介して!!」

ユウマ

「無理です。その人に会えるの俺だけなんで」

「俺は骨組みを組み立ててるから、ガンダリウム合金の生成頑張ってるね」

本音

「ゆ〜ゆ〜、ありがとう♪」

ユウマ

「さて、基本骨格はヘビーアームズだから・・・高速で動くタイプじゃないから、内部骨格は頑丈タイプだな」

「金属疲労を起こさない様に、適度に荷重を逃がせる基本設計が必要だな」

「こういう、設計系の作業はやって楽しいな。細部にスポット溶接を施して・・・頑丈でありながら程よく軽量化も可能にした、俺謹製の内部骨格の完成だ!」

「東さん、俺の方は無事に出来ましたよ〜」

東

「ゆ〜くん、早すぎだよ!!コッチは、まだ全然出来てないよ!!」

ユウマ

「合金の生成って時間掛かるんですね．．．俺、帰っても良いですか？」

東

「駄目だよ!! ゆくくんが居ないと、ガンダム作れないじゃん！」

ユウマ

「だったら、その設計図貸してください」

東

「はい。ゆくくんが作ってくれるの？」

ユウマ

「合金の生成は、本来ならもつと大掛かりな設備が必要ですけど．．．3?プリンターで作る事も可能なんですよ」

「合金の組成式をパソコンに入力して．．．材料にココに書いてある素材をセットして、プリント開始っと」

俺がボタンを押すと．．．ガンダリウム合金が生成されていった

東

「ウソ?! 3?プリンターで、ガンダリウム合金作れるの?!」

本音

「スゴ〜イ♪どんどん出来てくるねえ♪」

簪

「こんな方法で合金を作れるなんて・・・」

刀奈

「私も初耳だわ・・・こんな簡単に合金を作れるなんて・・・」

虚

「これは公には出来ませんね・・・他の国がこぞつて奪いに来ますから」

束

「束さんでも知らなかったな〜」

ユウマ

「外装甲の出来上がりつてね。これを内部骨格に取り付ければ外側は完成だよ」

束

「さあ、みんなで組み立てよう!!」

ユウマ

「動力炉の最終チェックしないと・・・トロニウムエンジン始動」

トロニウムエンジンは、淡い青色に光り、静かに動き出した・・・

ユウマ

「トロニウムエンジンって、こんなに静かに動くんだな・・・俺の縮退炉積んでるR-2とは大違いだな」

「縮退炉って、異次元レベルの出力を出すから意外に中まで音が響くんだよな・・・SRXに合体したらどうなるんだろ？」

「オマケに、Hi-レガンダムのハイパー・メガ・バズーカランチャーをラーカイラムからのエネルギー供給無しでぶっ放せるから、本当に規格外なんだよな」

東

「ゆ〜くん！組み立てが終わったよ！」

簪

「これが・・・私のガンダム・・・」

本音

「カッコいい♪」

刀奈

「これがみんなで作った、簪ちゃんのI S・・・ガンダムヘビーアームズ・・・」

虚

「これは、倉持技研が奪い取ろうとして来るかもしれませんね」

生徒達

「その時は、門前払いにしましょう！」

「そうですよ！一方向的に簪さんのISを途中放棄したくせに凶々しいんですから追い返すのが正解です！」

ユウマ

「簪さん、これガンダムのエンジン。簪さんが組み込めば、このガンダムは新しい命を宿して生まれるんだ」

「記念すべき、エンジンに火を入れる点火式みたいな感じかな」

簪

「新しい命を宿す……」

刀奈

「私のISには、こんな記念すべき点火式は無かったわ」

「良いなあ、簪ちゃんだけズルい〜！」

東

「そんなこと言うなら、刀奈ちゃんもみんなでガンダム作れば良いんじゃない？」

虚

「そうなるよ、今使っている霧の淑女はロシアに返す必要が有りますね」

刀奈

「だったら、私このI Sをロシアに返すわ！返して、簪ちゃんと同じガンダム作るわ！」  
「と言う訳で！みんな、私のI S作りに協力してね♪」

ユウマ

「めんどくさいから却下」

東

「ゆ〜くんがやらないなら、東さんもやらない！」

刀奈

「何で?!」

ユウマ

「だって、新しくガンダム作るの大変なんだもん」

「それに、ガンダリウム合金をポンポンと作るわけにはいかないだよ」

東

「ぶっちゃけると、ガンダム自体がI Sの括りに当てはまらないんだよね」

「こんな規格外なロボットを何機も作ると、世界戦争になる可能性が有るんだよ」

虚

「そうですね・・・このスペックを目の当たりにすれば間違いなく世界各国は、どんな手を使ってでも手に入れようとするでしょうから」

本音

「今のISって第三世代が出始めた頃だもんね」

簪

「ユウマさん、ガンダムって第何世代に当てはまるんですか？」

ユウマ

「第八世代くらいじゃない？ぶっちゃけ分からないんだよね」

「俺の機体もそうだけど、今の時代には早すぎる産物なんだよ」

刀奈

「ガンダムって、戦争の火種になるの？」

ユウマ

「十分なるね。ガンダム自体が本来は戦争用の道具だからな」

「何処の国がちよっかい掛けて来るかは分からないけど、無暗にガンダムを作って全世界に公表すれば間違いなく命を狙われることになる」

「それでもガンダムが欲しいの？」

刀奈

「なら、どうして簪ちゃんにはガンダムを与えたの？」

ユウマ

「簪さんが真剣な顔をしていたから。真剣に考えて、ガンダムを作りたいと思ったなら俺は協力するけど、興味本位でガンダムを作ろうとするなら俺は敵対してでもこの設計図と秘匿技術は守り抜く」

「まあ、後で俺との約束事を書いた誓約書にサインはしてもらおうけどね」

「それに、全世界がどんな手を使ってこようが、俺は世界の全てを滅ぼせるだけのチカラは持っているからな」

刀奈

「だったら、世界と戦う覚悟が有ればガンダムを持てるの？」

ユウマ

「本当に世界と真っ向から戦う覚悟が有るならな」

刀奈

「分かったわ。世界のクズな大人達からガンダムを守り抜くから、私にガンダムを作ってください！」

ユウマ

「なら、この中から好きなものを選びな。簪さんとお揃いは無理だが、ガンダムウイングシリーズから選べば同じ系統にはなる」

刀奈



「・・・なら、このウイングガンダムゼロにします」

ユウマ

「その機体は辞めときな。碌な未来が待つてないし、自分の精神が崩壊するよ」

刀奈

「そんなに危ないガンダムなんですか？」

ユウマ

「ガンダムに搭載されているゼロシステムが問題なんだよ。コイツは、パイロットに様々な未来を見せるんだよ」

「碌でも無い未来とかをな。それを見せられたパイロットは、最終的におかしくなる」

「それが嫌なら、もっと安心できるガンダムを選んだ方が良い」

刀奈

「ユウマさんのおススメはどれなの？」

ユウマ

「そうだな・・・近距離系ならガンダムサンドロック・近距離から中距離ならシェンロンガンダム・隠密接近系ならデスサイズヘル・遠距離系なら普通のウイングガンダムかな」  
「他にも候補出した方が良いならまだ有るけど」

刀奈

「出来れば、他にも候補が有ればお願いします」

ユウマ

「俺的には・・・使い易さで言えば量産機のジム系が良いかな。どうしてもガンダムが良いなら、陸戦型ガンダムが使い易いかな」

「でも陸戦型だから飛行は出来ないし、武装が限られてくるから特定の用途以外ではオススメは出来ないな・・・無難にSEEDのガンダムならそれぞれ用途に分けて設計されてるからこの中から選ぶのが良いんじゃない」

刀奈

「SEED系の機体から・・・」

ユウマ

「バランス重視のストライクガンダム・変形出来るトリツキーなイージスガンダム・偵察が得意なブリッツガンダム・強襲が得意なデュエルガンダム・遠距離攻撃がメインのバスターガンダム」

「扱うには少し特殊な技能が必要なプロヴィデンスガンダム・コーディネーターと言う人工的に遺伝子を弄くった人間じゃないと上手く使いこなせないフリーダムガンダムとジャスティスガンダム」

「ストライクガンダムの進化系のインパルスガンダム・様々な武装の種類が有るザク・こ

れまたコーディネーターじゃないと上手く扱えないデスティニーガンダムとストライクフリーダムガンダムとインフィニットジャスティスガンダム」

「量産機系でも良ければ、アストレイシリーズも有るし・・・選択肢は山ほど有る」

刀奈

「選択肢が多すぎて頭が痛くなってきたわ・・・このガンダムXは使えないの?」

ユウマ

「基本装備だけなら使えるけど、サテライトキャノンは無理だな」

「月にマイクロウェーブ送信施設が無いし、ニュータイプ能力が無いと登録が出来ない」

簪

「コーディネーターとニュータイプって何ですか?」

ユウマ

「コーディネーターは、生まれる前の受精卵の時に遺伝子を人工的に弄って生み出した強化人間だ。ニュータイプは、人間が宇宙に適応して進化した人間ってのが一番説明しやすいな」

簪

「ユウマさんは、ニュータイプなんですか?」

ユウマ

「・・・それを聞いて如何するの？」

簪

「少し気になって・・・」

束

「その事に関してはまだあまり触れないで上げてよ。ゆくくんは特別なんだよ」

「ゆくくんが特別なのが他の国にバレたら、間違いなく人体実験されちゃうから。もちろん束さんがそんな事させないけどさ」

簪

「ごめんなさい」

ユウマ

「束さん、後の事はよろしくお願いします」

束

「うん、ゆくくんは少し休んでね」

簪

「私、ユウマさんに失礼な事聞いちゃった・・・」

束

「ゆくくんは怒ってはいないと思うよ。ただどうすれば良いか分からないんだよ」

「ゆくくんの秘密は、限られた人しか知らないから」

刀奈

「先生は、秘密を知っているんですか？」

東

「知ってるよ。ゆくくんに教えて貰ったから」

簪

「コーディネーターとニュータイプは、この世界に存在するんですか？」

東

「今から言う事は他言無用だよ。約束が守れないなら今すぐにココから出て言っ  
て貰えるかな」

みんなは、出て行かなかった・・・

東

「それならこの誓約書にサインしてもらおうかな」

「内容は・・・」

「今から話す内容は、最高機密に匹敵するレベルの情報なので、バラした場合は篠ノ之東が直々に消しに行くのに同意したとする」

「ゆくくんを傷付けようものなら、東さんが絶対に許さないので覚悟するように」

「この内容に同意する場合は、ドイツ政府との盟約に同意するのと同じ意味なのでしっかり理解するように」

東

「はい、各自自分でサインしてね」

簪

「サインしました」

刀奈

「私も」

みんな

「サインしました」

東

「ん、確かに確認しました。それでコーディネーターとニュータイプはこの世界に存在しないよ、たった一人を除いてね」

簪

「その一人が・・・」

東

「ゆくくんだよ」

「ゆ〜くんはね、他にも変わった力を持つてるんだ。どんな力かは言えないけどね」

刀奈

「ユウマさんが、青騎士と赤騎士だっていうのは本当なんですか？」

東

「白騎士事件の時に、ゆ〜くんが使っていたISの色で世間が勝手に決めた名前を言わないでくれるかな」

「その名前、東さん嫌いなんだよ」

刀奈

「ごめんなさい・・・」

簪

「ユウマさんが使ったISは、Rシリーズとガンダムだつて言っていましたけど・・・その名前で呼んだ方が良いですか？」

東

「そうだね。そっちの方が好きかな」

本音

「ゆ〜ゆ〜が特別なのは分かったけど、コーディネーターとニュータイプは他の人とどう違うんですか？」

束

「さつきもゆうくんが説明したけど、受精卵の段階で遺伝子を強制的に弄って生まれた強化人間がコーディネーターだよ」

「ニュータイプはね、空間認識能力が異様に発達した人のことを言うんだよ」

虚

「空間認識能力が高いという事は、BT適正の事ですか？」

束

「そんな甘っちょろい適性なんかじゃないよ。何処から攻撃が来るとか、何処に敵がいるのかも分かるんだよ」

刀奈

「そんな能力が有るなんて・・・」

束

「もし、ゆうくんの事を偏見の目で見たら、束さん何するか分からないからね」

簪

「そんな事しません!!ユウマさんは、私に協力してくれた優しい人だから・・・」

本音

「ゆうゆうは、優しいんだよ♪いつもお菓子くれるの♪」



刀奈

「簪ちゃんに手を差し伸べてくれた人に偏見の目なんて向けられるわけないわよ……」  
虚

「お嬢様に貴重なデータをを見せてくれる方に偏見の目を向けるなんて出来ませんよ……」  
生徒達

「そうだよね……分からない所を教えてくれたり、作り方が分からなかった合金も作ってくれたもんね」

「普通そんな事してくれないもん」

束

「みんな、ゆくくんの偉大さが分かったね。これからはゆくくんが話しにくい事は聞いちゃダメだよ」

みんな

「分かりました」

束

「さて、どのガンダムにするか決まった？」

刀奈

「まだ決まりません……」

束

「なら早めに決めてね。ゆくくんもそんなに暇じゃないんだ」

「色々やりたい事が有るみたいだし、今度は束さんも協力できるか分からないからさ」

刀奈

「分かりました・・・」

束

「簪ちゃん、I Sの起動は今度にしても良い？」

「ガンダムの起動には、どうしてもゆくくんの協力が不可欠だから」

簪

「分かりました」

束

「それじゃあねー！束さんはゆくくんの元に向かいます！」

「待っててゆくくん！」

### 第三整備室

ユウマ

「・・・俺の素性とか公開した方が良いのか・・・でも碌な事にならないのは目に見えて

るからな……」

「いつその事、問題行動起こして学園を退学になるのも一つの手か……」

東

「そんな事は東さんが認めないよ！」

ユウマ

「いつから聞いていたんですか？」

東

「問題行動を起こして学園を退学とか言ってるところから！」

ユウマ

「そうですか。俺、どうしたら良いんですかね……目立ちたくないのに結果的に目立ってる本末転倒な結果だし」

東

「ゆ〜くんは、そのままが良いと思うよ。東さんは、ありのままのゆ〜くんが好きだから」

「だから今まで通りのゆ〜くん居てほしいな」

ユウマ

「……分かりました。そう有れるように努力します」

東

「なら、東さんがゆ〜くんを抱きしめてあげるから、東さんの胸に飛び込んでおいで！」

ユウマ

「恥ずかしいので嫌です」

東

「そんな事言わずにカモン！」

ユウマ

「・・・なら強めに抱きしめてください」

東

「良いよ。おいで、ゆ〜くん」

俺が東さんに抱き着くと、東さんは優しく抱きしめてくれた

東

「ゆ〜くんは、もう少し誰かを頼らないとダメだよ」

「1人で抱え込んだら、その内潰れちゃうよ。東さんが近くに居るし、ちーちゃんも居るんだから頼ってね」

ユウマ

「分かりました・・・」

東

「ゆ〜くんは可愛いね。よし！東さんお腹すいちゃったからご飯食べに行こうよ♪」

ユウマ

「そうですね。食堂に行ってお腹いっぱい食べましょう！」

東

「食堂にレッツゴー！」

この日の夕食はいつも以上に量を食べた。東さんと一緒に食べたせいか、いつもより美味しかったなあ・・・何でだろう？

# ガンダム

刀奈

「虚ちゃん、どのガンダムが良いと思う？」

虚

「別に無理にガンダムを選ばなくても良いのでは？」

刀奈

「簪ちゃんが、ガンダムを選んだのならお姉ちゃんである私もガンダムを選ぶ義務があるのよ！」

簪

「お姉ちゃん、シスコンもいい加減にして」

刀奈

「簪ちゃんが辛辣！」

簪

「私は、ガンダムがカッコいいから選んだだけ。お姉ちゃんが、ガンダムを選ぶ義務なん

て無い」

刀奈

「だって、折角簪ちゃんと同じガンダムを作れるなら、私もガンダム作りたいたんだもん」

本音

「スゴ〜イ!!お姉ちゃん、これ見てよ!」

虚

「如何したの本音?」

本音

「今、ゆくゆくから貰った一覧表見てたらね、ガンダム以外のロボットが載ってるんだ

よ♪」

「パーソナルトルーパーって言うんだって」

虚

「興味深いわね・・・本音、試しに詳細データを出す事って出来る?」

本音

「え〜つとね・・・無理みたい。でも、ロボットのイメージ映像なら出せるみたいだよ」

虚

「本音、試しにこのヒュツケバインを出してみて」

本音

「は〜い」

本音は、ヒュッケバインの外観データを呼び出した・・・

虚

「凄い・・・既存のISの何十倍ものスペックが有る・・・」

「動力源は、ブラックホールエンジン？聞いた事の無いエンジンね」

本音

「お姉ちゃん、エクสบアインも有るみたいだよ〜」

虚

「派生形の機体が有るみたいね。お嬢様達は、放っておいて私達は色んな機体を調べましょう」

本音

「は〜い」

虚と本音は、色んなデータを閲覧し始めた・・・

数日後・・・

本音

「ゆ〜ゆ〜、少し聞きたい事が有るんだけど良い〜？」



ユウマ

「ん？俺に答えられる事なら良いよ」

本音

「パーソナルトルーパーって何〜？」

ユウマ

「ココだとマズいから、整備室に行こう」

整備室

ユウマ

「それで、パーソナルトルーパーについて聞きたいんだね」

本音

「うん、この前渡してもらったデータを見てたらパーソナルトルーパーの所が出てきたんだけど、ガンダムとどう違うのか分からないの〜」

ユウマ

「なるほどね。簡単に言うと、使ってる技術が違うんだよ」

「ガンダムは、人類同士の戦争用に造られた兵器だし・・・パーソナルトルーパーは、異星人と戦う為に造られた兵器だからね」

「ガンダムには、人間が作り出した技術が多く使われているけど・・・パーソナルトルー

パーは、異星人の技術や平行世界の技術が多く使われているのが違いかな」

本音

「ほえく……ヒュツケバインのブラックホールエンジンも異星人の技術なの〜?」

ユウマ

「ブラックホールエンジンは、異星人と人間が共同で作りに出したエンジンだよ。俺のI Sにも同じようなエンジンが搭載されているよ」

本音

「ホント!!それ見せて貰っても良い?」

ユウマ

「見ても分からないよ。今の技術では作れないエンジンだからね」

「それに、簪さんのI Sに搭載する予定のエンジンも中々にぶっ飛んだエンジンだよ」

本音

「かんちゃんのがンダムに積むエンジンってどんなエンジンなの〜?」

ユウマ

「コレだよ。トロニウムエンジンって言う現時点では、規格外のエンジンだよ」

本音

「コレって、動かせるの〜?」

ユウマ

「試しに、ココのボタンを押してみ」

本音

「このボタン？」

本音は、ボタンを押すとトロニウムエンジンが淡く光り出して動き出した・・・

本音

「スゴイ・・・キレイだね」

ユウマ

「それより、お姉さんのISは決まったの？」

本音

「全然決まらないの〜！」

「もう時間が掛かってしょうがないから、虚お姉ちゃんと逃げてきたの〜」

ユウマ

「逃げてきたのね・・・今日はもう授業は無いし、色々と聞きたい事が有れば教えるよ」

本音

「ヤッター!!それじゃあね、分からない技術とか教えて貰いたいの!」

ユウマ

「良いよ。今から特別授業を始めます！」

こうして、俺の特別授業が始まった……

刀奈

「虚ちゃ〜ん……あれ、居ない」

簪

「虚さんも本音も、お姉ちゃんに付き合いきれなくて出て行ったよ」

刀奈

「そんな〜!!」

簪

「お姉ちゃんが悪い。いつまでもグダグダやってるから」

刀奈

「だって、こんなに選択肢が有るから迷っても仕方ないじゃない！」

簪

「もつと簡単に選べばいいのに……」

刀奈

「……なら決めた!!私は、イージスガンダムにするわ!!」

簪

「コツチにパーソナルトルーパーの一覧も有るのに、そんなに簡単に決めちゃうんだ」

刀奈

「パーソナルトルーパーって何!!」

簪

「お姉ちゃんが自分で見れば?」

「私、お腹すいちゃったから食堂に行ってくる」

刀奈

「だったら、お姉ちゃんも一緒に」

簪

「お姉ちゃんは、さっさと自分の機体を決めてよ!!先生たちに迷惑かけてるのを自覚し

てよ!!」

刀奈

「申し訳ありません・・・」

簪

「これ以上、無駄に時間かけるならユウマさんと東先生にお姉ちゃんの話は無かったこ

とにしてもらうから」

刀奈

「そんな〜！」

簪

「だったら、この一覧見て早く決めて。お姉ちゃんのせいで私のヘビーアームズが未完成のまんまなんだから！」

刀奈

「早急に決めます！」

刀奈は、パソコンとにらめっこしながらデータを閲覧していった・・・

刀奈

「やっぱりガンダムが一番ね。バランス重視でストライクガンダムに決めるわ」

「そうと決まれば、ユウマさんと東先生に連絡しないと」

刀奈は、事前に教えて貰っていた番号に電話をした・・・

東

「もすもすひねもす〜東さんだよ〜」

刀奈

「東先生、私の作るガンダムを決めました」

東

「そうなんだ〜それじゃあ、作るの頑張っ〜てね〜」

刀奈

「本当に手伝ってられないんですね・・・」

東

「それは、ゆ〜くん次第かな〜」

「とりあえず頑張っ〜てね〜バイビー〜!」

刀奈

「ユウマさんは、如何かな」

ユウマ

「は〜い、どちら様?」

刀奈

「刀奈です。ストライクガンダムに決めました」

ユウマ

「そう。作り方は書いてあるから頑張っ〜てね〜」

刀奈

「手伝ってられないんですか?」

ユウマ

「だって君のガンダム製作は、本来予定にはない事だもん。そんな事にまで協力する理由は無いよ」

「俺だって暇じゃないんだし」

刀奈

「・・・分かりました」

ユウマ

「さて、本音ちゃん・・・君の出番だけ？」

本音

「あいあいささ!!かんちゃん、今行くよ!!」

簪

「お姉ちゃん、何落ち込んでるの？」

刀奈

「2人共手伝ってくれないって・・・」

簪

「当然じゃない？突然無理言ってるんだから」

「そんな無理な事言ってる自分が、2人に手伝ってもらおうなんて虫が良すぎるでしょ」



刀奈

「確かにそうだけど・・・」

本音

「かんちゃんお待たせ!! ゆ〜ゆ〜からエンジン預かって来たよ!!」

簪

「ホント!!」

本音

「早速エンジンをヘビーアームズに搭載しようよ〜!」

簪

「付け方は知ってるの?」

本音

「ゆ〜ゆ〜から教わって来たよ〜!」

「胸部分を空けるとスペースが開いてるからそこに、このトロニウムエンジンを搭載すればヘビーアームズは完成だつて!」

「早速作業をやっちゃおうよ〜!!」

簪

「うん!!」

本音

「ところで、お嬢様はなんで落ち込んでるの〜?」

簪

「放っておいていいよ。自分の思い付きでこうなってるだけだから」

本音

「かんちゃんがそう言うなら気にしな〜い」

「早速整備室にゴ〜!」

簪

「ようやくヘビィアームズを目覚めさせられる・・・目覚めて、私のガンダム!」

簪は、ヘビィアームズの胸部分の空いているスペースにトロニウムエンジンを入れた・・・

ピキユ〜ン!!!

ヘビィアームズのツインアイに光が灯った・・・

本音

「これで完成だよ〜」

「後日、ゆ〜ゆ〜と束先生が色々調整してくれるって〜」

簪

「これで完成・・・みんなで作ったガンダム・・・」

本音

「さくて、面倒だけどお嬢様のガンダムも作らないとね」

簪

「作り方分かるの？」

本音

「ゆ〜ゆ〜に特別授業で、作り方を教えて貰ったんだ」

「整備方法もしっかりとマスターしてきたんだよ」

簪

「お姉ちゃん相当落ち込んでたから・・・仕方ない、私達で手伝ってあげよう」

本音

「そう言うと思って、フェイスシフト装甲の作り方と内蔵バッテリーの作り方もバッチリ習得済みなのだ!!」

「お姉ちゃんも今頃、ゆ〜ゆ〜から色々と教わってると思うよ」

その頃、虚は・・・

虚

「ユウマさん、この整備方法はこのやり方で合っていますか？」

ユウマ

「大丈夫ですよ。ガンダム系は、そこまで消耗品は出ない設計なんで頻繁に部品を交換する機会はないと思いますよ」

「パーソナルトルーパーも同じです。それでも整備回数を減らしたいなら、マグネットコーティングとかを施せば関節部の摩擦を大幅に減らせますよ」

虚

「そんな技術が有るんですね・・・他に何か特殊な技術は有りますか？」

ユウマ

「色々ありますよ。ビームコーティング、I・フィールド、ラミネート装甲、VPS装甲とかが特殊技術ですよ」

「まだまだありますけどね。武装も選択肢が多いのが特徴です」

虚

「こんなに特別な技術が・・・」

ユウマ

「会長さんがストライクガンダムを作りたいそうなので、みんなで助けてあげてください」

「い

「本音ちゃんにも、色々と教えておきましたんで」

虚

「分かりました。早速馬鹿お嬢様にお説教ついでに、助けに行つてきます」

ユウマ

「作るなら、第3整備室使ってください。俺が使つてる特殊工具とかそのままにしてあるんで」

虚

「ありがとうございます」

生徒会室・・・

刀奈

「私1人でも、ガンダムを作らないと・・・みんなに迷惑は掛けられないわ・・・」

「なんで私は、こうみんなに迷惑を掛けちゃうのかな・・・折角暗部の仕事を捨てて、簪ちゃんとの仲も良くなったのに・・・」

虚

「刀奈が、思い付きで物事を言い出すからです。少しは反省して自分勝手な思い付きは

辞めなさい」

刀奈

「虚ちゃん・・・」

虚

「今スグに改善しないと、私も本音も更識家と永遠に縁を切ります」

刀奈

「それじゃあ、私のお世話をしてくれる人は居なくなるの？」

虚

「当たり前じゃないですか!! 私は、永遠に刀奈の世話をする義務はありません!! 仕事だからしているだけです!!」

「それが嫌なら、今後絶対に自分勝手な思い付きをしないと誓いなさい!!」

刀奈

「誓います!! もう今後自分勝手な思い付きは言いません!!」

虚

「全く・・・整備室に行きますよ」

刀奈

「なんで整備室に行くの？」

虚

「刀奈のガンダムを作らないといけないからでしょ!! さっさと来なさい!!」

刀奈

「ハイ!!」

### 第3整備室

虚

「早く中に入りなさい」

刀奈

「はい・・・」

簪

「本音、その工具取って」

本音

「かんちゃん、この工具で良いの?」

簪

「ありがとう」

本音

「これで基本骨格は完成だね」

「でもゆるゆるが、試作で作った製作途中の骨格分けてくれて良かったね」

簪

「そうじゃないと、短期間でガンダムなんて作れないよ。外部装甲は、東先生がお遊びで作った装甲分けてくれたから」

本音

「フェイズシフト装甲は、3Dプリンターでも作れるみたいだから時間短縮だね」

刀奈

「簪ちゃん・・・本音ちゃん・・・何で」

簪

「そこで立ってないで手伝ってよ。私達だって暇じゃないんだから」

本音

「お姉ちゃん、手伝って。ストライクガンダムって装備が多くて大変なの」

虚

「待ってて。刀奈、アナタも手伝いなさい。自分で蒔いた種なんだから自分で後始末しなさい」

刀奈



「ハイ!!」

こうして、更識家と布仏家の少女たち共同でストライクガンダムの製作が始まった……

それから数週間後……

刀奈

「ようやく出来たのね……」

虚

「ひどく不格好ですね。刀奈は、不器用過ぎて話になりませんね」

刀奈

「そこまで言わなくても良いじゃない!!」

本音

「でも、このままだと手直し箇所が多すぎてまだ時間が掛かっちゃうよ」

簪

「時間を掛けてでも直すしかないね」

束

「や～や～!調子は如何かな?」

簪

「こんな感じですよ」

東

「ありやく随分と不恰好だね。装甲の継ぎ目も甘いし、塗装もムラが有るね」

刀奈

「ごめんなさい・・・私が、勝手な事言いだしたから・・・」

東

「自分達で頑張ったんだね。良し!!ココからは東さんとゆ〜くんが協力してあげよう!!」

「カモン!ゆ〜くん!!」

ユウマ

「俺は、スーパーロボットじゃないんだから変な呼び方しないでください」

「話しは大体把握してるから、残りは俺と東さんで仕上げるよ。半日あれば終わるかな」

東

「東さんに、時間外労働させるんだからお返しは期待しちゃうからね!!」

「ゆ〜くんは、またハグしてね〜」

ユウマ

「はいはい」

東

「後、添い寝希望します♪」

ユウマ

「襲いますよ？」

東

「良いよ。優しくしてね？」

ユウマ

「冗談言ってる暇が有ったら手を動かしてください」

東

「ハ〜イ」

そんなこんなで、半日が経過して・・・

東

「完成しました！ストライクガンダムです！」

ユウマ

「駆動系は、大容量バッテリーとエンジンどっちがいい？」

刀奈

「エンジンでお願いしても良いですか？」

ユウマ

「なら、このエンジンをあげるよ。電気エンジンのプラズマ・ジェネレーター」

「コイツは、核融合エンジンの技術を使って作った安心・安全のジェネレーターだ」

「フェイズシフト装甲の最大の欠点は、バッテリーが切れると装甲が一切機能しなくなるのが欠点だけど、電気エンジンだからバッテリーが切れる事は無い」

「フェイズシフト装甲を、無限に使えるって事だ」

「精々コイツを使いこなして、俺と束さんを驚かせてみな」

刀奈

「ありがとうございます・・・」

束

「さて！お仕事も終わったし、ゆ〜くん帰ろうよ〜♪」

ユウマ

「そうですね。食堂寄って帰りましょう」

虚

「ありがとうございます。手を差し伸べてくれて」

東

「東さんとゆ〜くんは、努力する子の味方なのさ♪」

ユウマ

「頑張ってる子には協力してあげないとな。後日フィッティング調整するから予定を開けとけよ〜」

東

「じゃあね〜バイビ〜!!」

刀奈

「みんなありがとう・・・協力してくれて」

虚

「ここまで協力するのは今回だけですからね。今後は、自分でもメンテナンス等をやってもらいますから」

簪

「迷惑料として、私の欲しい特撮ヒーローの変身ベルトの高いCSMシリーズ全種類買ってね」

本音

「私には、お菓子1年分お願いしま〜す♪」

刀奈

「お金が飛んでいく!!」

簪

「これでもまだ安い方だからね？ 本当なら戦隊アイテムとウルトラレプリカシリーズも要求しても良いんだよ？」

本音

「私も、地方限定のお菓子をお願いしようかな〜？」

刀奈

「喜んで買わせていただきます!!」

虚

「これに懲りて、自分の事は自分でしてください」

刀奈

「はい・・・」

こうして無事に、刀奈のストライクガンダムは完成した・・・

## お泊り会

とある休日・・・

ユウマ

「簪さん、刀奈さん、これからフォーマット作業するけどよろしくね」

束

「パパッとデータ入力して調整しちゃおうよ♪」

簪

「よろしくお願いします」

刀奈

「お願いします」

束

「それじゃあ、2人のパーソナルデータを採らないとね。この腕時計を1時間位身につけててね」

簪

「この腕時計はデータを採るモノなんですか？」

刀奈

「結構武骨なデザインで好きですけど・・・」

ユウマ

「その腕時計は、待機状態のＩＳだよ。今所有者登録とパーソナルデータを登録してるんだよ」

「結構便利なんだよ？身に着けてるだけで必要なデータ全部採れるから」

簪

「これ最新技術ですか？」

束

「束さんとゆーくんの共同開発技術です!!今の世の中には広まってない極秘技術です!!」

刀奈

「そんな技術をサラツと使って良いんですか？」

束

「良いの良いの♪誰にも真似できない技術だから♪」

ユウマ



「食堂に行つてきても良いよ。そろそろお昼時だし」

簪

「なら、お昼ご飯食べてきますね。ユウマさんと東先生は、何か食べますか?」

ユウマ

「おにぎりとか貰つて来てもらえる? サンドイッチでも良いけど」

東

「東さんは、お稲荷さんが良いな♪」

刀奈

「お昼ご飯食べたら、スグに持つてきますね!」

ユウマ

「よろしく。さて、プログラムの書き換えと再設定を始めますか」

東

「東さんは、かんちゃんの方の設定をやるね」

ユウマ

「キャリブレーション取りつつ、ゼロ・モーメント・ポイント及びCPGの再設定・・・  
疑似皮質分子イオンポンプに制御モジュールに接続」

「ニューラルリングージ・ネットワーク再構築。運動パラメーター再設定・・・システ

ムオンライン！ブーストラップ起動!!」

東

「ほえく・・・いつ見てもゆ〜くんのタイピングスピードが凄まじいね〜」

ユウマ

「これくらい慣れれば、誰でも出来ますよ」

東

「東さんにもやり方教えて〜!!」

ユウマ

「高速でタイピングしたいなら、キーボードの位置を覚えてください」

「覚えたら、ひたすらタイピングの練習してください。それで高速タイピングの習得です」

東

「え〜、努力するの東さん苦手なだけ〜!!」

ユウマ

「天災も努力しないと、その内頭打ちになりますよ」

「たまには、努力しないとインスピレーションは生まれませんか?」

東

「東さん、ご褒美が無いと頑張れないんだよね〜」

ユウマ

「・・・だったら、またハグしてあげますから努力してください」

東

「ハグだけじゃ、ちよつと東さんのモチベーション的にな〜」

「ハグしてキスしてくれたら、東さん頑張っちゃうけどな〜♪」

ユウマ

「そんなにキスして欲しいんですか？」

壁ドン!!

東

「え、ゆ〜くん？」

ユウマ

「そんなイケない事を言う唇は、塞いでしまおうかな・・・」

東

「え？え？ゆ〜くん、ストップ!!」

「キスは冗談だから・・・ハグだけで良いから、抱きしめてください・・・」

ユウマ

「全く、冗談でもそんな事言わない方が良いですよ。無理やりそういう事をする男も居るんですから」

東

「ごめんなさい・・・」

ギョっ!!!

ユウマ

「よしよし・・・キスするなら、想い人と恋人同士になってからしましょうね」

東

「分かりました・・・」

ユウマ

「これでちゃんと努力してくださいね」

東

「・・・努力します」

簪

「おにぎりといなり寿司を持ってきましたよ・・・東先生、顔が真っ赤ですけど如何したんですか？」

東

「何でもないよ♪」

刀奈

「でも、まるで恋する乙女みたいな顔してますよ?」

東

「ホントに何でもないよ♪」

ユウマ

「二人とも、I Sの設定は終わってるから、これで最終設定して終わりだよ」

簪

「私達が、身に付けてたのに如何やって設定したんですか?」

ユウマ

「遠隔操作でパパッとやったよ。これで2人の専用機は完成だよ」

簪

「私のガンダムヘビーアームズ・・・」

刀奈

「ストライクガンダムが私の新しい専用機・・・」

東

「良かったね♪これで記念すべき初めての女性ガンダムパイロットだよ♪」

ユウマ

「それじゃあ、おにぎり頂きます」

「中の具は、昆布とツナマヨか・・・美味しいな」

東

「ゆ〜くんだけズルい!! 東さんも頂きま〜す♪」

「五目いなり寿司だあ♪美味しい♪」

簪

「試しに展開してみても良いですか？」

ユウマ

「どうぞ。やり方は普通のISと変わらないから、普通にやれば展開できるよ」

「最初だけ、時間掛かるかもしれないけど気にしないでね」

東

「東さん、お味噌汁欲しくなっちゃったから貰ってくるね〜」

「ガンダムに関しては、ゆ〜くんの方が詳しいから聞いてね〜」

簪

「では・・・来て、ヘビーアームズ!」

刀奈

「力を貸して！ストライクガンダム！」

2人を光が包み込むと・・・ガンダムを纏った簪と刀奈が居た・・・

ユウマ

「デザインは、フルスキンのままだけど何か違和感はある？」

簪

「違和感はありません」

刀奈

「何だか不思議な感じですか・・・」

ユウマ

「最初は、不思議な感じがするけどスグに慣れるよ。俺は、最初からフルスキンだったし違和感無しで乗ってたけど」

簪

「ユウマさんは、白騎士事件の時はISに乗ってどれ位だったんですか？」

ユウマ

「初日だよ。それまで乗ったりはしてなかったから」

刀奈

「初日であんな活躍をしたんですか?!」

ユウマ

「別に俺自身活躍したとは思ってないし。それに自分の功績を見せびらかす奴は器の小さい野郎だから、俺はそんな奴にはなりたくないから謙虚に生きたいのよ」

簪

「謙虚に生きる・・・」

刀奈

「今の世の中に足りてない考え方ですね・・・」

ユウマ

「俺の話は今は何でも良いんだよ。違和感が無ければ、今度アリーナで試運転でもしてみると良いよ」

「操縦マニュアルはコレだからよく読んでいてね」

束

「ただいま♪今日の、お味噌汁は豚汁だったよ♪」

「みんなの分も貰ってきたから食べようよ♪」

ユウマ

「ありがとうございます、束さん」

簪



「豚汁大好きです」

刀奈

「私達、さつき食堂でサンドイッチセット頼んだから今日のお味噌汁が豚汁って知らなかったです」

東

「豚汁は、最強なんだよ♪」

「東さん、ゆ〜くんが作ってくれる豚汁が大好きなんだ〜♪」

ユウマ

「学園に居る間は、作る機会は当分無いと思いますけどね」

東

「たまには、ゆ〜くん作ってよ〜!!」

ユウマ

「無理ですよ。学園の敷地内にはスーパーが無いし、今は部屋の冷蔵庫に食材が無いから作れませんよ」

刀奈

「なら食堂の食材と設備借りられるように手配しますか？一日限定で食堂をやったり出来ますよ」

簪

「お姉ちゃん、それ職権乱用じゃない？」

刀奈

「誰の迷惑にならないなら、職権乱用にはならないわ!!」

ユウマ

「だったら、一夏を連れて来てくれ。俺一人じゃ限界がある」

刀奈

「一夏君？別に構わないわよ」

簪

「男の子って料理できる人が多いのかな・・・」

ユウマ

「俺と一夏は例外だな。双方ともに料理を自分で作らないと食うモノが無かったからな」

束

「いっくんとちーちゃんのお家は、両親が居なかったからね」

ユウマ

「その話は今は如何でも良いや。いつ食堂やるかは知らないけど、やるなら早めに教え

てくれ」

「折角だし、豚汁いただきます・・・東さん、七味唐辛子は有ります?」

東

「小さな袋の奴を貰ってきたよ♪」

ユウマ

「東さん、分かってますね♪」

東

「当然だよ♪豚汁には、七味唐辛子は必須でしょ♪」

「かんちゃん達も早く食べないと冷めちゃうよ♪」

簪

「いただきます」

刀奈

「そうですね、いただきます」

ユウマ

「やっぱり豚汁食べるとホツとしますね」

東

「そうだね。日本人に生まれて良かったと思えるね♪今はドイツ人だけど」

簪

「美味しい・・・私の好きな味だ」

刀奈

「さつきお昼食べたのに、またお腹が空いてきちゃったわ！」

ユウマ

「ちよつと食堂に行つて食材の余りを貰ってくるから待つててくれ。材料次第だけど何か作るよ」

食堂・・・

ユウマ

「こんにちわ」

おばちゃん

「おや、今日は休みなのに学園内に居るんだね」

ユウマ

「作業が有ったんで。今日、余りそうな食材とかありますか？」

おばちゃん

「野菜は少し余ると思うよ。肉系は、鳥皮があるから欲しければ持つて行っていいよ」

ユウマ

「なら貰っていきます。ありがとうございます」

おばちゃん

「何か食材が欲しければ、言ってくれば纏めて発注するから言っておくれよ」

ユウマ

「なら、野菜を一通りと肉は豚と鳥を一キロずつ注文お願いします」

おばちゃん

「了解だよ」

整備室・・・

ユウマ

「ただいま」

東

「おかえり♪色々貰って来たね」

ユウマ

「俺の部屋に行きましょう。ここじゃ料理できないんで」

ユウマの部屋・・・

ユウマ

「中にどうぞ」

東

「お邪魔します♪」

簪

「随分とセキユリテイが嚴重ですね」

刀奈

「職員寮でも、特別な部屋って感じですね」

ユウマ

「忍び込むアホが居るかもしれないからって学園が特別に用意してくれたんだよ」

「一夏の部屋はアツチだよ」

東

「そうなんだね。それで今日はどんな料理を作ってくれるの？」

刀奈

「野菜と鳥皮が有るわね」

簪

「焼き鳥を作るんですか？」

ユウマ

「野菜と鳥皮の味噌炒めだよ。ご飯が進むよ」

東

「東さんも手伝うよ」

ユウマ

「なら、野菜切っておいてください。ザク切りで良いんで」

東

「りょうかい」

簪

「私達も何か手伝えますか？」

刀奈

「ただ待ってるのも申し訳なくて」

ユウマ

「なら、お米洗ってくれる？」

「それと味噌汁かスープ作ってくれる？」

簪

「私、お米洗うからお姉ちゃんは、お味噌汁お願い」

刀奈

「分かったわ。お出汁って有りますか？」

ユウマ

「後ろの棚の中に昆布とかつお節が有るから好きなだけ使って良いよ」

刀奈

「これは!!羅臼昆布に最高級本枯れ節!!こんな高級品が沢山!!」

簪

「凄い!!お姉ちゃん!!昆布1枚頂戴!!前から昆布入れてご飯炊きたかったの!!」

刀奈

「簪ちゃんがこんなに食いつくなんて!!」

ユウマ

「好きなだけ使っていいし、欲しければ持って行っていいよ」

「母さんから毎月大量に届くんだよ。日本人の味を忘れちゃダメよって」

東

「レオナさんは、かなりの親日家だよ。ドイツ人だけど日本料理超大好きだし」

刀奈



「こんな高級品をタダで持って良いんですか・・・」  
簪

「昆布と本枯れ節・・・最高の黄金だしが引けるよ・・・」  
ユウマ

「ほらほら、あんまり時間掛けてると夕ご飯になっちゃうよ」

刀奈

「はっ!!お味噌汁作らないと!」

簪

「はっ!!急いでご飯炊かないと!」

束

「ゆくくん、お野菜切り終わったよ」

ユウマ

「ありがとう。チャチャつと炒めて作っちゃおう!」

ユウマ、フライパンで料理を炒め中・・・

ユウマ

「ほい、出来上がりっ」と

簪

「ご飯も炊けましたよ♪お出汁の香りが食欲をそそるなあ・・・」

刀奈

「こっちもお味噌汁出来ましたよ♪憧れの黄金出汁のお味噌汁・・・」

束

「最高級の定食が出来ちゃったね♪」

ユウマ

「少し早いけど、夕ご飯って事で。いただきます」

束

「頂きまゝす!!」

簪

「いただきます」

刀奈

「頂きます♪」

束

「美味しくい♪」

簪・刀奈

「負けた・・・」

ユウマ

「如何したの？」

簪

「あまりにも料理が美味しすぎて女性として、負けたなって・・・」

刀奈

「こんな美味しい料理を食べたら、私達のプライドが・・・」

ユウマ

「そんなに俺の料理って美味しいのか？俺自身普通に作ってるだけだから全く分からないんだよなあ」

東

「(飯お替り♪)」

ユウマ

「自分でやってください」

東

「ゆ〜くんのケチ〜!!」

ユウマ

「近くに炊飯器有るんだし、東さんの方が近いでしょうが！」

東

「分かったよ〜」

簪

「何か、みんなでご飯食べるのって良いですね」

刀奈

「今度虚ちゃん達も誘って何処かに食べに行きましょう♪」

「その時は、ユウマさんにお弁当作って貰いたいんですけど良いですか？」

ユウマ

「お金取るよ？」

刀奈

「構いません。お重に色々詰めて貰いたいです」

ユウマ

「何かのイベントの時にでも作るよ。その時は、食堂の貸し切りよろしくね」

刀奈

「生徒会長にお任せよ♪」

東

「ごちそうさまでした♪」

簪

「ごちそうさまでした、美味しかったです」

刀奈

「ご馳走様でした」

ユウマ

「はい、お粗末様」

「食器は水に付けといて。後で纏めて洗うから」

簪

「私が洗いますよ。こんなに美味しいご飯頂いたお礼です」

刀奈

「せめてこれくらいはさせてください」

ユウマ

「そう？ならお願いね」

東

「ゆ〜くん、デザートは無いの〜？」

ユウマ

「東さん、少しは二人を見習って働いてください。タダ飯喰らいの人は俺嫌いです」

東

「東さん、働きます!!」

ユウマ

「そこにあるリンゴ剥いておいてください。デザートはリンゴで我慢してください」

東

「東さん、リンゴ上手く剥けないよ?」

ユウマ

「なら、一緒にやりましょう。こうやって剥くんですよ」

東

「(うう?)」

ユウマ

「そうです。ナイフを固定しながらリンゴの方を回しながら? いてくださいね」

「力を入れない様にしてくださいね」

簪

「ユウマさんと東先生は、お付き合いしてるんですか?」

ユウマ

「しないよ」

東

「し、してないよ!!確かにゆくくんの事は大好きだけど・・・」

刀奈

「こんな美人を放っておくのは如何かと思えますよ?」

ユウマ

「俺、恋愛つてのが良く分からないんだよね。今まで誰かを好きになった事無いから」

東

「ゆくくん!!東さんの事をもっと好きになってください!!」

ユウマ

「??」

簪

「今のは、東先生なりの告白ですよ」

刀奈

「女性を悲しませる男性は最低ですよ?」

ユウマ

「そんな事急に言われてもなあ・・・まあ、もつと束さんと仲良くできるなら友達以上恋人未満辺りからでお願いします」

束

「・・・これって告白成功？」

簪

「一応成功だと思えますよ」

刀奈

「結果は少し微妙な感じですけど、成功ですね」

束

「ヤッター!!! ゆ〜くん大好き♪」

ユウマ

「教師と生徒の恋愛って、一般的にはこう倫理的に如何なの？」

刀奈

「倫理的には、アウトね」

簪

「表沙汰にならなければ問題ないと思います」

ユウマ



「なら、この事は内密にしないといけないって事か」

東

「仕方ないよね。でもここに居る人達の前では隠さなくて良いんだから♪」

「それなら東さん的には問題ないよ♪」

ユウマ

「今日は、もうそろそろ門限の時間になるから解散って事にして後日今後の事を考えようか」

簪

「分かりました」

刀奈

「出来るだけ生徒会も協力しますね。今日は、ご馳走様でした」

ユウマ

「また休み明けにね。おやすみ」

「東さんは、帰るんでしょ？」

東

「今日は、ゆくくんの部屋に泊めて♪」

ユウマ

「ハア!!」

東

「たまには仲良くしようよ」

ユウマ

「変な事したら、叩き出しますからね」

東

「分かってるよ」

ユウマ

「なら良いです。シャワーはアツチです」

「着替えは無いんで、俺の服使ってください」

東

「ゆ〜くんの服・・・いい匂い」

ユウマ

「早くシャワーに行ってください!」

東

「は〜い」

シャワー中・・・

東

「シャワー終わったよ！」

ユウマ

「布団敷きましたんで使ってください。俺はシャワー浴びてきます」

シャワー中・・・

ユウマ

「ふう・・・サツパリしたな」

東

「ゆ〜くん、一緒に寝ても良い？」

ユウマ

「寝るだけですよ？」

東

「うん、おやすみ」

ユウマ

「おやすみなさい」

東

「ゆ〜くん、起きてる?」

ユウマ

「起きてますよ」

東

「ゆ〜くんは、まだ恋とか分からないって言ってたけど、私がゆ〜くんを惚れさせてみせるから待っててね」

「そうしたら、結婚とかして子供授かって幸せになろうね」

ユウマ

「そうですね・・・約束代わりにキスしてみます?」

東

「うん、ゆ〜くん大好きだよ」

東さんは、俺にそつとキスしてきた・・・

ユウマ

「なんか凄くドキドキしてきたんですけど・・・これって東さんに恋してるようなもんじゃん」

「マジか・・・俺っていつの間に東さんに恋してたんだ?」

東

「ゆうくんは、知らないうちに東さんの魅力にメロメロになっちゃったんだね♪」

ユウマ

「そうかもしれないね・・・好きです、東さん」

「俺と一緒に居てください」

東

「喜んで♪」

この日、俺達は恋人同士になった・・・

## 転校生

東

「かんちゃん、刀奈ちゃん、細かい所を調整してみたけど何か気になる所は有るかな？」

簪

「大丈夫です」

刀奈

「おかしい所はありません。むしろ可笑しい位調子が良いです」

東

「東さんとゆくくんが作るI Sは、装着者の動かしやすさを追求してあるんだよ！」

「それに安全性もトップクラスなんだよ!!」

ユウマ

「フルスキンだし、このまま宇宙に行こうと思えば行けるよ。短時間の間だけけどね」

東

「ゆくくん！東さんもガンダム欲しいよ!!」

ユウマ

「自分で作ってくださいよ。一人で作れるでしょ？」

東

「恋人にそんな事を言うお口は東さんがキスして塞いじやうぞ!!」

ユウマ

「ハア・・・東さんは何のガンダム作りたいんですか？それともパーソナルトルーパーですか？」

東

「東さん的には、パーソナルトルーパーも捨てがたいんだよね」

「ゆ〜くん！おススメの機体教えて！」

ユウマ

「ヴァイスリッターとかおススメですよ。中々の技量が必要になりますけど」

東

「でも、ヴァイスリッターってエース機体だよね？」

ユウマ

「そうですね。慣れないと、加速した時のGで内臓が潰れますね」

東

「そんな危ない機体を束さんに使わせようとしなideよ!!」

ユウマ

「だって、おススメの機体が良いって言ったじゃないですか・・・」

東

「命の危険が有る機体なんて使わないよ!!」

ユウマ

「だったら・・・エクスパインでも使いますか?」

東

「それなら束さんでも使える?」

ユウマ

「全部の武装は使えません。特殊な能力が必要になるんで」

東

「もく!!!さつきから、ゆうくんは束さんで遊んでない!!」

ユウマ

「バレましたか・・・まあ、パーソナルトルーパーでオススメなのは、アルブレードかヒュッケバイン辺りが良いんじゃないですか?」

東



「なら、ヒュツケバインにしようかな」

ユウマ

「あ・・・ヒュツケバイン強化すると、エクスパインかエクゼクスバインになるから無理だ」

東

「も〜!!!」

ユウマ

「なら、ビルトファルケンなら如何ですか？」

「ヴァイスリッターを基に開発された機体ですよ」

東

「特殊な能力要らない？」

ユウマ

「必要ないですよ。慣れないと少し操縦が難しいと思いますが」

東

「このビルトビルガーって何？」

ユウマ

「ビルトファルケンの兄弟機ですよ」

東

「ゆ〜くん!!このビルトビルガー作って、東さんとお揃いになろうよ!!」

ユウマ

「別に良いですけど、ビルガーって内部構造が複雑で作るのに時間掛かるんですけど」

東

「東さんが協力するから、作ろうよ♪」

ユウマ

「分かりました。ただし、普段は使わないでくださいよ」

東

「ハ〜イ♪」

「そういえば、明日転校生が来るって知ってた〜?」

ユウマ

「こんな時期に転校生?」

「刀奈ちゃんは生徒会長なら、何か知ってるんじゃない?」

刀奈

「一応情報は来てるわ。転校生は2人で、中国とフランスから来るみたいよ」

東

「中国の子は、専用機の開発が遅れていたみたいだから仕方ないと思うんだけどさ」  
「フランスの転校生の方が、なんだかきな臭いんだよね」

ユウマ

「何がきな臭いんですか？」

東

「フランスの転校生って、男子なんだって」

刀奈

「えっ!!男子ならもつと世界が騒がしくなるじゃないですか!!」

簪

「ここ一週間の間で、新しい男性操縦者のニュースは出ていませんでしたよ？」

東

「そうなんだよね。だからきな臭いんだよ」

ユウマ

「産業スパイ系なのかな？」

刀奈

「それは有り得るかもしれないわね。世界に2人しか居ない男性操縦者のデータは、何処の国も欲しがらるから」

簪

「きつと色仕掛けしてくる可能性も有る」

束

「大変だよ!! ゆくくんの貞操は、束さんが管理します!」

ユウマ

「俺、束さん以外の女性に興味ありませんけど・・・」

簪

「女性から襲われるシチュエーションが有る・・・エッチい同人誌みたいに」

束

「ゆくくん!! 今から束さんと初体験しようよ!!」

「束さんの初めてあげるから、ゆくくんの初めてを頂戴!」

ユウマ

「そういう事を他の人が居る所で言わないでください」

刀奈

「生徒会権限で、体育館倉庫を確保しましょうか?」

簪

「お姉ちゃん、そのシチュエーションは少し凌辱系のシチュエーションだから駄目」

「私のおススメのシチュエーションは、保健室で生徒と教師のいけない関係の方が雰囲気が出る」

東

「それだあ!!」

ユウマ

「全員落ち着け!!」

東

「落ち着いてなんて居られないよ!!」

「ゆ〜くんの為なんだから!」

ユウマ

「俺の為って・・・東さんが俺とそういう事したいだけなんじゃ?」

東

「ギクツ!!」

ユウマ

「やっぱり・・・そういうエッチい事はもう少しお互いの事を理解してからしましょうね」

「今は、キスで我慢してください」

東

「うん♪ゆるくん大好き♡」

刀奈

「甘いわね〜」

簪

「キュンキュンしちゃうね」

キーンコーンカーンコーン

刀奈

「今日は、これでお開きにしましょう。フランスの転校生の事は私の方でも調べてみるわね」

簪

「更識のチカラを使って調べてみるね」

ユウマ

「俺の方でも、クラッキングしてフランス政府の情報を探ってみるかな」

東

「東さんも、天災の頭脳をフル活用して調べるよ!」

その日、ユウマと東と刀奈と簪は、様々は方向からフランスの情報を調べ始めた…

## 接触

千冬

「今日から、このクラスに転校生が来る事になった……まあ、色々と事情はあるだろうが仲良くしろよ」

シヤル

「シヤルロツト・デュノアです。こんな格好をしていますけれどした女子です」

「これからよろしくお願いします」

女生徒

「あの、噂だと転校生は男子だって聞いてたんですけど……」

シヤル

「僕の実家から、男性操縦者のデータを盗んで来いって言われたんだけどね、その為に男性操縦者のフリして入学する予定だったんだけど、昨日デュノア社がサイバー攻撃を受けて今までやって来た悪い事が全部世の中に明るみになっちゃってね」

「結果、デュノア社は役員総入れ替えで実質倒産しちゃったんだよね」

「で、僕はスパイ行為をする必要が無くなったから、普通に女子としてIS学園に通う事になったんだ」

女生徒

「そんなあ!!!男子が転校して来ると思ってたのに!!!」

「この世に神は居ないのか!!!」

千冬

「静かにしろ!!」

「デュノア、お前の席は後ろのあそこだ」

「何か分からない事が有れば遠慮なく言えよ」

シヤル

「ありがとうございます、織斑先生」

「君達が、朝霧ユウマ君と織斑一夏君だね」

ユウマ

「デュノア社へのサイバー攻撃は上手くいったみたいだな」

一夏

「ユウマさん、そんな事やってたんですか?」

シヤル



「君がデュノア社を潰してくれたんだね．．．ありがとう」

ユウマ

「褒められたやり方じゃないけどな。デュノア社を牛耳ってた女社長の実刑は決まったみたいだし、これでクリーンな会社になるだろう」

シヤル

「父さんがまた社長に復帰するから、大丈夫だと思うよ」

一夏

「国際間で問題にならないんですか？」

ユウマ

「どう調べても、何処からサイバー攻撃されたかなんて分からないさ」

「そういう風に攻撃したんだから」

千冬

「おしゃべりもそれ位にしておけ。一限目は、アリーナでのIS実習だぞ」

ユウマ

「俺達は、着替える必要無いし、自販機寄ってから行こうぜ、一夏」

一夏

「はい！」

アリーナ

千冬

「朝霧、織斑、試しにISを展開してみろ」

ユウマ

「俺は、どれ使えば良いですか？」

千冬

「ジム・カスタムを使うと良い」

ユウマ

「分かりました。カモン！」

一夏

「レッドフレーム、来い！」

千冬

「展開の速さは、問題ないな」

「武装を展開してみろ」

ユウマ

「ソードビット!!」

一夏

「ビームライフル!!」

千冬

「武装展開も及第点以上だな。他のモノは、ココまでやれとは言わないが、展開時に一秒を目標に頑張るように」

「今日の予定は、ISを使った実習の予定だったんだが、急遽予定変更で朝霧と教員との模擬戦を行う」

ユウマ

「そんな事聞いていませんけど」

千冬

「今決めたからな」

ユウマ

「ちくちゃんつてば酷いな」

千冬

「織斑先生だ!」

ユウマ

「それで、誰と模擬戦するんですか?」

千冬

「もうじき来る」

真耶

「キヤアアアア〜!!退いてくださ〜い!!」

ユウマ

「何やってんだか・・・ワイヤーアンカー!」

俺が、展開したワイヤーアンカーは、山田先生が乗っているラファールの足に巻き付き、暴走した機体を立て直させた・・・

真耶

「ありがとうございます〜」

千冬

「山田先生、何をやっているんですか」

真耶

「久しぶりにI Sに乗ったら、加減を間違えまして・・・」

ユウマ

「なるほど・・・コレがドジっ子属性か」

真耶

「そんな不名誉な属性は要りませんよ！」

千冬

「山田先生、模擬戦の用意は出来ていますか？」

真耶

「大丈夫ですよ」

ユウマ

「・・・どうせなら、新しいガンダムのお披露目でもするかな」

千冬

「また、新しいI Sを作ったのか？あまり世界を混乱させる代物をホイホイと作られても困るんだが」

ユウマ

「ガンダムとパーソナルトルーパーは、男の子のロマンなんで自重はしません！」

俺の新しいガンダム・・・それは数日前にアマテラス様が思い付きで作り上げた世界を破滅させる事が出来るバケモノレベルのガンダムだったが断った結果・・・

数日前・・・

回想シーン

アマテラス

「ユウマさん♪また新しいガンダムを作っちゃいました♪」

ユウマ

「開発ペース速すぎませんか？」

アマテラス

「天界は、物凄く暇なんです!! IS開発でもしていないと時間を持て余すんです!」

ユウマ

「そうですね・・・それで、新しいガンダムは何ですか？」

アマテラス

「なんと!あの有名なガンダム・・・ユニコーンガンダムです!」

ユウマ

「要りません」

アマテラス

「何ですか!?!」

ユウマ

「この世界に、俺以外ニュータイプが居ないのに、そんな機体は要りません!!」

「どうせなら、フルアーマーガンダムとかが欲しいです」

アマテラス

「ユウマさんは、意外とワガママですね・・・でも、ユウマさんのリクエストに応えちゃいます♪」

「ご希望のガンダムを教えてください♪」

ユウマ

「うーん・・・ビルドストライクガンダムって作れますか？」

アマテラス

「出来ますよ♪では、バックパックを換装出来るシステムを組み込んで、状況に応じて使い分けられるようにしておきますね♪」

ユウマ

「でも、こんなに専用機をたくさん持っても困るんだけどなあ・・・」

アマテラス

「なら、使わない専用機を纏めておけるチェーンホルダーを差し上げますね」

「オシャレに纏めておけるアイテムですよ♪」

ユウマ

「ありがとうございます」

アマテラス

「では、スグに製作してお届けしますね」

「それと、アトラスガンダムとHīーッガンダムは、改修とオーバーホールしたのでお預かりしますね」

ユウマ

「お手数お掛けします」

アマテラス

「お気になさらずに〜」

それから、数日後・・・俺のベットの枕元にチェーンホルダーにビルドストライクガンダムの待機状態の指輪が付いている状態で置かれていた・・・

回想シーン 終わり

アリーナ

ユウマ

「行きますか・・・ちゅちゃん、カタパルト使っても良い？」

千冬

「織斑先生だ!!カタパルトは、好きに使うと良い」



ユウマ

「サンキュ〜♪」

カタパルト・・・

ユウマ

「準備万端!!行きますか!」

「ち〜ちゃん、発進の合図よろしく〜」

千冬

「もう良いか・・・コホン」

「進度クリア!発進どうぞ!」

ユウマ

「朝霧ユウマ!!ビルドストライクフルパッケージ!行きます!」

俺は、ビルドストライクを展開して、空に飛び立った・・・

ユウマ

「お待たせしました〜。山田先生、戦いましょうか?」

真耶

「・・・勝てる気がないので、お断りします!」

千冬

「まあ、この機体を見ると勝てる気がしないのは無理ないな」

「朝霧、お前は自習にしてやるから、その機体の慣らし運転でもして来ると良い」

ユウマ

「良いの!!んじや、行つてきまゝす!!」

一夏

「良いのか、千冬姉。多分、ユウマさん当分戻つてこないぞ」

千冬

「織斑先生だ。今日の授業は、一日I S実習にしておいたから問題ないだろ」

ユウマ

「えつと・・・武装は、ビームライフルとビームサーベルとビームキャノンとバルカンとシールドか・・・忠実に再現してくれたんだな、アマテラス様」

「とりあえず、ひたすらブースト吹かして飛び回って遊ぼうつと!」

それから、バレルロール等をしながら飛び回って遊んでいた・・・

ユウマ

「ヤベエ・・・飛び回るの超楽しいんだけど!」

「このまま自由に飛び回っていたいなく。いつその事、ISで空飛びながら世界一周旅行とか行けないかな〜」

「母さんに聞いてみようかな〜」

無線・・・

千冬

「朝霧、一度昼休憩を挟むから降りて来い」

ユウマ

「は〜い」

「只今帰還しました！」

千冬

「機体の調子はどうだ？」

ユウマ

「もう絶好調ですね！」

千冬

「そうか。昼休憩を挟んだ後は、女生徒たちがIS実習を行うから、サポートをしてやれ」

ユウマ

「了解です」

午後の授業・・・

千冬

「午後は、実際にI Sを使った起動実習を行う。I Sは、ラファールと打鉄が用意してあるから、好きなのを使うと良い」

ユウマ

「あれ？量産型ヒュツケバインは無いの？」

千冬

「ドイツから、まだ届いていないから無いな」

ユウマ

「なんだ、量産型ヒュツケバインは使い易くてオススメなのに」

千冬

「なので、今日はどちらかを使ってくれ」

ユウマ

「は～い」

真耶

「それでは、各自名簿順で分かれて下さいね」

千冬

「各班に、専用機持ちが一人付くようにな」

そんなこんなで、無事に実習は終わった・・・

## 転校生 その2

IS実習が終わって・・・夕ご飯

ユウマ

「空を自由に飛ぶのは最高に楽しかったぜ！」

一夏

「また新しいガンダム作ったんですね」

ユウマ

「良いだろ。乗ってみるか？」

一夏

「レッドフレームを完全に使いこなせてないのに、新しいガンダムなんて乗れませんよ・・・」

ユウマ

「男なら、常に挑戦だぜ？」

一夏

「俺をユウマさんと一緒にしないでくださいよ」

ユウマ

「なんだよ、俺を人外みたいに言いやがって」

一夏

「十分人外なんですよ!!」

ユウマ

「マジか…」

箒

「一夏、ユウマさん、少し良いか？」

一夏

「如何したんだ？」

ユウマ

「急用か？」

箒

「2組に転入してきた、もう一人の転校生を紹介しようと思ってな」

鈴

「アナタ達が噂の男性のIS操縦者ね。私は中国の代表候補生の凰 鈴音よ」

ユウマ

「随分と変な時期に転校してきたんだな」

鈴

「専用機の開発が大幅に遅れてたのよ。オマケに、親の金で私から代表候補生の座を奪おうとするクズ女も居るしで、もう最悪よ」

一夏

「そのクズ女はどうなったんだ？」

鈴

「勿論徹底的にボコボコにして病院送りよ」

ユウマ

「対人戦闘でか？」

鈴

「ISでの模擬戦に決まってるじゃない。私と違って、努力もせずに親の権力にしがみついていたクソ女なんて相手にならないわ」

ユウマ

「女は怖いね〜」

箒



「だが、鈴は普通にしていれば物凄く良い奴なんだ。怒らせると怖いと思う・・・」  
鈴

「失礼ね。私だって、無暗に怒ったりするつもりは無いわよ」

「女尊男卑主義者は問答無用でブツ飛ばすけどね」

一夏

「出来れば敵に回したくないタイプだな・・・」

ユウマ

「普通に接してれば大丈夫だろ。俺は朝霧ユウマだ」

一夏

「織斑一夏です。織斑先生の弟だ」

鈴

「2人とも、代表候補生か何かなの？」

ユウマ

「俺はドイツの代表候補生扱いなのかな・・・特殊部隊の隊長だし・・・分かんねえ」

一夏

「俺は特殊部隊預かりだから・・・如何なんだろう？」

鈴

「はつきりしないわね〜」

「ドイツに聞いてみれば良いじゃない」

ユウマ

「それもそうか」

俺は携帯を取り出して母さんに電話を掛けた

レオナ

「もしもし、急に如何したの？」

ユウマ

「あ、母さん・・・俺ってドイツの代表候補生扱いになってるの？」

レオナ

「何言ってるのよ。代表候補生な訳ないじゃない」

ユウマ

「だよね〜！」

レオナ

「国家代表以上の立場に決まってるじゃない」

ユウマ

「・・・もう一回言ってくれない？」

レオナ

「国家代表以上の立場よ。だって、ドイツを代表する男性IS操縦者なんだから」  
「オマケにゴースト小隊の隊長よ？」

「そんな人材を代表候補生の枠に収める筈が無いわ」

「だから今は、国家代表と言っておけば問題ないわよ」

「近い内に特別な役職作るから待っててね」

ユウマ

「・・・分かった・・・クーちゃん達によろしく言っておいてね」

レオナ

「夏休みには帰って来てね」

ピッ！

ユウマ

「だってさ」

鈴

「アンタ・・・普通じゃないわね・・・」

一夏

「ユウマさんは、自覚が無い人外の人なんだぜ」

ユウマ

「やめんか!!」

一夏

「事実じゃないですか!!」

箒

「確かに、あの姉さんと同じレベルでISを使えて、ISを一から作れるユウマさんは・・・人外としか言えないな」

ユウマ

「箒まで・・・」

一夏

「いい加減認めてください」

ユウマ

「仕方ない・・・今後は少し自重するでしょう」

鈴

「ねえ、試しに私と模擬戦してくれない?」

ユウマ

「イヤだ」

「IS壊して、怒られるの嫌だもん」

鈴

「私が、そんな簡単に負けると思ってるの？」

箒

「鈴、悪い事は言わん・・・辞めておけ」

一夏

「自信を失うぞ・・・100%」

鈴

「そこまでヤバイの？」

一夏

「だって、単機でテロリストの襲撃を防ぐし、テロリストを速攻で無力化させるんだぜ？」

「オマケに生身でも強いときた・・・正直勝てる可能性はゼロだ」

箒

「それに、私達は本気のユウマさん知らないんだ・・・どうなるか分からん」

鈴

「・・・やっぱりやめておくわ・・・」

ユウマ

「そうしておいた方が良いでしょう。俺、ガチになるとどうなるか俺自身も分からないし」

「多分、国を1つ消し飛ばす可能性も有るかもしれないし」

鈴

「絶対に敵にしちやダメな人ね・・・」

シャル

「・・・ちよつと良いかな」

ユウマ

「どうかしたのか？」

シャル

「ユウマさんは、ドイツの国家代表レベルって事は分かったんだけど・・・ドイツのIS  
開発ってかなり進んでるの？」

ユウマ

「普通だと思っぞ？俺達の使ってるISは特注で作ってる奴だから、あんまり基準には  
ならないからな」

シャル

「確か・・・ガンダムだっけ？あれって、世代的には何世代になるのかな？」

ユウマ

「・・・第六世代？」

シャル

「ちよつと待つてくれないかな・・・世界情勢的には、第三世代がようやく出来たんじゃないのかな」

ユウマ

「だから言っただろ。特注で作ってるから、基準にならないって」

一夏

「俺のレッドフレームも、第六世代相当のスペックだしな」

箒

「私は、お守り代わりに先日姉さんにブルーフレームを貰ったんだが・・・一夏のレッドフレームと同じ第六世代相当なのか？」

ユウマ

「束さん、俺の許可なしでガンダム作ったな・・・後でお話しないといけないかな・・・」

箒

「あんまり厳しくしないでもらえないか・・・」

ユウマ

「大丈夫だ。ただ、ちよつと怖い思いをしてもらうだけだから……」

箒

「……姉さん、強く生きてくれ……」

鈴

「ドイツって、人外の人が多いの？」

ユウマ

「人外は俺と束さんだけだ」

箒

「クロエ達は……普通の子供達で良いのか？」

ユウマ

「クーちゃん達は普通の良い子達だろ？」

箒

「そうだな……他と少し違っても普通の子達だな……」

ラウラ

「兄さん、ようやく見つけたぞ。兄さんにお届け物だ」

ユウマ

「お届け物？なに？食べ物？」



ラウラ

「姉さんからのお手紙だ」

ユウマ

「クーちゃんからの手紙？何が書いてあるんだ・・・」

クーちゃんからのお手紙

クロエ

「お兄ちゃん、お元気ですか？」

「私達は、お母さんとお父さんに沢山可愛がってもらっています」

「ステラちゃんとアウル君とステイング君は、無事にお薬の副作用を克服して、普通に過ごせるようになりました」

「私の目の方も落ち着いてきました。お母さんに眼鏡を選んでもらったんですよ」

「最近、オシャレなカラーコンタクトが沢山売っているので、色々とおシャレをするようになったんですよ」

「ステラちゃんと一緒に、お母さんの着せ替え人形のように色々なお洋服を着せてもらっています」

「アウル君とステイング君は、お父さんに機械いじりを教わっているんですよ」

「近い内に、お兄ちゃんと同じメカニックになるかもしれない。もし、メカニックになつたらお兄ちゃんと一緒にISを作りたいそうです」

「当分会えないと思いますが、夏休みに帰つて来てくれるのを楽しみに待っています……クロエ」

ラウラ

「兄さん……お父さんとは誰だ？」

ユウマ

「何言つてるの……俺達の父さんはタスク・シングウジだろ」

ラウラ

「いつ結婚したのだ？」

ユウマ

「母さんがクーちゃんを纏めて養子にした辺り」

ラウラ

「私は会つた記憶が無いんだが？」

ユウマ

「父さん、エンジニアで世界を飛び回つてたからなあ……子供が出来たつて聞いた途端

に転職して、ドイツに戻って来たんだけど・・・ラウラと実際に会ってるぞ」  
ラウラ

「・・・もしかして、あの優しいお兄さんか？」

ユウマ

「そうそう」

ラウラ

「私にお父さんが・・・」

ユウマ

「ラウラ、今からドイツに帰るぞ！」

ラウラ

「了解した！」

千冬

「そんな事を認められる訳が無かろう!!」

パァン!!!

ユウマ

「痛っ!!」

ラウラ

「痛いー！」

千冬

「夕食の時間が終わるのを知らせに来たら・・・何を勝手な事を言っておるか!!」

ユウマ

「家族の貴重な時間を過ごす為ですよ!!」

ラウラ

「そうですよ!!お父さんとお母さんと姉弟達と幸せな時間を過ごすんです!!」

千冬

「帰省するなら、夏休みにしろ!!」

ユウマ&ラウラ

「嫌だ!!」

千冬

「全く・・・なら、今週の土曜日に帰省しろ。特別に外泊許可を出してやるから」

ユウマ

「ちゅちゃん、ありがとう♪」

ラウラ

「ありがとうございます!ちゅちゃん!」

千冬

「ちくちゃん呼びをやめんか!!」

こうして、土曜日に帰省する事になった・・・

## ドイツ帰国

今日は、クラス代表選の打ち合わせの日・・・

刀奈

「それで、一年生はクラス代表はもう決まったの？」

ユウマ

「一組は、一夏だな」

簪

「四組は、私」

刀奈

「二組と三組は誰？」

ユウマ

「さあ？でも、2組の代表は鈴だな。簪は、こういうの辞退しそうだし」

刀奈

「そうなの？」

ユウマ

「箒は、ザ日本女子だからな。慎ましく御淑やかな女の子だから」

「会長とは、大違いだな」

刀奈

「ちよつと!!それってどういう意味よ!!」

ユウマ

「言葉通りの意味だけど」

簪

「それは言ってる。お姉ちゃん、よく暴走するし」

刀奈

「簪ちゃんまで!!」

簪

「3組の代表は誰だろう?」

刀奈

「さらつと話題を戻さないでよ!!」

ユウマ

「3組には・・・知り合いが居ないからな。誰が代表なのか予想が付かないな」

簪

「そういえば、ユウマさんとラウラは今週ドイツに帰るんですか？」

ユウマ

「昨日、義妹から手紙が来たから久しぶりに会いに行こうと思って」

簪

「ドイツって暮らしやすいですか？」

ユウマ

「居心地は良い所だよ。のどかだし、良い人が多いし、ビールは美味しいし、ソーセージやじゃがいも料理とかも美味しいし」

「住むには良い所だと思うよ」

簪

「ユウマさんは18歳ですよね・・・未成年飲酒にならないんですか？」

ユウマ

「ドイツじゃビールとワインは、16から飲めるから問題ないんだよ。簪ちゃんも平気で飲めるよ」

簪

「そうなんですか？」



ユウマ

「旅行とかだと、現地の法が適応されるからね。蒸留酒は無理だけど」

簪

「蒸留酒って何ですか？」

ユウマ

「ウイスキーとかウオツカ系のお酒の事だよ」

簪

「・・・私も付いて行っても良いですか？」

ユウマ

「ISで飛んでいくから、ヘビーアームズだとキツイと思うよ？」

簪

「飛行機で行かないんですか？」

ユウマ

「飛行機だと時間掛かるもん。俺のISで飛んではば短時間でドイツに行けるから」

簪

「ラウラは、ISを持ってるんですか？」

ユウマ

「持ってるよ。俺と束さんが作った可変機のISをね」

簪

「可変機・・・マクロスみたいな戦闘機ですか!？」

ユウマ

「一応飛行形態は有るけど、戦闘機ではないかな・・・俺のISも可変機だけど・・・模型だと、このZガンダムのウェイブライダーみたいな形かな」

簪

「可変機・・・ロマンが有りますね」

ユウマ

「分かる? 変形ってロマンだよね!!」

簪

「可変機って何とも言えないカッコよさが有りますよね!!」

刀奈

「ちよつとく私をほったらかしにしないでよ」

簪

「お姉ちゃん、今最高に盛り上がってるから黙ってて」

ユウマ

「お菓子あげますから、大人しくしててください」

刀奈

「2人が冷たい・・・」

ユウマ

「俺のISは合体も出来るんだよ！」

簪

「合体も出来るんですか?!どんな合体なんですか?!」

ユウマ

「3機のISが合体すると、こんな感じのスーパーロボットになるんだよ！」

簪

「カッコいい!!名前は何て言うんですか!!」

ユウマ

「SRXって言うんだよ。天下無敵のスーパーロボットなんだぜ」

簪

「カッコいい・・・他にも合体できるISは有るんですか?」

ユウマ

「一応有るけど、機構が複雑すぎて技術的にも厳しいから作ってないよ。作るつもりも

無いけどね」

簪

「何ですか？」

ユウマ

「適性を持つてるパイロットが居ないから。それに、超古代遺跡から出土した技術を組み込むのが無理だから」

簪

「相当難しいんですね。適正ってどんな適性が必要なんですか？」

ユウマ

「エレメント能力って言う超能力かな・・・でも超能力者なんて居ないから作っても意味無いんだよね」

「だから資材の無駄だし、作らないの」

簪

「そうなんですネ・・・」

「それで、何時頃にドイツに行くんですか？」

ユウマ

「お昼ごろに行くけど・・・ホントに着いてくるの？」

「俺とラウラは、特別なビザで何処でも入国できるけど簪ちゃんが来るとなると・・・空港で入国審査をしないと入国出来ないんだよな」

簪

「そうなんですか・・・なら、今回は諦めます」

ユウマ

「ちなみに聞くけど、何でドイツに来たいの？」

簪

「ドイツで、どんなＩＳを作ってるのか気になって・・・」

ユウマ

「本心は？」

簪

「ドイツ旅行がしたいです!!」

ユウマ

「素直でよろしい!!」

「母さんに頼んで、特別に入国できるようにしてもらおうよ」

簪

「良いんですか？」

ユウマ

「良いの良いの。たまには息抜きもしないとね」

簪

「ありがとうございます！」

刀奈

「簪ちゃんがドイツに遊びに行くなら、お姉ちゃんも♪」

ユウマ

「生徒会長は溜まった仕事を片付けてから言えやコラ」

刀奈

「良いじゃない!!たまには息抜きしないとやっていけないわよ!」

ユウマ

「だったら、俺と模擬戦してみます?」

刀奈

「え〜つと・・・」

ユウマ

「現時点で、世界最強の俺に勝てれば宿泊先にドイツの最高級のホテルでスイートルームを手配してあげますよ〜」

刀奈

「模擬戦は遠慮したいかな・・・」

簪

「ユウマさん、だらしないお姉ちゃんをコテンパンにしてください」

刀奈

「簪ちゃん!!」

虚

「お話は聞かせて頂きました。刀奈、一度コテンパンに負けてきなさい」

ユウマ

「そういう訳で・・・今からアリーナに行きましょうか♪」

刀奈

「イヤ〜!!!」

アリーナ

ユウマ

「さあ、ISを纏って掛かってきなさい」

刀奈

「何でこんな事に・・・」

「こうなったら当たって砕けろよ!! ストライクガンダム!!」

ユウマ

「ビルドストライクガンダム・・・カモン!!」

刀奈

「私のストライクと同じ!!」

ユウマ

「違うね・・・コイツは、ストライクガンダムをベースにカスタムされた全くの別物だ!」

刀奈

「幾らかスタムされた機体でも、ストライクの汎用性には勝てないわよ!!」

ユウマ

「残念でした・・・俺のビルドストライクガンダムは、ストライク以上のカスタム性能を持つてるんだよ!」

「バックパック換装!!ビルドストライクコスモス!!」

刀奈

「こんなストライクガンダムは知らないわよ!!」

ユウマ



「知らなくて当然。だって誰にも見せた事無いもん……でも、今回使うI Sはガンダムじゃないんだよね」

「俺のお気に入りに……R——Iの出番だぜ!!」

簪

「ユウマさんのお気に入りのI S……」

ユウマ

「R——I！展開!!」

刀奈

「……全然強そうじゃないわね」

ユウマ

「見た目で判断すると痛い目見るぜ……Gリボルヴァー!」

バン！バン！

ガキンツ!!ガキンツ!!

刀奈

「ストライクガンダムには、実弾兵器が効かないの忘れたんですか?」

ユウマ

「誰がストライクの設計図用意したと思ってるんだよ……フェイズシフトは、確かに実弾兵器には無類の強さを誇るけど……攻略法は幾らでも有るんだよ!!」

「Gリボルヴァー!!ランダムシユート!」

バババババツ  
!!!!!!

ガギギギギギツ  
!!!!!!

刀奈

「嘘!!ダメージ過多でフェイズシフトがダウンしたの?!」

「何だよ!!永久機関バッテリーでエネルギー問題は解決されてる筈なのに!!」

ユウマ

「そこら辺の考え方が間違ってるんだよ……無尽蔵にエネルギーを使えるからって、全武装とフェイズシフトが永久的に使える筈がない」

「ダメージを一度に大量に喰らうと負荷が掛かってシステムが処理しきれずにダウンするんだよ……そんな事も知らずにストライクに乗ってるのかな?」

「キチンとマニュアルに書いてあるのに」

虚

「確かに書いてありましたね……刀奈、またマニュアルを読むのをサボりましたね?」

刀奈

「ギクツ!!」

簪

「・・・何でこんなだらしのない人が私のお姉ちゃんなんだろう・・・虚さんか箒の妹になりたかったな・・・」

刀奈

「簪ちゃんの評価がどんどん下がっていく?!」

「こうなったら、シルエツト換装!!ソードストライク!!」

ユウマ

「R―I相手に接近戦挑むなんて・・・代表候補生見習いから出直してきな!!」

「T―L I N Kフルコンタクト!!念動鉄拳・・・T―L I N Kナツココオ!!!」

刀奈

「え?」

「バコン!!ドゴン!!」

刀奈

「キャアアアアア!!!」

ユウマ

「スクラップの出来上がりってね」

刀奈

「イタタ・・・えっ!!今の一撃でダメージレベルD突破!!」

「嘘でしょ!!これじゃあもう直せないじゃない!!」

ユウマ

「ご愁傷様・・・これで分かったんじゃない?専用機持っても、適当に使つてるところなるって」

「正直、ストライクのスペックの30%も出せてないね・・・ちよつとガツカリかな」

簪

「お姉ちゃんってこんなに弱かったの?」

虚

「お嬢様、刀奈は決して弱くはありませんよ?ユウマさんが強すぎるんですよ」

刀奈

「何も出来なかった・・・一撃でやられて、ISを壊して・・・何やってるんだら私・・・」

ユウマ

「いい加減に適当に生きるの辞めた方が良いんじゃない?暗部出身なんて肩書きあつても意味無いんだし」

「俺が暗部に居たら、気に入らない物は片っ端から潰して俺が普通に生きていけるようにする覚悟の元に行動してると思うけど・・・」

「君には、覚悟がない・・・それで良くI S学園最強なんて言えたね・・・」

「君にストライクガンダムを渡したのは失敗だったかな」

簪

「お姉ちゃん心底落ち込んでる」

虚

「あれは心が折れましたね・・・」

刀奈

「・・・覚悟・・・やってやるわよ・・・私の全部を掛けてでも勝ってみせるわよ!!」

「この際、腕が折れても足が折れても関係無いわ!!」

「私の全てをこの一撃に込めてやるわよ!!!」

「喰らいなさい!!!」

ユウマ

「・・・諦めずに挑んでくるその覚悟・・・少しは成長したかな?」

「ご褒美にストライクの拡張パックをあげよう。ノワールストライカーパックとオプ

ションパーツ込みでね」

刀奈

「・・・何で拡張パックを・・・」

ユウマ

「二度心をへし折らないと君の性根は直らないと思ったから。丁度良い薬になったんじゃない?」

「それと、拡張パックをインストールすればISのダメージは修復されるようにしてあるから」

「それとドイツに来るのは良いよ。約束通りスイートルームを用意しておくから、準備はしておいてね」

「簪ちゃん、これがヘビーアームズ用の高速移動用の拡張パックね。ヘビーアームズにブースター増設する簡単な拡張パックだけどね」

簪

「本音を連れて行っても良いですか?」

ユウマ

「本音ちゃんを連れて行くとなると、高速飛行出来るISを用意する必要があるんだけど・・・ムラサメでも出すかな」

虚

「本音は、I S 操縦よりも整備の方が向いているのであまり操縦技術は期待しない方が  
良いかと」

ユウマ

「大丈夫大丈夫♪初心者でも使いやすいようにモビルトレースシステムとA I アシスト  
組み込んであるから、使いやすくしてあるのよ」

「普段体動かす感覚でI S も動くようにしてあるから問題ないのよ」

刀奈

「ストライクガンダムには、高速移動用の装備が無いんですけど・・・」

ユウマ

「エールストライクか、追加したノワールストライカー使えば良いよ。あれは大気圏内  
でも使えるように設定弄くつてあるから」

「高速巡行も普通に出るから。でも俺のI S の最高スピードはマツハ5だから無理し  
て付いて来ようとするると死ぬからね」

簪

「マツハ5?!」

虚

「そんなスピードで移動するなんて・・・戦闘機を遙かに超えていますね」

ユウマ

「良いでしょ？変形して空飛ぶと気持ちいいんだよ」

簪

「変形・・・夢が有りますね」

虚

「ところで、いつドイツに行くんですか？コチラも予定などが有るので」

ユウマ

「金曜日のお昼に学校早退して行くよ。ちくちゃんには許可貰ってるからね」

簪

「学校を早退・・・出来るかな」

ユウマ

「ちよつと待っててね」

「もしもしちくちゃん？4組の簪ちゃんと1組の本音ちゃんと虚さんと生徒会長も金曜

日早退に出来る？」

千冬

「全員でドイツに行くのか？」

ユウマ



「ドイツに行きたいんだってさ」

千冬

「ふむ・・・私の補習授業で100点を取れば早退できるように手配しよう」

ユウマ

「ちなみに難易度は？」

千冬

「高校入学レベルにしておこう」

ユウマ

「了解。補習授業はいつやるの？」

千冬

「今からだ」

ユウマ

「今からね・・・今から!!」

千冬

「丁度私の予定が空いているんだ。視聴覚室に來い」

ユウマ

「分かった」

「と言う訳で・・・今からテストをします!!みんなで視聴覚室にレッツゴー」

### 視聴覚室

千冬

「よく来たな・・・今から追試を始める。無事に100点を取れば金曜日に早退できるように手配してやろう」

「テストは、タブレット端末で出題するから各自持つて行くんだ」

簪

「100点取らないといけないの・・・難易度が高い」

本音

「ほえくテストで100点取れば良いの〜?」

刀奈

「生徒会長ですもの!テストで100点は当たり前よね♪」

虚

「あまり余計な事を言う・・・」

千冬

「ほお?なら生徒会長とやらの本気を見せてもらおうか?」

「特別にお前だけ大学院卒業レベルのテストにしてやろう」

刀奈

「・・・大学院卒業レベル・・・無理よ!!」

千冬

「簡単なんだろう？お前の本気を見せてみる」

「ユウマもやってみろ。点数の指定は無しで構わん」

「腕試し程度で遊んでみる」

ユウマ

「難易度は？」

千冬

「選んで良いぞ」

ユウマ

「なら大学院卒業レベルで」

千冬

「では、制限時間は1時間・・・始め！」

刀奈

「問題が難しすぎるわ・・・解けない」

簪

「普段勉強頑張ってたて良かった．．．全部分かる」

本音

「復習しておいて良かった〜♪」

虚

「これくらいは想定内ですね」

ユウマ

「これが大学院卒業レベルか．．．意外と簡単だな」

1時間後．．．

千冬

「それまで!!これから採点を行う」

「一齐にタブレット端末に表示されるから、各自確認するように」

刀奈

「．．．30点．．．」

簪

「やった!100点!!」

本音

「私も100点だよ♪」

虚

「当然の結果です」

ユウマ

「やった満点。やっぱり俺って天才だぜ」

千冬

「1人を除いて満点か・・・約束通り金曜日は早退できるように手配しよう」

「それと・・・更識刀奈、お前には特別に私が直々にISの模擬戦と追試をしてやろう」

刀奈

「これ以上は身が持ちません!!」

千冬

「以前からお前のお調子物の態度は気に入らん。矯正してやる」

刀奈

「みんな助けて!!」

簪

「お姉ちゃん、骨は拾ってあげるから」

本音

「お嬢様頑張って〜♪」

虚

「今までの態度を改めて下さい」

ユウマ

「ちくちゃん、I Sは何使う？俺の手持ちのI Sで使えるの貸すよ」

千冬

「そうだな・・・私でも使えるガンダムは有るか？」

ユウマ

「ちくちゃんでも使えるガンダム・・・俺が予備で作ったインパルスガンダム使う？」

「特別に、刀のガーベラストレートとタイガーピアスも付けちゃうよ」

千冬

「それを貸してくれ」

ユウマ

「はいよ！気に入ったらちくちゃんにインパルスガンダムあげちゃうよ。オマケにちくちゃん好みにカスタマイズもするよ」

千冬

「了解した」

「更識・・・今日から1カ月ミツチリ鍛えてやろう」

刀奈

「イヤ〜!!!!」

ユウマ

「ちゅちゃん、インパルスガンダムはフォースシルエットが標準装備だから早く飛べるから楽しんでな」

千冬

「感謝する!!更識・・・さあ、楽しもうか?」

刀奈

「・・・誰か助けて〜!!!!」

ユウマ

「と言う訳で、ドイツには此処にいるメンバーとラウラの5人でいきます」

「1日分の着替えが有れば十分だから大荷物じゃなくて大丈夫だよ。大抵のものはホテルに常備されてるから」

簪

「お姉ちゃん・・・生きて帰って来られるかな？」

虚

「恐らく遅しくなつて帰ってくるのではないかと」

本音

「どんな風が変わるのかな」

ユウマ

「マジメ人間に生まれ変わるんじゃない？ちゅちゃん、軟弱なタイプ嫌いだし」

簪

「お姉ちゃん・・・強く生きて・・・」

ユウマ

「ああ・・・どうかちゅちゃんが手加減しますように」

そんなこんなで金曜日・・・

ユウマ

「さあ・・・これからドイツに行きますが、かなりのスピードで飛んでいきますのではぐれない様にして下さい」

ラウラ



「人数が増えたんだな」

簪

「予定では何時間で着きますか？」

ユウマ

「3時間です！」

本音

「超高速移動なんだね♪」

虚

「本当にマツハ5で飛んでいくんですね」

ユウマ

「では、各自IS展開してください」

ラウラ

「行くぞ・・・リガズイ・カスタム!!」

簪

「ヘビーアームズ・ブースター展開」

本音

「ムラサメ展開♪」

虚

「ムラサメ・・・飛翔します」

ユウマ

「R―1展開！各自変形開始!!」

ラウラ

「ウェイブライダー！」

簪

「腕部ブースター展開！」

本音

「ムラサメ変形♪」

虚

「変形開始！」

ユウマ

「ドイツに向かって出発!!」

みんな

「出撃!!」

一夏

「千冬姉……ユウマさん達行っちゃったぞ」

千冬

「良いんだ。私が許可したんだからな」

箒

「ドイツか……母さんたちは元気にしているだろうか」

東

「ゆくくんつたら……彼女の東さんを置いて行くなんて信じられないよ!!!」

千冬

「仕方ないだろ……家族の大切な時間を過ごすのにお前が居ると騒がしいだけだからな」

一夏

「のほほんさんとお姉さんと簪も着いて行っただな……何で?」

千冬

「ドイツ旅行がしたいらしい……オマケにドイツビールを飲むのも目的の一つらしい」

東

「未成年の飲酒は認められません!!」

千冬

「知らんのか？ドイツは、16からビールが飲めるんだぞ？オマケに旅行中は滞在先の国の法律が適用されるからな」

「だから問題はない」

東

「むゝ・・・東さんも今からドイツに行ってきます!!」

千冬

「駄目に決まってるだろうが!!!お前は自分の仕事をしろ!!」

東

「ヤダゝ!!ゆゝくとデートしたい!!イチャイチャしたいよ!!」

箒

「姉さん・・・食堂内で騒がないでください・・・」

東

「・・・無理!!」

千冬

「なら、私がアイアンクローをお見舞いしてやろう」

東

「それだけは勘弁してください!!」

千冬

「だったら大人しくしろ」

東

「ゆ〜くん・・・」

一夏

「箒・・・お前も大変だな」

箒

「全くだ・・・姉さんは子供っぽい所が有るから困るんだ」

千冬

「そろそろ授業が始まるから、教室に戻れよ？」

一夏

「了解」

箒

「はい」

東

「は〜い」

千冬

「お前は教員室だ」

東

「あくん!! 箒ちゃん助けて〜!!」

箒

「ちゃんと仕事してください!」

東

「箒ちゃんまで〜!!!」

東は、千冬に首を掴まれて連れて行かれた・・・

ドイツに向かう途中・・・

ピピピツ!!

ユウマ

「通信? 誰だろ・・・こちらユウマです」

レオナ

「ユウマ!! 今ドイツに向かつてる途中だったりしない?!」

ユウマ

「今現在……トルコの上空をステルスで飛んでるけど？」

レオナ

「良かった……イギリス近海でシージャック事件よ!!今すぐに急行してテロリストの拘束と乗客の救助をしてもらいたいの!!」

ユウマ

「詳細な場所は何処？」

レオナ

「イギリス本土から北に400キロ程離れた場所よ!!」

ユウマ

「これから相当飛ばして現場に急行するから、のほほんさん達の護衛に戦闘機でも良いから急行させてくれ」

レオナ

「分かったわ!!今すぐにタスクを向かわせるわ!!」

ユウマ

「ラウラ、急遽任務だ。速度を上げて現場に急行するぞ」

ラウラ

「了解した」

ユウマ

「簪さん、申し訳ないけど俺達任務が入っちゃったからいったん離れる。スグに父さんが駆け付けてくれるはずだからこのままナビの指示にしてがって進んでくれ」

簪

「あの・・・私達にも何か手伝えることはありませんか？」

ユウマ

「申し訳ないけど、俺達の任務はゴースト小隊だけの任務なんだ。だから協力はいらな

いよ」

簪

「そうですか・・・」

ユウマ

「・・・ファントム・・・準備は良いか？」

ラウラ

「隊長・・・準備は出来ています」

ユウマ



「ゴースト小隊出撃!!」

ラウラ

「了解!!」

本音

「ほえ〜・・・カッコいい〜」

簪

「ゴースト小隊・・・」

虚

「世界中が注目するゴースト小隊は2人だけなんですわ・・・」

イギリス近海・・・豪華客船クイーンアンタレス号

テロリストA

「この船はジャックさせて貰ったわ!!アンタ達は人質よ!!イギリス政府からたんまりと身代金を貰って国外に逃亡よ!!」

テロリストB

「姉御、この客船内に貴族の連中と王室のメンバーが居るらしい」

テロリストA

「丁度良い・・・億単位の身代金が貰えるわ!!」

テロリストC

「姉御!!見つけました!貴族連中です!」

イーサン・オルコット

「お前達は何故こんな野蛮な事をする?!」

テロリストA

「世の中金が全てなのよ!!戦争を起こして金が貰えるなんて素晴らしい商売じゃない!!」

「これだから傭兵とテロリストは辞められないわ!!」

ミア・オルコット

「世界は今不安定な状況が続いているのに・・・こんな事が頻発すれば間違いなく戦争が起きるわよ!!」

テロリストB

「大歓迎だね!!戦争が起きれば私達が儲かるんだからね!!」

「手始めに・・・ドイツに戦争を仕掛けるとするかい!!」

船外・・・

ユウマ

「船内の様子は大体把握した・・・ラウラ、俺が船内に突入したらシールドでＩフィールドを広域モードで展開しろ」

ラウラ

「だが、Ｉフィールドは実弾には弱いのではないのか？」

ユウマ

「俺と束さんが作った機体に弱点なんてそうそう作ると思うか？Ｉフィールドに物理シールドを混ぜてある」

「これならビームでも実弾でも問題なく防げる・・・頼んだぞ」

ラウラ

「了解した」

ユウマ

「それじゃあ作戦開始・・・その前に船内全部をスキャンしてみよう」

俺が、T-I-N-Kセンサーで船内を一通りスキャンしてみると・・・

ユウマ

「マズいな・・・」

ラウラ

「何がマズいのだ？」

ユウマ

「船内の動力室に爆発物が仕掛けられてる・・・全部C4だな」

ラウラ

「船底に穴が空けば、いくら巨大な客船でも数時間は持たないぞ」

ユウマ

「面倒な事しやがって・・・せめて爆発物に処理が得意な奴を見つけとけばよかった

ぜ・・・」

???

「爆発物の処理は私に任せてもらおう」

ユウマ

「誰だ!？」

ギリアム・イエーガー

「私はギリアム・・・以前ドイツで特殊作業員をしていた」

「たまたまこの客船に乗り合わせていたんだが、異変を感じて身を潜めていたんだが……」

ユウマ

「アンタを信じて良いんだな？」

ギリアム

「完璧な仕事を約束しよう」

ユウマ

「なら、爆弾の解除は頼んだ。ラウラ、一斉に突入するぞ」

ラウラ

「了解した」

ユウマ

「音を立てると面倒だから、単分子カタターで船外の壁をくり抜くか……」

「よし……作戦開始だ」

ラウラ

「了解した」

ギリアム

「どうかテロリストを動力室に来させない様にしてくれ」

ユウマ

「善処する・・・突入！」

俺達は、静かに船内に入ると・・・テロリストと乗客の人達が集められている大広間に向かった・・・

ユウマ

「ドイツ軍だ!!!全員手を上げて降伏しろ!!」

テロリストA

「もう来たのかい!!」

「仕方ないね!!人質を殺しな!!」

ユウマ

「ラウラ!!」

ラウラ

「任せろ!!フィールド展開!!」

ガキキキン!!!

テロリストA

「銃弾を弾きやがったってのかい!!なら直接撃ち殺すだけさ!!」

ユウマ

「させるかよ!! 念動フィールド・・・発動!!」

テロリストA

「一体どうしたって言うんだい!! 体が動かないよ!!」

テロリストB

「銃がバラバラになっていくだよ!!」

テロリストC

「何だよ・・・超能力でも使ってるのかよ!!」

ユウマ

「ラウラ!! テロリストを拘束しろ!」

ラウラ

「了解した。全く、こんな愚かな事をしなければいい物を・・・拘束完了」

テロリストA

「まだだよ・・・この船の動力室にはC4を大量に仕掛けてるんだからね!! 一齐に起爆すればココに居る奴らは全員海の藻屑さ!!」

テロリストは、腰に付いていた起爆装置のボタンを押す・・・だが爆発は起きなかった

テロリストA

「何で爆発しないんだい!!」

ギリアム

「随分とお粗末な起爆装置だ・・・配線を2本切っただけで解除できてしまったぞ」

テロリストA

「こうなったら・・・自爆でもしてお前達を道連れにしてやるよ!!」

バンツ！バンツ！

ユウマ

「起爆装置を壊せば何も出来ない・・・残念だったな」

テロリストA

「私達の崇高な計画が・・・」

ラウラ

「崇高な計画・・・戦争を起こして楽しむ事の何処が崇高だというのか私には分らんな」

ギリアム

「分からなくて良いのさ・・・テロリストの考えは常軌を逸しているのだから」

ユウマ

「とりあえず安全を確保・・・イギリス軍に対応を引き継いだ後帰投しますつと」

ラウラ



「隊長、イギリス軍が来たようだよ」

イギリス軍

「この度はご協力ありがとうございます!!後日女王陛下から今回のご協力のお礼として勲章を差し上げたいとの事です!!」

ユウマ

「申し訳ありませんが辞退させていただきます。俺達は所詮部外者なので」

ラウラ

「私も辞退させてもらおう。あくまでドイツ軍人として駆け付けただけなのでな」

ギリアム

「では、私はこれで失礼するよ。まだ任務の途中なのでね」

ユウマ

「ちよい待ち、これ今回のお礼って事で」

ギリアム

「小切手?」

ユウマ

「小切手に50万ユーロ書いといた。受け取ってくれ」

ギリアム

「・・・受け取らせてもらおうよ」

ユウマ

「今度困ったらまた助けてね」

ギリアム

「そうだな・・・その時は遠慮なく呼んでくれ。私の連絡先だ」

ユウマ

「なら、これが俺の連絡先ね」

ギリアム

「では、また会おう」

ラウラ

「良い人だったな」

ユウマ

「ああ・・・ドイツの諜報員、ギリアム・イエーガーさん」

イーサン

「少し良いかい？」

ユウマ

「はい？」

イーサン

「君は以前ドイツの巨大タンカーで救助活動を行っていた人かい？」

ユウマ

「確かにあれやったのは俺ですけど」

ミア

「アナタが主人を助けてくれたのね・・・イーサンを助けてくれてありがとう！」

ユウマ

「動力室に居た内のお一人ですか？」

イーサン

「私は、イーサン・オルコット」

ミア

「妻のミア・オルコットです」

ユウマ

「オルコット・・・セシリアのご両親ですか？」

イーサン

「娘を知っているのかい？」

ユウマ

「同級生なので」

ミア

「IS学園に通っているの？」

ユウマ

「一応」

ラウラ

「ん・・・隊長、大統領から通信だ」

ユウマ

「コツチに回してくれ」

レオナ

「無事に事態の鎮圧は終わったかしら？」

ユウマ

「さつき片を付けました。全員テロリストだったんで、イギリス軍に引き渡しておきました」

レオナ

「そう・・・大事にはならなかったのね」

ユウマ

「ギリアムさんが協力してくれたんで」

レオナ

「ギリアムが居たの？」

ユウマ

「ええ、爆弾の処理してくれました」

レオナ

「もう、たまには戻ってくればいいのに」

ユウマ

「引継ぎは終わったんで今からドイツに戻ります」

レオナ

「了解よ。晩御飯は気合い入れて用意するからね♪」

ユウマ

「・・・ちなみに聞きますけど、晩御飯作るの誰ですか？」

レオナ

「タスクだけど？」

ユウマ&ラウラ

「良かった・・・」

レオナ

「ちよつと2人共・・・何か失礼な事考えてないかしら？」

ユウマ

「・・・母さんの料理・・・暗黒物質みたいなものになるから心配なんだよなあ」

ラウラ

「あの可哀そうなビーフシチューは見えていられなかったぞ」

レオナ

「2人もタスクと同じこと言う・・・クロエ達にも同じ事言われたのよ!!」

ユウマ

「事実だし、母さんはなるべく料理はしないでくれ」

ラウラ

「毎回可哀そうな料理を見るのは辛いんだ」

レオナ

「分かったわよ！料理はキッチンと出来るようになるまでやらないわよ!!」

ユウマ

「そうしてくれ」

ラウラ

「これでひと安心だな」

レオナ

「もうコツチに戻ってこれそう？」

ユウマ

「もうこれで戻ります」

ラウラ

「では最大速度で飛ばしていこう」

ユウマ

「それでは・・・チェンジ！Rーウィング！」

ラウラ

「チェンジ！ウエイブライダー！」

ユウマ&ラウラ

「目標に向かって飛翔する!!」

イーサン

「ちよっ!!」

ミア

「待って!!」

上空を飛行中・・・

ラウラ

「先ほど呼び止められていた気がするんだが・・・」

ユウマ

「気のせいと言う事にしておこう・・・なんかめんどくさくなりそうだし」

「一応セシリアには、俺の正体を両親に明かさないう様にメールしておこう」

IS学園

セシリア

「あら？メールが来ましたわ・・・ユウマさんからですね」

ユウマ

「さつきセシリアのご両親がシージャック事件に巻き込まれていたから助けたけど、くれぐれも俺の事はご両親に教えないようにして欲しい」

「顔は見せてないし声は変声機で女性の声に変えておいたから暫くは分からないと思う



けど、後々面倒な事になりかねないからどうか俺の事は内密にしておいてもらいたい」  
「お礼は、ロンネフェルトの紅茶とバームクーヘンでどうかご勘弁を」

セシリア

「またお父様とお母様を助けてくれたんですのね・・・」

「分かりましたわ。お父様達には、適当にはぐらかしておきますわ。お土産お待ちしていますわ♪」

上空・・・

ユウマ

「セシリアの方はこれでよし・・・」

ラウラ

「簪たちは無事に着いただろうか」

ユウマ

「父さんが迎えに行つたから大丈夫でしょ」

ラウラ

「父さんはISに乗れるのか？」

ユウマ

「俺が乗れるのをコッソリ作った」

ラウラ

「良いのか？そんな代物を簡単に作って」

ユウマ

「ガンダムを作ってる時点で今更でしょ？」

ラウラ

「それもそうか・・・」

ユウマ

「家が見えてきたぞ」

ラウラ

「流石に速度を落とさないとマズいな」

ユウマ

「減速・・・変形解除つと」

ラウラ

「モビルスーツに変形」

簪

「帰って来たみたい」

本音

「ホントだね」

虚

「迎えに行きましょう」

レオナ

「2人共お帰りなさい」

タスク

「お疲れさん!! 飯先に食うか?」

ユウマ

「ただいま。先に風呂入るよ」

ラウラ

「今戻ったぞ、母さん・父さん」

簪

「おかえりなさい」

本音

「おかえり〜♪」

虚

「お疲れさまでした」

ユウマ

「ただいま」

「あれ、く〜ちゃん達は？」

レオナ

「まだ学校よ。最近学校に通い始めたのよ」

ユウマ

「高校？」

レオナ

「インターナショナルスクールね」

タスク

「みんな成績優秀でスゲエんだぜ」

ユウマ

「なら、何かご褒美を考えないとな・・・3人の好きな物でも用意するか」

レオナ

「なら、クロエとステラの2人はぬいぐるみが良いかしら。アウルは、新しい工具が良いと思うわ。ステイングは、新しい電子系の工具かしら」

ユウマ

「よし、今すぐ去买つて来る!! 父さん、車借りるよ!」

タスク

「気をつけて行けよ」

ラウラ

「兄さんは、とことん妹と弟に甘いな」

簪

「ラウラも妹でしょ?」

本音

「良いお兄ちゃんだね♪」

虚

「しつかりしているようで優しい一面も有るんですね」

レオナ

「さて、子供達が帰ってくる前に色々準備しましょう♪」

タスク

「今日は、ご馳走だぜ♪」

ラウラ

「ご馳走♪」

レオナ

「ターキーを用意したのよ♪」

ラウラ

「ターキーだと?! クリスマスでしか見かけない料理ではないか!」

レオナ

「折角家族が集まるんですもの♪ 奮発しないとね♪」

ヒピッツ!!

レオナ

「何よ、この幸せで忙しいときに」

「もしもし、今日は午後は有給で公務はお休みになっている筈よ」

秘書

「実は、イギリス王室から先ほどのシージャック事件を解決した功労者の2人をイギリスに招待したいと打診が来まして・・・」

レオナ

「ねえラウラ、イギリスから何か言われた？」

ラウラ

「感謝のしるしに勲章を差し上げたいと言われたが辞退してきたぞ」

レオナ

「当の本人は辞退してきたそうだけど？」

秘書

「それがどうしても直接会って感謝を伝えたいのと勲章は必ず受け取ってもらいたいと・・・」

レオナ

「イギリス王室に電報を送ってくれる？」

「今回は、極秘作戦で行ったので公の場でゴースト小隊のメンバーを出すわけにはいきません」

「感謝は本人達に伝えておきますので、今回は勲章も式典も希望しません。そつとしておいてくださいって」

秘書

「直ちに電報を作製してお送りしておきます」

レオナ

「ごめんなさいね、面倒な事になっちゃって」

秘書

「構いませんよ。ユウマ君とラウラちゃんの人柄は良く知っていますから」

「では、ご家族と貴重な時間をお過ごし下さい」

レオナ

「ありがとう♪」

ラウラ

「何だか面倒な事になりそうなのか？」

レオナ

「ラウラは気にしなくて良いのよ」

タスク

「それにしても、他国の人間に勲章渡すもんか？」

「普通は自国で活躍した英雄に勲章を授与するもんだろ？」

レオナ

「繋がりを作るのが1つの目的ね……別にイギリスとは仲良くさせて貰ってるけど、あんまり干渉して来るなら対処法を考えないといけないわね」

本音



「何だか難しい話だね」

簪

「外交的な話みたい」

虚

「私達にはまだ早い話ですね」

レオナ

「今は気にせずに準備しましょう」

タスク

「そうだな。ビールも用意するか？」

「用意するならアルコール度数のかなり弱いビールの方が良いか？」

レオナ

「そうね・・・折角だし用意しちゃいましょう」

## お出掛け

ドイツに帰ってきた俺は、くくちゃん達へのプレゼントを買いにコス○コに来ていた……

ユウマ

「クロエとステラはぬいぐるみ……アウルは工具……ステイングは電子工具……」  
「ぬいぐるみは何の動物が良いんだろうか……とりあえず猫と犬のデカいぬいぐるみを  
買うとして……」

「工具系は、選択肢が多すぎるんだよな……面倒だし一流メーカーの最高級品を一式揃えちまえ!!」

「電子工具も一流メーカーで全部コンプリートだ!!」

「会計金額が恐ろしいぜ……でも可愛い妹と弟の為だ……稼ぎはかなり有るんだ!!」  
「男気を見せるチャンスだ!!」

俺は、会計を済ませると……金額は10万を余裕で超えた

ユウマ

「いや、買った買った。久々に奮発しちゃったぜ」

「くちちゃん達帰って来てる頃かな・・・どうせならサプライズしたいし早く帰ろう」

俺は、買ったモノを全部車にぶち込んで家に帰った

家族のマイホーム

ユウマ

「ただいま」

タスク

「おかえり！随分と買い込んできたんだな」

ユウマ

「折角の再会なんだし、奮発しないとね」

レオナ

「随分と大きいぬいぐるみ買ってきたのね・・・部屋におけるかしら？」

タスク

「いつその事、家を改築するか？」

レオナ

「そうね・・・家族が増えるかもしれないし、いい機会かもしれないわね」

ユウマ

「子供でも出来たの？」

レオナ

「まだだけどね」

タスク

「いずれはな」

ユウマ

「ふくん・・・もしかしたら俺結婚するかもしれないからよろしく」

レオナ

「ユウマが結婚・・・相手は一体誰なの!？」

タスク

「学生結婚か？若いね」

ユウマ

「相手は東さん」

レオナ

「東ちゃんね・・・良いんじゃないかしら♪」

タスク

「ウサギの姉ちゃんか・・・案外お似合いかもな」

本音

「ゆ〜ゆ〜帰って来てたんだ〜。その大きいぬいぐるみは何?」

ユウマ

「2人の妹へのお土産。本音ちゃんも欲しいの?」

本音

「欲しいです!!」

ユウマ

「ならお金渡すから、後でみんなで買いに行こう」

「一夏達用のお土産も買わないといけないし・・・セシリアに俺の情報の口止めに協力してくれたお礼のお土産で紅茶とバームクーヘン買いに行かないとだし」

本音

「ドイツのお菓子を沢山買いたいな〜♪」

レオナ

「ドイツの有名なお菓子なら、ハリボーが有名ね」

タスク

「日本じゃ売ってない種類も多いんだぜ？」

本音

「ホントなんですか!？」

「かんちゃん!!お姉ちゃん!!今すぐお買い物に行こうよ!!」

簪

「今日はもう夕方だから明日に買いに行く」

虚

「その方が良いわね。短時間で日本に戻れるんだから慌てる必要は無いと思うわ」

本音

「は〜い」

ラウラ

「兄さん、スクールバスが来たぞ?姉さん達らしき人影が降りていた」

ユウマ

「了解。ラウラ、サプライズのお時間だぞ」

ラウラ

「了解した」

クロエ

「お父さん、お母さん、今帰りました」

ステラ

「ただいま」

アウル

「帰ったよ」

ステイング

「腹減ったぜ」

ユウマ

「みんなおかえり」

ラウラ

「久しぶりだな。これは日本のお土産だ」

クロエ

「お兄ちゃん・・・ラウラ・・・」

ステラ

「お兄ちゃん？」

アウル

「何で・・・」

ステイニング

「何でコツチに居るんだよ・・・」

ユウマ

「クゥちゃんから手紙来たから会いたくなって来ちゃった♪」

ラウラ

「私もみんなに会いたくなって来ちゃった♪」

みんな

「お兄ちゃん！（兄ちゃん！）ラウラ！」

ユウマ

「おっと・・・みんな元気にしてたか？」

クロエ

「・・・元気になりました」

ステラ

「お兄ちゃんの匂い・・・いい匂い」

アウル

「兄ちゃん遊ぼうぜ！」



ステイキング

「兄ちゃん、バイク作ろうぜ!!」

タスク

「みんな落ち着け〜!今日はご馳走を用意したから手を洗ってうがいして来い!」

「遊ぶのは明日にしなさい!」

みんな

「は〜い!」

ユウマ

「タスクもお父さんをしっかりやっているみたいで安心安心」

タスク

「仮にも父親に向かって生意気だぞ?」

ユウマ

「輪廻転生してるから精神年齢的には、タスクより年上だから良いんだよ。それにちゃんと父さんって呼んでるだろ?」

タスク

「つたく、クロエ達にプレゼント渡してやれよ?」

ユウマ

「分かってるって♪」

クロエ

「お兄ちゃん・・・会いたかったです」

ユウマ

「元氣そうで良かった・・・これプレゼントだよ」

クロエ

「イヌのぬいぐるみ・・・大切にします！」

ステラ

「お兄ちゃん、ステラにプレゼントは？」

ユウマ

「ステラには・・・ネコのぬいぐるみだ」

ステラ

「ネコ♪ありがとうお兄ちゃん♪」

アウル

「俺達には？」

ステイング

「バイクでもくれんのか？」

ユウマ

「アウルとステイキングには・・・一流メーカーの工具一式だ」

アウル

「何これ!!最高級品じゃん!!」

ステイキング

「・・・俺の好きなメーカーの工具がこんなに・・・」

ユウマ

「折角だから奮発しちゃったぜ！」

レオナ

「みんな良かったわね♪」

タスク

「丁度飯の用意が出来たぞ♪」

ユウマ

「今日はご馳走だぜ！」

ラウラ

「ケーキも買ってきたぞ。誕生日ではないがろうそくも用意したぞ」

ステラ

「ケーキ♪」

ユウマ

「それじゃあいただきます！」

みんな

「いただきます！」

今日は、久しぶりに家族全員が揃って夕食を囲む事が出来た・・・

ちなみに、簪たちはユウマが手配した最高級三ツ星ホテルに宿泊していた・・・

夕食は、ドイツ料理を満足するまで食べたそうだ・・・

次の日・・・

レオナ

「ユウマとラウラは、いつ日本に戻るの？」

ユウマ

「明後日の夕方かな・・・マツハで飛んで帰るから」

ラウラ

「折角だ、ドイツのお菓子をクラスのおみんなに買って行こう。何が良いだろうか……」

タスク

「日持ちする奴が良いんじゃないかねえか？焼き菓子か、ドライフルーツとかな」

クロエ

「お兄ちゃん、今日はみんなで寝ても良いですか？」

ステラ

「ステラもお兄ちゃんと一緒に寝たい♪」

ユウマ

「俺は良いけど……みんなで寝られるベットが無いだろ」

レオナ

「なら、リビングに布団を並べてみんなで寝ましょう♪」

タスク

「折角だし、畳でも買っていくか？」

ユウマ

「ドイツに畳は無いだろ……」

ラウラ

「兄さん……ゴザが売ってるぞ」

ユウマ

「ホントだ……フロアリングにゴザだと背中が痛いぞ」

レオナ

「キャンペーンのマットを下に敷けば良いんじゃない？」

クロエ

「普段あまり使わないモノを買うのは無駄遣いになるのでいけないと思います」

ステラ

「クロエとステラがお兄ちゃんのベットに入れば問題ないよ？」

ユウマ

「……今日はクロエとステラの番で、明日はアウルとステイングとラウラの番にしよう」

ラウラ

「その方が良いな。ケンカにならないだろうし」

ユウマ

「母さんたちは子煩悩なのは良いけど、無駄遣いは止めるよ」

レオナ

「ユウマが一番クロエ達に甘いじゃない！」

ユウマ

「当然でしょ!!こんなに可愛い妹と弟達を甘やかして何が悪いのさ!!」

タスク

「2人とも落ち着けよ。今後は過度な甘やかしは禁止な?」

ユウマ

「仕方ない」

レオナ

「仕方ないわね」

ピンポーン♪

本音

「ゆ〜ゆ〜♪らうらう♪みんなでお買い物に行こうよ〜♪」  
簪

「本場のビールを飲んでみたいです」

虚

「生徒会室用の紅茶を買いたいです」

ユウマ

「はいはくい。ラウラも行く？」

ラウラ

「勿論行く」

クロエ

「私達は課外学習なので、夕方にお出掛けしたいです」

ステラ

「ステラもお出掛けしたい♪」

アウル

「兄ちゃん、ステイングと一緒にバイク組み立ててるんだけど分からない所があるから

一緒にやろうよ」

ステイング

「父さんも手伝ってくれよ」

タスク

「お父さんのメカニックの腕前を見せてやろうじゃないの！」

ユウマ

「良いよ。今日は夕方にみんなでお出掛けしようね」

「明日は、ガレージでバイク作ろうな」



クロエ

「約束ですよ？」

ステラ

「お兄ちゃん、ステラ今日の夕ご飯レストランに行きたい」

ユウマ

「何処でも連れて行ってあげるから学校に行ってきなさい」

アウル

「んじゃ、行ってきまゝす」

ステイング

「行ってくる」

レオナ

「行ってらっしやい♪」

タスク

「気をつけろよ」

ユウマ

「行ってらっしやい」

ラウラ

「夕方まで待ってるぞ」

クロエ達は、バスに乗って学校に向かった・・・

ユウマ

「それで、簪ちゃん達は何処に行きたいの？」

本音

「お菓子が沢山売ってる所が良いです♪」

簪

「ドイツビールの試飲が出来る所って有りますか？」

虚

「紅茶の専門店が有れば行きたいです」

ユウマ

「みんな割とバラバラだな・・・」

レオナ

「なら、簪ちゃんは私が案内するわよ」

タスク

「お菓子の嬢ちゃんは俺が連れて行ってやるよ」

ユウマ

「なら、俺とラウラで虚さんを連れて行くか」

本音

「ありがとう♪」

簪

「よろしくお願いします」

虚

「案内お願いします」

タスク

「みんな車に乗れよ。幸い店はアーケード街に揃ってるからな」

レオナ

「お買い物が終わったら、何処かでお昼ご飯にしましょう♪」

ユウマ

「とりあえず出発」

アーケード街……

ユウマ

「それでは、各自目的のモノを買う為に各自行動とします」

レオナ

「簪ちゃん、行きましょう」

簪

「はい」

タスク

「お嬢ちゃん、行くぞ〜」

本音

「は〜い♪」

ユウマ

「ラウラ、虚さん、行きましょう」

ラウラ

「ドイツの紅茶は久々だな」

虚

「よろしくお願いします」

ビールの醸造所・・・

レオナ

「ココはドイツビールでも一般的なラガービールとエールビールを作ってる醸造所よ」

「簪ちゃんは、ビールは初めて？」

簪

「初めてです」

レオナ

「そう・・・なら最初はヴァイツエンビールが良いかしら」

「苦みが少なくオススメよ」

簪

「少し飲んでみます」

レオナ

「初めてでコップ一杯はキツイと思うから、ショットグラスで飲むのが良いわね。試飲だから無理しないのが一番だからね」

簪

「いただきます・・・苦いです」

レオナ

「初めてのビールはそんな感じよ。慣れてくると飲めるようになるわ」

「ユウママも最初はビール飲めなかったもの」

簪

「そうなんですか？」

レオナ

「そうよ。苦くてあんまり好きじゃないって言ってたのに、今ではタスクと朝まで飲み明かす事も出来るようになったのよ」

簪

「朝まで・・・」

レオナ

「まあ、お酒はたしなむ程度に飲むのが一番よ」

簪

「そうですね・・・」

レオナ

「少しずつ色んなビール飲んでみましょう」

簪

「はい」

ドイツの駄菓子屋的なお店・・・

タスク

「ココなら、ドイツで売ってる菓子は殆んど買えるぜ」

本音

「お菓子がいっぱい♪」

タスク

「ユウマから代金は預かってるから好きなかだけ選んできな。俺はココでコーヒー飲んでるからよ」

本音

「は〜い♪」

本音は、店内を隅々まで歩き回って気になったお菓子を片っ端から持ってきた・・・

本音

「お菓子持ってきました♪」

タスク

「おいおい・・・一体何日分の菓子を持ってきたんだよ！」

本音

「ほえ？」

タスク

「買い物かご6つも買い込み過ぎだろ!! どうやって日本まで持って帰るんだよ！」

本音

「駄目ですか？」

タスク

「ユウマ、緊急事態だ・・・おそらく代金が足りん」

紅茶の専門店・・・

ユウマ

「虚さん、お代は気にせずに気になる物色々選んで良いですよ」

虚

「良いんですか？」

ユウマ

「どうぞぞ」



ラウラ

「ドイツにロシアンティーは有るだろうか」

ユウマ

「ロシアンティーは、ロシア発祥の紅茶だぞ・・・ラウラ」

ラウラ

「そうなのか？」

ユウマ

「名前からしてロシアでしょ」

ラウラ

「以前、ドイツの喫茶店でロシアンティーが有ったからてつきりドイツの紅茶だと思つてたぞ」

ユウマ

「今じゃ世界各地でいろんな国の料理が食べられるから・・・勘違いするのも仕方ないか」

「ん？父さんから連絡だ・・・ラウラ、俺は父さんの方に行つてくるからココは頼むぞ」

ラウラ

「了解した」

俺は、少し急いで父さんが居る方に向かった……

ユウマ

「父さん、何か有ったか？」

タスク

「これを見ろよ」

ユウマ

「……カゴで6個もお菓子を買い込むとは……一体何日分のお菓子だ？」

本音

「ん……2週間分くらいかな」

タスク

「これで2週間かよ……」

ユウマ

「もしかしてまだ買うつもり？」

本音

「駄目？」

ユウマ

「……分かったから、そんな小動物みたいなウルウルした目で見ないでくれ……」

「仕方ない、国際便でI S学園まで配送してもらおう・・・輸送費はバカ高いぞ・・・きつと」

本音

「ヤツタ〜♪」

タスク

「許可して良いのか？多分カゴ10個分くらい買い込んでくるぞ？」

ユウマ

「この際注意しても無駄だよ。なら気の済むまで買い込んで送ってもらう方が楽でいい」

タスク

「そんなもんかね」

1時間後・・・

本音

「沢山買ってきました♪」

ユウマ

「カゴ10個分・・・賞味期限とか大丈夫か？」

「ドイツから日本まで空路でかなり日数掛かるぞ？その間に賞味期限切れたりしないの

？」

本音

「その辺は大丈夫なのだ♪日持ちするお菓子は空路で運んでもらって、賞味期限の短いお菓子は自分で持って帰るから♪」

ユウマ

「なら良いけど」

俺は、買い込んだ菓子を配送所で段ボールに詰め込んで、国際便の手続きを済ませた

ユウマ

「俺はラウラたちの方に戻るから。んじゃ」

俺がラウラと虚さんの方に戻ると・・・チンピラ達がラウラと虚さんを囲んでいた・・・

チンピラA

「なあ、良いだろ？一緒にお茶するくらい」

ラウラ

「申し訳ないが、お前達のような下品な男は趣味じゃない」

虚

「アナタ達のように香水の匂いがキツイ人は嫌いなので」

チンピラB

「つれない事言うなよ。俺達と遊ぼうぜ」

ラウラ

「私がキレないうちに失せろ」

チンピラC

「ガキの癖に偉そうにするんじゃないぞ!!」

ユウマ

「はい、そこまで」

「ラウラ、虚さん無事か？」

ラウラ

「問題ない。手も出してないぞ」

虚

「大丈夫ですよ」

ユウマ

「俺の連れに何か用か？要件があれば俺が代わりに聞くが？」

チンピラA

「チッ！男が居たのかよ・・・」

ユウマ

「女性を誘うなら、その汚らしい格好は止めとけよ・・・不潔だし、みつともない」

チンピラB

「お前達、行くぞ」

チンピラC

「覚えてろよ！」

ユウマ

「覚える訳ないだろ、くだらない」

ラウラ

「兄さん、父さんの方はもう良いのか？」

ユウマ

「今さつき片付けた・・・」

虚

「本音が何かしましたか？」

ユウマ

「お菓子を滅茶苦茶大量に買い込んで、国際便で運ぶことになっただけだ」

虚

「あの子は・・・ご迷惑をお掛けしてすみません」

ユウマ

「過ぎた事だしてもう良いさ」

「お目当てのモノは買えましたか？」

虚

「しっかりと買いました」

ユウマ

「なら、戻りましょう」

ビールの醸造所・・・

簪

「ヒック・・・飲み過ぎちゃった♪」

レオナ

「あら・・・如何でしょうかこの状況は・・・」

タスク

「何だこの状況は」

レオナ

「タスク！ 簪ちゃんがシヨットグラスを離してくれないのよ！」

タスク

「飲み過ぎか？ 高校生に、こんなになるまで飲ませるなよ」

「よつと・・・本日は閉店ですつてな」

簪

「あゝ、もう一杯」

タスク

「駄目です」

レオナ

「助かったわ・・・簪ちゃんったら、一度飲み始めたら止まらないんだもの」

タスク

「酒豪の素質が有るのか？」

レオナ

「酔ってたし、その可能性は無いと思うわ」

本音



「かんちやくん、大丈夫？」

簪

「・・・ダメ」

本音

「あらら〜」

ユウマ

「こっちの買い物は終わったよ」

虚

「お嬢様は・・・寝ていらっしやいますね」

レオナ

「ビール飲んで酔っ払っちゃって寝ちゃったのよ」

タスク

「どうやって運ぶか・・・」

ユウマ

「起きるまで待つてるか・・・」

本音

「車まで運んであげようよ〜」

ユウマ

「仕方ないか・・・よっと」

俺は、簪ちゃんをお姫様抱っこして抱えて車まで運んだ・・・

ユウマ

「これで良しつと」

タスク

「昼飯は如何するんだ？」

レオナ

「簪ちゃんが寝てるから、何処かで食べて帰るのは無理そうね」

ユウマ

「・・・適当に材料買って、家で何か作れば良いんじゃない？」

「夕方はクーちゃん達とレストランに行くんだし」

タスク

「それもそうだな。誰が作るんだ？」

ユウマ

「俺が作るよ。時短料理になるけど」

レオナ

「ならお願いね」

ユウマ

「了解。ラウラ、買い物手伝つてくれ」

ラウラ

「了解した」

俺とラウラは、お昼の材料を幾つか買って戻った・・・

ユウマ

「戻ったよ。お昼はパスタにします」

ラウラ

「デザートにみかんを買ってきたぞ」

レオナ

「なら、家に帰りましょうか」

タスク

「総員車に乗れろ!!」

みんな

「ラジャー！」

移動中……

ユウマ

「そういえば、クロエ達は何処の学校行ってるの？」

レオナ

「普通のインターナショナルスクールよ？」

タスク

「事前に国の検査が入って、問題ない事が証明されてる学校だぞ？」

ユウマ

「……なんだか嫌な予感がするんだよな……」

ラウラ

「それなどんな嫌な感じなんだ？」

ユウマ

「悪意の塊が襲ってくる感じだな……」

レオナ

「タスク、急いでクロエ達の学校に向かって！」

タスク

「はいよー！」

クロエ達に通つてる学校・・・

ステラ

「今日は、お兄ちゃん達とみんなでレストラン・・・楽しみだね」

アウル

「兄ちゃん達と外食なんていつ以来だろうな？」

ステイング

「半年は軽くいつてないんじゃないか？」

クロエ

「家族みんな揃つてお夕食・・・楽しみです」

クロエ達が、課外活動を終えて学校に戻つて来て活動内容をみんなで纏めている時・・・怪しい影が学校に近づいて来ていた・・・

クロエ

「何だか嫌な感じがしますね・・・」

ステラ

「ステラも・・・凄く重い感じがする」

アウル

「この感じ・・・あの研究所に居た奴らと同じ感じがするぜ・・・」

ステイング

「間違いない・・・アイツ等と同じ奴らだ」

オータム

「何でアタシらがガキを攫う仕事をしないとイケねえんだよ！」

スコール

「仕方ないでしょ？仕事なんだし」

M

「こんな仕事断ればいいのに・・・」

オータム

「アギラのクソババアがさつきと死んでくれりやあ良いんだがよ」  
 スコール

「中々しぶとくて死なないのよね」

M

「私達で始末すれば良いじゃん」

オータム

「それが出来れば苦勞はしねえんだよ!!あのババア、殺しても死なねえんだよ!」

スコール

「人間やめてるわよね」

M

「どうすれば始末できるんだろう・・・」

桜花

「無駄話はそのままでにしなさい。何処で盗聴されているか分からないんだから」

オータム

「んな事言われたって、こんな胸糞悪い仕事ばかり回してきやがるクソババアの悪口  
 言ったって誰も文句言わねえだろ!」

フレイ

「ちよつとアンタ達!!何してるのよ!!さっさとガキを攫つてきなさいよ!!」

オータム

「あのクソ女・・・アギラのお気に入るか知らねえが調子に乗りやがって・・・」

桜花

「落ち着きなさい。あのクソ女は多分この作戦で死ぬわ・・・私が殺すもの」

スコール

「どうして桜花が手を下すわけ？」

桜花

「あのクソ女は、アラドやゼオラやラトウーニに暴言吐いたのよ・・・ただ本を読んでいただけなのに」

M

「常に痲癩起こしてるらしいね」

オータム

「調整の弊害かなんか知らねえが、ファントムタスク嘗めんなよクソ野郎・・・」

スコール

「念の為に、マガジンの弾を徹甲榴弾に変えておきましょう」

M



「私の方は、劣化ウラン弾詰めとくね」

桜花

「私は、500口径のニトロエキスプレス弾を満載で搭載しておくわ」

オータム

「俺は・・・面倒だし徹甲弾つめておくか・・・」

フレイ

「どいつもこいつも使えないわね!!」

「もう良いわ!!私だけでやるわよ!!」

オータム

「あのクソ女行っちゃったぞ」

桜花

「あのクソ女が暴挙に出ない様に私達も行きましょう」

みんな

「ああ」

学校・・・

クロエ

「学校が終わったので帰りましょう」

ステラ

「お出掛け♪お出掛け♪」

アウル

「ご飯♪ご飯♪」

ステイング

「バイク♪バイク♪」

クロエ達が、帰ろうとした時・・・赤いISが降りてきた

フレイ

「丁度良い所にガキが居るじゃない・・・コイツ等誘拐してこの仕事をさっさと終わらせるわ」

クロエ

「みんな、逃げますよ！」

フレイ

「逃がす訳ないでしょ!!」

クロエ

「キヤア!!」

フレイ

「この私の手を煩わせるんじゃないわよ!!」

クロエ

「お兄ちゃん・・・助けて・・・」

ユウマ

「俺の可愛い妹に何してやがんだ!!!」

「R—1来い!!!」

ラウラ

「姉さんに危害を加える俗物が!!!」

「リガズイ・カスタム!!チカラを貸してくれ!!」

フレイ

「何で男がIS纏ってんのよ!!」

ユウマ

「うるせえ!!!怒りの鉄拳を喰らいやがれ!!」

「念動鉄拳! T—I N K ナツコオ!!!」

ラウラ

「跡形もなく吹き飛べ!!メガビームキャノン発射!!」

フレイ

「キャアアアア!!」

ユウマ

「今回ばかりは頭に来た!!絶対に生きて帰れると思うなよクソ野郎!!」

「破を念じて刃となれ!!天上天下念動破碎剣!!」

ラウラ

「ISの中で圧死しろ!!!ウェイブライダー突撃!!」

フレイ

「カハツ!!!」

ユウマ

「まだまだ行くぞ!!!チェンジ!Rーウィング!」

「全てを切り裂く刃になれ!!TーLINKクラッシュソード!!ぶち抜け!!」

ラウラ

「全エネルギー開放!!切り裂け、ハイパービームサーベル!!」

俺とラウラの攻撃を受けてクソ野郎は、ISが解除されてポロキレのようになってい

た・・・

ユウマ

「クロエ、大丈夫か？怪我してないか？」

ラウラ

「皆も怪我は無いか？」

クロエ

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃん!!」

ユウマ

「怖かったよな・・・もう大丈夫だぞ」

ステラ

「怖かった・・・」

アウル

「もう大丈夫だよね？」

ステイング

「コイツ何者なんだ？」

ラウラ

「レーダーに反応？兄さん、新手が来るぞ！」

タスク

「そっちは俺に任せな!!纏めて吹き飛ばすぜ!!」

「ジガンスクード、展開!!」

「喰らいやがれ!!ギガワイドブラスター!!!」

桜花

「ロックオンアラート!!」

オータム

「前方から巨大なビームが来るぞ!!」

スコール

「この質量!!ISの兵器じゃないわよ!!」

M

「防げない!!」

4人

「キヤアアアアア!!!」

タスク

「撃墜完了!!」

ユウマ

「ラウラ、父さんが撃墜した奴等拾って来てくれるか？」

ラウラ

「了解した」

俺が、クロエ達を慰めていると・・・ラウラが4人拾って帰ってきた

ラウラ

「拾ってきたぞ」

ユウマ

「ご苦労さん。さて、コソコソと逃げようとしてるクソ女・・・テメエだけは許さねえぞ」

フレイ

「男が気安く触るんじゃないわよ!!」

ユウマ

「あつそ。ラウラ、思いつきりこのクソ女と遊んであげなさい」

ラウラ

「良いのか？なら徹底的に遊ぶとするか・・・覚悟は良いか？」

それからラウラは、クソ女に様々な関節技やプロレス技を掛けて一方的に蹂躪してい

た・・・

桜花

「イタタ・・・」

オータム

「さっきのビームは効いたぜ・・・」

スコール

「ISは壊れて修復不可能・・・参ったわね」

M

「もう投降して、ファントムタスクも抜けようかな」

オータム

「そうするか・・・」

スコール

「テロ組織の小間使いなんて疲れちゃったわよ」

桜花

「その前に、クソババアの研究所は破壊しないといけないわ」

「ポチッと」



桜花が手元のボタンを押すと・・・離れた場所にある研究所が大爆発を起こした・・・  
アギラ・セトメ

「ギャアアア!!!」

桜花

「これでクソババアは死んだわ」

オータム

「あのババアがそう簡単にくたばるか？」

スコール

「何か報復が有りそうなんだけど？」

M

「少し気をつけておいた方が良さそう」

その頃、研究所では・・・

アギラ

「アウルムワンの仕業か・・・報復じゃ!!」

「裏切り者を始末するのだ!!」

研究所から、黒いＩＳが沢山出撃した・・・アギラもＩＳを纏って出撃した

ユウマ

「ラウラ、もうそれ位で良いぞ」

ラウラ

「まだダメだ。この腐った性根を叩き直してやらんと気が済まん」

ユウマ

「殺すなよ」

ラウラ

「その辺は心得ている。拷問の一手手前レベルで痛めつけているからな」

ユウマ

「頑張れよ、クソ女」

フレイ

「嫌よ!!早く助けなさいよ!!」

ユウマ

「誰がテメエの希望なんか聞くか馬鹿」

ラウラ

「キン肉バスター!!」

ベキベキボキ!!

フレイ

「ギャアア!!」

ラウラ

「パロスペシャル!!」

ゴキンツ!!

フレイ

「カハツ!!」

ラウラ

「まだ気絶するのには早いぞ・・・これでフィニッシュだ」

「地獄の九所封じ・・・大雪山下ろし!」

フレイ

「カハツ!!」

ラウラ

「粗方気は済んだ・・・手錠で拘束して辱めておこう」

ラウラは、両手を手錠で拘束した後・・・恥ずかしいポーズで放置しておいた・・・

ユウマ

「それで、お前さん達の目的は何だ？返答次第ではダダじゃ済まさねえぞ」

桜花

「私達は、あのクソ女に命じられて連れてこられたのよ」

オータム

「オマケにアギラのクソババアに、ガキを攫って来いって命令されたんだよ」

スコール

「あのフレイって調整人間なのよ。自意識過剰でうるさくて嫌気が差してたの」

M

「今さつき、アギラの研究所は爆破したからもう大丈夫な筈」

ユウマ

「アギラ・セトメか・・・悪徳科学者って事は知ってるが」

桜花

「悪徳レベルじゃすまないわよ。存在そのものが悪なのよ」

ユウマ

「また面倒事が起きそうだな・・・」

その時、俺の頭にキュピーンつと来た

ユウマ

「東の方角から何か来てるな・・・それも大群で」

桜花

「東・・・まさか!?!」

アギラ

「アウルムワン!! 貴様、ワシを手に掛けようとするとは気が狂ったか!?!」

桜花

「私は、アウルムワンなどではない!! 私は、桜花ナギサだ!」

ユウマ

「アイツ等って撃滅しても良いの?」

オータム

「出来るんならやってくれよ」

ユウマ

「了解・・・合体シーケンス開始。合体コードはヴァリアブルフォーメーション」

俺が、合体コードを口にする・・・俺の腰に付けてる指輪が勝手にISに変わって自動操縦で動き出した・・・

ユウマ

「俺も行きますか・・・R―1展開」

「ヴァリアブルフォーメーション!!」

R―3

「念動フィールド、オン！」

R―2

「トロニウムエンジン、フルドライブ！」

R―1

「各機、変形開始！」

念動フィールドの中で、合体が行われていく・・・合体後の操縦は、俺が行うがコア人格のリユウセイ・ライ・アヤがサポートに入ってくれるので俺への負担は意外と少ないのが特徴だ

ユウマ

「天下無敵のスーパーロボット、ココに見参!!」

アギラ

「なんじゃそのISは!!」

「そのISを奪って解析すれば、新たな調整体に使わせる事が出来るかもしれん・・・そのISを寄越すんじゃ!!」

ユウマ

「うるせえ!!クソババアが出しやばつてくるんじゃねえよ!!」

「テレキネシスミサイル!ハイフィンガーランチャー!ガウンジエノサイダー!一斉発射だ!」

SRXの一斉攻撃は、アギラが連れて来たIS部隊を一瞬で撃滅させた・・・

アギラ

「一撃でワシの軍団が・・・やはりそのISは手に入れるぞ!!」

ユウマ

「テメエの野望はココまでだ!!」

ライ

「トロニウムエンジンオーバードライブ!」

アヤ

「念動フィールド収束!!」

リュウセイ

「Z・Oソード射出!!ユウマ、コイツを使い!!」

ユウマ

「おう!天上天下念動爆砕剣!!」

リュウセイ

「念動結界、ドミニオンボール!」

ユウマ

「くたばれ悪党が!!念動爆砕!!」

アギラ

「馬鹿な!!」

「このワシが死んでは、世界の損失じゃ!!生き延びて新しく調整体を作り出さねば!」

ラウラ

「お前の計画はココで永遠に潰える・・・私達を作り出すキツカケの研究を貴様が始めたお陰で私と姉さん達の人生は狂った・・・」

「もう私達のような悲しむ子供を生み出さない為にもお前はココで倒す!!」

ユウマ

「念動フィールド、発動!」



「ラウラ！行け!!」

ラウラ

「お前だけは許さない!!そのISと共に永遠に消えろ!!」

リガスィ・カスタムは、ウェイブライダー形態で突撃した・・・

アギラ

「ギャアアア!!!」

ラウラ

「その魂ごと地獄に落ちろ!!」

アギラ

「こんな所でワシがく!!!!」

ユウマ

「お前は罪を犯し過ぎたんだ・・・地獄で後悔し続ける」

「ガウンジェノサイダー!!」

アギラは、ガウンジェノサイダーに飲み込まれて・・・跡形もなく消え去った

ラウラ

「・・・諸悪の権化を倒しても、心は晴れたりはないな」

ユウマ

「敵討ちも復讐も虚しくなるだけだからな・・・辛くないか？」

ラウラ

「ああ・・・これで子供達の未来が明るくなったからな。辛くはないよ」

ユウマ

「そうか・・・戻るか」

ラウラ

「ああ」

桜花

「何よ・・・あの火力と性能のＩＳは」

オータム

「冗談だろ・・・あのクソババアを瞬殺しやがった」

スコール

「凄いわね・・・ドイツのＩＳ開発は進んでいるのね」

M

「このＩＳ、あのクソババアが作った奴だから要らない。このコア使って新しいＩＳ作

る」

「私、ドイツに亡命する」

桜花

「私もそうしようかしら」

オータム

「俺もフアントムタスクと縁切って、亡命するわ」

スコール

「それが良いわね。どうせ碌な仕事周ってこなさそうだし」

ユウマ

「さて、このカスを刑務所にぶち込んで貴重な家族時間を満喫しますか」

ラウラ

「このボロキレはどれ位の刑期になるんだろうか」

ユウマ

「知らねえ。後は裁判所に任せる！」

タスク

「アイツ等は如何するんだ？」

ユウマ

「警察に任せてる。その後は知らない」

タスク

「まあ、それで良いか」

「車に乗れよう」

ユウマ

「はいよ」

ラウラ

「了解した」

桜花

「少し待っててくれない？」

ユウマ

「何か？」

桜花

「私達、ドイツに亡命したいんだけど」

ユウマ

「最初に、ドイツの外務省に行ってください」

「その後は、そちらの指示に従ってください」

「俺から言えるのはそれだけです。それじゃあ」

桜花

「そうさせてもらうわ。もしドイツに亡命出来たら孤児院の子供達も連れてくることは可能？」

ユウマ

「国籍を取得できれば問題ないと思いますよ」

「外務省の方に話は通しておくんで、この名刺を受付に出してください」

桜花

「ありがとう」

ユウマ

「ついでに迎えも頼んでおきます。もしも、外務省の移民課の一番偉い人出してください」

「……はい、そうです。ドイツに亡命を希望している人が4人居ます」

「それと孤児院に居る子供達を何人か連れてきたいそうです」

「はい……孤児院の子供達は何人ですか？」

桜花

「3人よ」

ユウマ

「子供は3人だそうです。それで迎えを寄越してください」

「場所は、今GPSで送りましたんで」

「それと監禁や拘束はしないようにお願いします。結構協力的な態度なので」

「ついに取り調べに關しては客人扱いで丁重にお願いします。結構重要な情報持つてるかもしれないんで」

「はい・・・そういう感じをお願いします」

「とりあえず話は付けておいたから、ココで少し待つていれば迎えが来る筈だ」

桜花

「色々ありがとう。アナタの名前を聞いても良いかしら？」

ユウマ

「朝霧ユウマ・・・特殊部隊の隊長さんだ」

桜花

「特殊部隊の隊長・・・」

ユウマ

「何かあればココに連絡しな。出来るだけチカラはなつてやるから」  
「それじゃあな。しつかり休めよ」

桜花

「朝霧ユウマ・・・彼が良い人で良かったわ」

## 帰国

馬鹿なババアをブツ倒した後は、家でクロエ達のケアをすることにした・・・  
ケアと言っても、ただ一緒に遊んだりしてただけだけど

レオナ

「今日は、何処かに食べに行こうかと思ったけど、あんな事が有ったからデリバリーを頼みましょう」

「みんなは何が食べたい？」

クロエ

「ポテト料理が食べたいです」

ステラ

「お肉が食べたい」

アウル

「僕は、フィッシュ&チップスが良いかな」



ステイング

「ピザ一択だろ」

本音

「パフエが食べたいです！」

簪

「ソーセージが食べたいです」

虚

「プレッツェルが良いです」

ラウラ

「ラーメンが食べたい」

ユウマ

「ラウラ、ラーメンなら日本に帰った後好きだけ奢ってあげるから我慢しなさい」

ラウラ

「なら、ステーキにしよう」

タスク

「見事にバラバラだな」

レオナ

「困ったわね・・・手分けしてテイクアウトのお店で買ってこようかしら」

ユウマ

「俺が行ってくるよ。丁度俺の知ってる店で全部頼める筈だから」

ラウラ

「兄さん1人だと大荷物だろう。私も付いて行こう」

ユウマ

「そう？なら付き添いよろしく」

タスク

「車使うか？」

ユウマ

「借りてくわ。ラウラ、行くぞ〜」

ラウラ

「了解した」

俺とラウラはおつかいに向かった・・・

レオナ

「ユウマの知り合いの店って何処かしら？」

タスク

「さあな。ユウマの行きつけの店は不思議と場所が分かんねえんだよな」

ユウマの秘密の行きつけのお店・・・

ユウマ

「マスター、テイクアウトの注文やってるか？」

???

「ユウマ君、随分と久しぶりじゃないか♪」

???

「こりや珍しいお客が来たもんだね」

ユウマ

「ホウメイさん、アキトさんお久しぶりです。急で申し訳ないんですけど、この紙に書いてある料理を全部テイクアウトで出来ます？」

ホウメイ

「また大量に書いてあるねえ」

アキト

「パーティーでもするのかい？」

ユウマ

「ホームパーティーですかね」

ラウラ

「ココが兄さんの行きつけのお店か・・・異国感がある佇まいだな」

ホウメイ

「妹がいたのかい？」

アキト

「随分と雰囲気が違うね」

ユウマ

「血の繋がってない義妹だからな。でも家族の絆はホンモノだけ」

ホウメイ

「そんなの一目見りや分るさ。ちっと待ってな、全部テイクアウトで作ってあげるから」

アキト

「待ってる間、お茶でも飲んでてよ。最近お菓子も作り始めたんだ」

ユウマ

「お言葉に甘えてゴチになります」

ラウラ

「頂こう」

俺とラウラがお茶を飲みながらぼんやり待っていると・・・

ラウラ

「ラーメンがあるではないか!!店主、半ラーメンを1つ頼む!」

ユウマ

「ラーメンなんていつメニューに追加したんですか?」

ホウメイ

「つい先日だよ」

アキト

「ようやく納得できるラーメンが出来たから、メニューに追加したんだ」

ユウマ

「俺もラーメン1つ。サイズは俺も半ラーメンでお願い」

アキト

「味は何味にする?醤油・塩・味噌味が選べるよ」

ユウマ&ラウラ

「醤油一択!!」

アキト

「了解♪ちよつと待つててね」

10分程待つていと・・・

アキト

「お待たせ♪半ラーメン2つね」

ユウマ

「おお!!これぞラーメンだ!」

ラウラ

「匂いも香しい・・・いただきます」

ズルズル・・・

ラウラ

「美味しい!!」

ユウマ

「今まで食べたラーメンの中で一番美味しいぞ!!」

アキト

「良かったよ」

ホウメイ

「お待ちどうさん。ご注文の料理だこれで全部だよ」

ユウマ

「急に来て悪かったな。これ代金ね」

ホウメイ

「多すぎやしないかい？」

ユウマ

「良いの良いの。俺からの気持ちって事で」

ラウラ

「これは私からの気持ちだ。受け取ってくれ」

アキト

「日本の醤油？」

ラウラ

「母さんへのお土産に買ってきたが、ISの拡張領域に仕舞っていて忘れていたんだ」

「最高級品の国産醤油だぞ。このまま腐らせるより使ってもらった方が良いと思ってな」

アキト

「そういうことならありがたく貰うよ」

ラウラ

「数も大量にあるんだ」

ホウメイ

「こんなに沢山・・・」

ユウマ

「ラウラ・・・買い込み過ぎだろ」

ラウラ

「仕方ないではないか。買う時に数を間違えたんだ」

ユウマ

「なら俺からも最高級のきび砂糖を置いて行くから使ってくれ」

ホウメイ

「きび砂糖なんて珍しい砂糖を持つてるんだね」

ユウマ

「たまたま仕入れたんだ。それじゃあまた来るよ」

ホウメイ

「今度は、家族みんなで来なよ。満漢全席でも用意してやるからさ」



アキト

「結婚するのなら、ウチで祝宴とかやってあげるからね♪」

ユウマ

「まだ結婚はしないよ。相手は居るけどさ」

ホウメイ

「おやおやく♪ユウマったら隅に置けないね♪」

ラウラ

「結婚か・・・私は誰と結婚するのだろうか・・・」

ユウマ

「それは分かりませんなあ」

ホウメイ

「男は世界に沢山居るけど、いい男つてのはそうそう居ないからねえ。お嬢ちゃんも良い男を見つけてみな」

ラウラ

「良い男・・・兄さんのような人を探せばいいのだな」

ホウメイ

「あながち間違っちゃいないけど・・・まあ、こればかりは人を見る目を育てないとね」

ラウラ

「了解した」

ユウマ

「ラーメンご馳走様。また来られたら来るね」

ラウラ

「ご馳走様でした」

ホウメイ

「気をつけて帰るんだよ」

アキト

「今度は、ユリカにも顔を見せてあげてね」

ユウマ

「了解であります」

帰りの車内・・・

ラウラ

「まさかドイツであんなに美味しいラーメンを食べられるとは思わなかったぞ」

ユウマ

「そういえば、アキトさんって日本でラーメン屋になりたかったって言ってたな」

ラウラ

「では、ドイツでラーメン屋の夢を叶えたんだな」

ユウマ

「ラーメン屋と言うより、何でも揃ってるレストランだな。近所に有ったら毎日通うレベルの」

ラウラ

「今度、日本でも探してみよう」

ユウマ

「俺はもう見つけてあるぞ」

ラウラ

「一体何処の店なのだ!! 教えてくれ兄さん!!」

ユウマ

「一夏の地元の五反田食堂って店だ。今度連れて行ってやるよ」

ラウラ

「約束だぞ!!」

ユウマ

「はいはい」

家・・・

ユウマ

「お待たせ〜。食べたい奴取って食べてくれよ〜」

みんな

「いただきます!」

その日の夕食は、いつもより賑やかで楽しかった・・・

次の日・・・俺達は日本に戻る日だ

ユウマ

「それじゃあ帰るわ。クロエ達は良い子にしてるんだぞ？」

クロエ

「分かりました。夏休みにはまた帰って来てくださいね」

ユウマ

「約束するよ」

ラウラ

「兄さん、お土産はこれだけあれば足りるだろうか？」

ユウマ

「買い過ぎだろ・・・まあ、量子変換して持って行けば良いか」

本音

「ゆくゆく、お菓子が量子変換できないよ」

ユウマ

「本音ちゃん、どんだけお菓子買い込んだの?!」

簪

「残りはお私の方に入れます。本音は今後お菓子の買い物禁止ね」

本音

「かんちゃん酷いよ?!」

虚

「ご迷惑をお掛けしてすみません」

ユウマ

「本音ちゃんのお菓子好きは今に始まった事じゃないから仕方ないか。今後はちゃんと量を考えて買おうね」

本音

「は〜い」

ユウマ

「それじゃあ各機変形して日本に帰るよ」

オータム

「日本に行くなら俺達も連れて行けよ」

スコール

「どうも〜♪私達も日本に行くことになったからよろしく〜♪」

M

「I S 学園で警備の仕事をする事になったから」

ユウマ

「・・・何で？」

レオナ

「お母さん、この子達リクルートしちゃった♪ I S 扱えるし、破格の条件提示したら即決貰っちゃった♪」

ユウマ

「別に行くのは構わないけど、I S は有るのか？」

オータム

「自分の専用機持つてるぜ」

スコール

「この前ボロボロになっちゃったけど修理したのよ」

M

「I S 学園で新しく I S を作り直す」

ユウマ

「細かい事は良いか。マツハで飛んでいくからはぐれるなよ」  
俺達は、無事に I S 学園に戻って来た・・・

## デート

ドイツから帰ってきた次の日・・・

ユウマ

「マドカ、着いておいで。ちゅちゃん和一夏に会わせてあげるよ」

マドカ

「千冬姉さんと一夏兄さんに会える・・・」

職員室

ユウマ

「頼もう〜!!」

千冬

「普通に入ってこれんのか、お前は」

ユウマ

「俺にそんな事言つて良いのかな〜？折角生き別れの妹を連れてきてあげたのに〜」



千冬

「生き別れ・・・まさか!!」

マドカ

「久しぶり・・・千冬姉さん・・・」

千冬

「マドカ!!」

「今まで何処に居たんだ!!」

ユウマ

「亡国企業って言うテロ組織に居たんだってさ。ドイツで保護して連れて来た」

一夏

「千冬姉、来週買い物に行きたいから外出届にサインしてもらいたいんだけど・・・」

「マドカ!!」

マドカ

「一夏兄さん・・・」

ユウマ

「学園長には、俺の方から報告しておくから家族で話でもしてな」

「明日まで学園は休みなんだし、どっか出掛けてきなよ」

千冬

「ユウマ、ありがとう」

ユウマ

「お気になさらず」

学園長室

ユウマ

「そういう訳で、ドイツから警備員として3人連れてきました」

十蔵

「なるほど・・・最近、割とテロ組織も活発になってきましたから警備してくれる人が居てくれるのは助かります」

ユウマ

「それと、織斑マドカに関しては何処かのクラスに編入扱いにしてもらえると助かります」

十蔵

「分かりました。来週辺りから編入出来るように手続きを進めておきますね」

ユウマ

「お願いします。では失礼します」

ユウマ

「さて、今日は特にやる事無いし何しようかな」

東

「ゆ〜くん!!おかえり〜!!」

ユウマ

「東さん、ただいまです」

東

「東さんを置いてドイツに行つてたんだし、お詫びに今すぐデートに行こうよ!!」

ユウマ

「今日は休みだし、良いですよ」

東

「本当?!なら今すぐに行こうよ!」

ユウマ

「何処に行きます?」

東

「う〜ん・・・普通にお出掛けだね♪」

ユウマ

「何買います?」

東

「東さんのお洋服と、ご飯作る為の材料と、ゆ〜くんとお揃いのアクセサリーかな♪」

ユウマ

「分かりました。車取ってきますね」

東

「ゆ〜くん、車持ってたの?」

ユウマ

「俺は、ドイツで特別待遇で国際免許取れたんで持ってますよ。玄関で待っててください

い」

東

「は〜い」

数分待っていると・・・

ユウマ

「お待たせしました」

東

「カッコいい!!これってスポーツカーなの?」

ユウマ

「そうですよ。ポルシェ・911カレラって言う車ですよ」

東

「ポルシェって高級車じゃないの?」

ユウマ

「高級車ですよ。でも、俺ってあんまりお金使わないんでキャッシュで買いました。

さあ、行きましょう」

東

「は〜い♪ゆ〜くんの車でドライブだぁ♪」

IS学園近くの複合施設・・・レゾナンス

ユウマ

「到着です」

東

「流石ポルシェだね♪快適すぎてビックリだよ♪」

ユウマ

「俺は、車停めてきますね。少し待っててください」

東

「はい」

俺は、指定された場所に車を停めた後、東さんの元に歩いて行く……

ユウマ

「お待たせしました。行きましようか」

東

「うん♪」

最近人気の洋服店

東

「ゆくん、東さんにはどんな服が良いと思う？」

ユウマ

「うん……東さんはいつもアリスドレスを着てるイメージが有るから……ワンピースとかはどうですか？」

東

「ワンピースは着た事無いから新鮮な感じだから買おうかな♪ゆ〜くん好みに東さんをプロデュースしてよ♪」

ユウマ

「分かりました。えっと・・・東さんに似合いそうな服は・・・」

それから一時間程かけて、東さんをオシャレさんにしていった・・・

東

「奮発してこんなにお洋服買っちゃったよ♪」

ユウマ

「たまには良いじゃないですか。これからデートに行く時は今回買った服着てくださいね」

東

「勿論だよ♪」

ユウマ

「そろそろお昼になりますね。何処かで何か食べましようか」

東

「そうしようよ♪」

「ん？執事とメイド喫茶が有るよ♪ここに入ってみようよ♪」

ユウマ

「執事喫茶とメイド喫茶が・・・前世の時は碌な思い出が無いな・・・」

束

「前世は前世だよ。ゆくくんは今を生きてるんだから楽しまないと♪」

ユウマ

「そうですね」

束

「それじゃあ、メイドさんと執事さんに会いに行こう♪」

女性オーナー

「如何しましょう・・・今日に限って、シフトのメンバーが全員風邪でダウンするなんて・・・」

「今日は、大事な取材が来るのに・・・」

カランコロンカラン♪

女性オーナー



「いけない！すみません、今日はお店やってないんです・・・」  
東

「え〜!!折角ご飯食べようと思ったのに」

ユウマ

「仕方ありませんよ。また来ましょう」

俺と東さんは、お店を出ようとする・・・

女性オーナー

「ちよつと待って!!イケメンと美女・・・すみません、今日お時間有りませんか?」

ユウマ

「まあ、夕方までなら大丈夫ですけど・・・」

女性オーナー

「お願いが有ります!今日は、当店に大事な取材が来るんです!」

「でも、従業員のみんなが風邪で休んでしまって困っているんです」

「取材の時だけで良いので、執事とメイドになっていただけませんか!」

東

「面白そう♪やってみようよ、ゆ〜くん!」

ユウマ

「たまには息抜きも良いかな・・・分かりました。取材の間だけですけどやりましょう」  
女性オーナー

「ありがとうございます！では、更衣室までご案内します」

更衣室・・・

オーナー

「サイズは全て揃っていますから、丁度良いサイズの衣装を着てみてください。細かい所は私が調整しますから」

ユウマ

「分かりました」

束

「メイド服って一回着てみたかったんだ♪」

「ゆ〜くん、後で一緒に写真撮ろうよ♪」

ユウマ

「良いですよ。俺スマホの待ち受けにしたいんで」

着替え中・・・

ユウマ

「一応着てみました」

東

「東さんも着てみたよ♪」

オーナー

「少しゆったりしていますね・・・メイド服はゆったりしていても良いんですが、執事服はワンサイズ小さいのを着て貰えますか？」

ユウマ

「分かりました」

数分後・・・

「これで良いですか？」

オーナー

「完璧です！後は、簡単な仕草のレクチャーをします。難しい事は有りませんが、難しい事は有りませんからスグに覚えられると思いますよ」

「まず挨拶は、メイドはお帰りなさいませ、ご主人様です。この時は真剣に挨拶しましょう」

東

「おかえりなさいませ、ご主人様」

オーナー

「とても上手ですよ。次に、執事はお帰りなさいませ、お嬢様が基本になります」

ユウマ

「おかえりなさいませ、お嬢様」

オーナー

「完璧です。今日の取材は店内の映像と実際にメイドさんと執事さんが仕事をしている風景を撮る事になっています」

「お客様は数人だけご来店されますが、注文はドリンクメニューのみの注文になっています」

「この伝票にコーヒーの銘柄と紅茶の種類とソフトドリンクを書いてくださいね。注文を受けたら私の所まで持って来ててください」

「ココまでで分からない所は有りますか？」

ユウマ

「大丈夫です」

東

「東さんも大丈夫です」

オーナー

「取材は1時間程で終わる予定なので、終わった後は何かご飯をご馳走させてもらおうわ」  
「では、少しの間よろしくお願ひします」

ユウマ&東

「畏まりました、オーナー」

それから数十分後・・・

カランコロンカラン♪

ユウマ

「おかえりなさいませ、お嬢様」

東

「おかえりなさいませ、ご主人様」

お客さん

「ウソ・・・超イケメン」

「メイドさんも凄い美人さんだ・・・」

ユウマ

「コチラのお席にどうぞ。只今メニューをお持ちいたします」

東

「コチラおしぼりになります」

ユウマ

「コチラがメニューになります。本日はドリンクメニューのみの提供になっておりますのでご了承ください」

お客さん

「はい……」

「格好も仕草も、今まで行った事有る執事喫茶とメイド喫茶の比じゃないよ……今日御呼ばれして貰えて良かった……」

ユウマ

「ご注文がお決まりになりましたら、お声がけください」

東

「ごゆっくりどうぞ」

お客さん

「如何しよう……執事さんとメイドさんが素敵すぎてそれ所じゃないよ……」  
「でも、何か注文しないと……」

束

「ゆ〜くん、今度IS学園でも執事とメイドさんやってみようよ」

ユウマ

「学園祭とかなら出来るんじゃないですか？」

束

「なら、いつくと箒ちゃん達も巻き込んでおもてなし喫茶をやっちゃおうよ」

ユウマ

「なら、申請お願いしますね」

束

「は〜い」

お客さん

「執事さんとメイドさんってお付き合ってるのかな・・・物凄くお似合いのカップルって雰囲気かしてるよ」

「間違いなく恋人同士だと思うよ。だってお互いを見る時の目がキラキラしてるもん」

ユウマ

「中々注文が決まらないみたいですね・・・」

東

「うくん・・・今日だけの特別メニューを作ってみるのは如何かな？」

ユウマ

「オーナーさんに聞いてみましょう」

「オーナーさん、少し良いですか？」

オーナー

「如何かしたの？」

ユウマ

「実は、お客様が中々注文で悩んでいるようなので、今日だけの特別メニューを作ろうか  
と思ひまして・・・」

オーナー

「ちなみにどんなメニューかしら？」

ユウマ

「執事さんとメイドさんお手製のカフェオレとフレンチトーストとかですかね」

オーナー

「良いかもしれないわね。早速お客様に伝えて来て貰えるかしら」



東

「分かりました！」

ユウマ

「俺は、材料を買ってきます。東さん、少しの間よろしくお願いしますね」

東

「東さんにお任せあれ！」

俺は、近くのスーパーまで走って買い出し行った・・・道中、女性達からの視線を感じた・・・女性達はみんな頬を赤く染めていた・・・

東

「ご主人様、もし宜しければ今日限定のメニューは如何でしょう。メイドさんと執事さんお手製のカフェオレとフレンチトーストをご用意出来ますよ」

お客さん

「ぜひお願いします！」

「私も！」

「私もお願いします！」

東

「ご注文承りました。ゆ〜くん、特別セット3つお願いします」

ユウマ

「承りました、東さん」

俺は、テキパキとフレンチトーストを作っていく・・・

東さんは、カフェオレを淹れていく・・・

ユウマ

「お待たせしました。本日だけの特別メニューのフレンチトーストで御座います」

東

「コチラセットのカフェオレになります。お砂糖はご自由にお使いください」

お客さん

「あの・・・写メ撮っても良いですか？」

ユウマ

「ご自由にどうぞ」

オーナー

「2人とも流石ね。メイドと執事の素質有るわよ♪」

ユウマ

「喜んで良いのか分かりませんね」

東

「東さん的には嬉しいかな♪」

テレビ局の人達

「失礼します。本日取材にお伺いしました○○テレビ局です」

「早速打ち合わせをしていきたいのですがよろしいですか？」

オーナー

「よろしくお願ひします。ユウマ君と東ちゃんは少し休憩してて良いわよ」

ユウマ

「では、お言葉に甘えまして」

東

「休憩に入りまゝす♪」

休憩室・・・

東

「ゆ〜くん、写真撮ろうよ♪」

ユウマ

「撮りましょう。腕組んでキスでもしますか？」

東

「それだあ!!そういう訳で・・・ほっぺにチュ♪」

パシヤ!

ユウマ

「俺からも・・・大好きですよ、東さん」

俺は、東さんの唇にキスをした・・・

パシヤ!

東

「ひゃっほう♪ゆ〜くんからキスして貰っちゃった♪」

「この写真はスマホの待ち受けにしないと!」

ユウマ

「そうですね♪」

オーナー

「ユウマ君、東ちゃん、そろそろ取材をお願いしても良いかしら?」

ユウマ

「今行きます」

東

「は〜い」

リポーター

「本日は、コチラのメイド・執事喫茶に来ています♪」

「早速メイドさんと執事さんにお話を聞いてみましょう♪」

ユウマ

「おかえりなさいませ」

東

「おかえりなさいませ」

リポーター

「執事さんとメイドさんは、いつもこのお店に居るんですか？」

ユウマ

「私達は、今日限定の執事とメイドです。なのでお客様方へのご奉仕は本日だけになります」

東

「本日限定で、執事とメイドのお手製フレンチトーストとカフェオレをご用意していま

す」

リポーター

「早速フレンチトーストを頂いても良いですか？」

ユウマ

「ごゆっくりどうぞ」

リポーター

「・・・美味しいです!!甘さ控えめで、カフェオレとの相性もバッチリです!」

ユウマ

「ありがとうございます」

リポーター

「ご馳走様でした♪最後にお聞きしたいのですが、お2人は本当の執事さんとメイドさんなんですか?」

ユウマ

「俺は、普段は学生です」

東

「私は、教師をしています」

リポーター

「意外ですね。もしかしてご姉弟ですか？」

ユウマ

「姉弟ではありませんね。恋人です」

東

「お付き合ひして数か月のラブラブな恋人同士です！」

リポーター

「そうなんですか?! 教師と生徒の禁断の関係という奴なんですか?!」

ユウマ

「特段隠す必要性を感じていませんので。むしろ公表していくつもりですよ」

東

「キチンと節度を守れば、教師と生徒の恋人関係を認める風潮を作っていくつもりです

！」

リポーター

「日本の風潮を変えていくんですね。私も応援しています！」

「本日は、貴重なお時間ありがとうございます! 最後に皆さんで写真を一枚撮ってもよろしいですか?」

オーナー

「折角だし、今居るお客様も一緒に撮ってもらえるかしら？」

リポーター

「勿論です！」

カメラマン

「では、皆さん少し屈んでくださーい！」

「執事さんとメイドさんは真ん中に。オーナーさんは、メイドさんのお隣で。お客様の方は好きな場所で．．．ハイ、そのまま待機をお願いします！」

「撮りますよー!!」

カシヤ!!

カメラマン

「綺麗に撮れましたよ♪写真は、現像してお渡りするか、データでお渡し出来ますけど如何しますか？」

みんな

「両方でお願ひします！」

カメラマン

「では、後日お送りしますね」



オーナー

「ユウマ君も東ちゃんも今日はありがとう。これ今日のお給料よ」

「この後何か予定は有ったりするの？」

ユウマ

「2人でお揃いのアクセサリーを買おうと思ってたんですけど・・・」

東

「もう夕方なので、また今度にします」

オーナー

「なら丁度良いわ。私の主人が宝飾店をやっているのよ」

「主人に相談して、特別価格にしてもらえるように交渉してあげるわ♪」

ユウマ

「そんな事して貰っても良いんですか？」

オーナー

「当然よ！それだけの事をして貰ったんだから！」

「今スグにお店に行きましょう！私は、車が有るけどユウマ君達は交通の足は有るかしら？」

ユウマ

ユウマ

「俺も車が有るから、持ってきます」

俺は、駐車場からポルシェを出してくる・・・

オーナー

「え・・・学生でポルシェ乗ってるの?！」

ユウマ

「学生ですけど、毎月お給料を貰っているんで。こう見えても割とエリートなので」

東

「東さんも免許取ろうかな」

オーナー

「免許は持っておいて損は無いわよ。今は色んな車が有るし、女の子向けにデザインされた車も有るから」

「車は見ているだけでも楽しいんだから」

東

「よし!!東さんは免許を取ります!」

「ゆーくん、車選ぶとき手伝ってね」

ユウマ

「良いですよ」

オーナー

「それじゃあ行きましようか。私のミニクーパーの後に着いて来てね」

ユウマ

「了解です」

それから15分程市内を走って、駅前の商店街に着いた・・・

オーナー

「ココに車を停めてね。お店はすぐ近くなの」

駐車場から数分歩くと・・・

オーナー

「ココよ」

ユウマ

「ジュエリーショップ・オガタ。オシャレなお店ですね」

オーナー

「でしょ♪中にどうぞ」

「アナタ、お客さんよ」

店主

「いらっしやい。本日はどんな宝飾品をお探しですか？」

ユウマ

「無難にネックレスとかですかね」

東

「出来ればお揃いのネックレスが良いです！」

店主

「なるほど・・・少々お待ちください」

店主は、バックヤードに入っていった・・・暫くすると

「最近仕入れたネックレスですと・・・コチラのピンクの胡蝶蘭をデザインしたネックレスがオススメですよ」

「ピンクの胡蝶蘭の花言葉は、アナタを愛しています。という意味になります」

東

「それを下さい！」

ユウマ

「2つでお幾らになりますか？」

オーナー

「アナタ、値段は少し安くしてあげてね」

店主

「さっきのメールは見たから分かってるよ。2つでセット割で4万円でいかがでしょう」

ユウマ

「即決で買います！」

店主

「ありがとうございます。では、ケースにお入れしますね」

東

「お揃いのアクセサリー・・・指輪だったら夫婦みたいだね♪」

店主

「よろしければ指輪も幾つかご提案できますが」

ユウマ

「指輪はまたの機会に買いに来ます」

店主

「畏まりました。コチラがお品物になります」

ユウマ

「ありがとうございます」

東

「ありがとうございます♪また来ます！」

店主

「ご来店お待ちしております」

ユウマ

「さて、帰りましょうか」

東

「夕ご飯食べて帰ろう♪」

俺と東さんは、少しオシャレなカフェで夕食を済ませて学園に帰った・・・

## お買い物

ユウマと束が執事・メイド喫茶でお仕事をしてから数日が経った頃……  
I S 学園内は、少し賑やかだった……

本音

「かんちゃん、再来週の林間学校用の水着は買ったの〜?」

簪

「まだ買ってない。本音は?」

本音

「まだ買ってないよ〜」

簪

「なら、来週の土曜日に一緒に買いに行こう」

本音

「良いよ〜♪」

シャル

「それ、僕も一緒に行っても良いかな？」

セシリア

「でしたら、私もご一緒によろしいですか？」

鈴

「私も一緒に良いかしら」

ラウラ

「私も一緒に行きたいのだが」

箒

「私も水着を新しく買う必要があつてな．．．一緒に良いだろうか」

本音

「ならみんなでお買い物だね♪」

鈴

「箒は水着持つてるんじゃないの？」

箒

「その．．．サイズが小さくなつてしまつたんだ．．．最近また胸が大きくなつて．．．」

鈴

「．．．巨乳は減ればいいのに．．．」



セシリア

「箒さんもですか？実は、私も胸が大きくなってしまいました」

シヤル

「僕も最近胸が大きくなってきて困ってるんだよ・・・」

本音

「みんな成長期なんだね♪かんちゃんも最近は、おっぱい大きくなってよね♪」

簪

「・・・うん」

ラウラ

「ちなみに私も少し成長しているぞ」

鈴

「どいつもこいつも・・・巨乳自慢かチクシヨー!!!」

「巨乳は世界から滅びなさい!!貧乳こそが最強なのよ!!」

そんな感じで、箒たちはワチャワチャと楽しそうに話をしていた・・・

整備室・・・

ユウマ

「・・・最近、ISの反応速度が鈍い気がする・・・何でだ？」

「アマテラスさんにオーバーホールして貰ったんだけどなあ・・・俺が可笑しくなっちゃまったのかな？」

アマテラス

「ユウマさん、聞こえますか？」

ユウマ

「アマテラスさん、聞こえてますよ」

アマテラス

「如何やらユウマさんの反応速度にISが対応出来なくなつた可能性が有ります。一度システムを書き換えて、大幅に改修をしようと思ひます」

「なので一度お預かりしても良いですか？」

ユウマ

「分かりました。お願いします」

アマテラス

「R―シリーズの三機は、大改修してSRXアルダート・パンプレイオスに合体出来るよ

うにしますか?」

ユウマ

「その場合って、一度合体すると分離できなくなりますよね」

アマテラス

「そうですね・・・分離機構をオーミットする必要が有りますが、今回は私の神様パワーで何とかします!」

ユウマ

「おお・・・なんと説得力あるお言葉」

アマテラス

「アトラスガンダムとビルドストライクガンダムも当面の間お預かりしますね」

「当分は、Hiirガンダムを使ってくださいね」

ユウマ

「分かりました」

アマテラス

「では、改修が終わり次第お届けしますね」

ユウマ

「お願いします」

「さて、Hiiraggandamの反応速度を大幅にアップさせる為に改修作業を始めるとしますか」

「マグネットコーティングを通常より30%増やして、関節部にサーボモーターを組み込んで完成つと」

「シールドと外部装甲には、ナノスキンアーマーを薄く塗布すれば装甲の補修は完了。もうこんな時間か・・・昼飯を食べに行きますかね」

そんな時、俺のスマホが鳴り出した・・・

「もし、どなたか？」

ラウラ

「兄さん、私だ」

ユウマ

「ラウラ、如何したの？」

ラウラ

「これから皆で、再来週の林間学校の時に使う水着を買いに行こうと思うのだが、一緒に行かないかとお誘いの電話だ」

ユウマ

「そういえば、再来週はそんなイベントが有ったっけ。水着か・・・そう言えば持って無

いな」

「分かった。俺も行くよ」

ラウラ

「では、校門前で待っているぞ」

ユウマ

「はいよ〜」

俺は、一度部屋に戻ってシャワーを浴びた後、お出かけ用の服に着替えて校門に向かった……

校門前

ユウマ

「何だ、一夏も来てたのか」

一夏

「箒に、水着を選んでくれて頼まれたんですよ」

ユウマ

「何だ？箒とデートか？」

一夏

「・・・そんな感じだと思えます」

ユウマ

「箒は可愛いからな・・・早めに告って、結婚しちまえよ」

一夏

「学生結婚は無いでしょ・・・それに、まだ付き合っても無いのに」

ユウマ

「そう言うって事は、脈ありだな。林間学校で告れ、それでキスしろ」

一夏

「・・・告白はしてみます」

ユウマ

「そうしろ。箒なら断りはしないさ」

「頑張り給え、未来の義弟よ」

一夏

「義弟って・・・話が進み過ぎですよ・・・」

ユウマ

「断じて進み過ぎじゃないぞ。近い将来、俺は束さんと結婚するかもしれないからな」

「箒と一夏が結婚すれば、妹夫婦になるからな」

一夏

「マジですか・・・」

ユウマ

「だから、早く箒と付き合え」

一夏

「・・・頑張ってみます・・・」

ラウラ

「すまないな、少々準備に手間取ってしまった」

シヤル

「ゴメンね。箒に可愛いお洋服着せてあげようとしてたら時間掛かっちゃった」

箒

「その・・・変ではないか？」

一夏

「・・・白いワンピースが似合ってるぞ、箒」

箒

「そうか・・・選んでよかった」

シヤル

「ユウマさん、箒と一夏って・・・」

ユウマ

「そういう事だ。外野は見守ってやろう」

セシリア

「申し訳ありません！準備に時間が掛かってしまいました」

鈴

「セシリアってば、買い物に行くだけなのに滅茶苦茶オシヤレしようとしたのよ！」

「ただの買い物なんだから、制服でも良いじゃない」

セシリア

「それはいけませんわ!!淑女たるもの、身だしなみには気を配りませんと！」

本音

「セツシー、気合入ってるね〜♪」

簪

「私とは全然違うね」



ユウマ

「服装は、本人の自由だし気にしなさんな。俺だつて適当なよそ行き用の服だし」  
「本気で着替えろつて言うなら、軍服か執事服になるけどな」

セシリア

「今執事服と言いましたか?!」

ユウマ

「この前、縁あつて貰つたんだよ。ちなみにコレが実際に執事服着た写真ね」

本音

「わあく！東先生はメイドさんだ〜♪」

簪

「2人共似合いすぎだよ」

セシリア

「ユウマさん!!今度私のイギリスの実家に来ていただけませんか!!其方で一流の執事の嗜みをお教えますわ!」

ユウマ

「俺は、別にマジの執事目指してるわけじゃないから遠慮するよ」

ラウラ

「大変盛り上がりつつある所申し訳ないが、早く行かないと時間が無くなってしまおうぞ」

ユウマ

「それもそうだな」

ラウラ

「兄さんの車ではこの人数は無理か・・・」

ユウマ

「俺のポルシェは2人乗りだから確実に無理。大人しく電車で行くぞ」

大型ショッピングセンター レゾナンス・・・

ユウマ

「俺は、自分の買い物して来るからラウラ達は水着を買ってきな」

ラウラ

「では、コチラの買い物が終わったら連絡する。一階の休憩スペースで合流しよう」

ユウマ

「はいよ」

「一夏と箒は、さっさと買い物に行つてイチャイチャして来い」

箒

「イ、イチャイチャ等しません！」

一夏

「・・・しないのか？」

箒

「・・・一夏のバカ・・・そんな言われ方をされたら断れないではないか・・・」

ユウマ

「さっさと行けよ。恋人らしい買い物をして来い」

一夏

「行つてきます・・・」

ユウマ

「さて、水着を買ったら洋服を買いに行きますかね」

その頃、ラウラ達は・・・

ラウラ

「水着はどんなのが良いのだろうか・・・」

シャル

「流石にスクール水着は無しだよ、ラウラ」

ラウラ

「駄目なのか？」

シャル

「水泳の授業じゃないんだから、可愛い水着を選ばないと勿体ないじゃない。僕が選んであげるから、ラウラも気になった水着が有ったら僕に教えてね」

ラウラ

「すまないな、シャルロット」

セシリア

「簪さん、鈴さん、本音さんはどんな水着を選ぶんですの？」

簪

「あんまり派手じゃない奴かな」

鈴

「貧乳が誤魔化せる水着かしら」

本音

「私は、このキツネさんの着ぐるみ水着かな〜♪」

簪

「また変なものを選ぶんだから・・・」

セシリア

「あら？鈴さん、パットが付いている水着が有りますわ」

鈴

「ちよつと見せて!!」

「これよ!!こういう水着を探していたのよ!」

簪

「あ、これ私の好きなアニメとコラボしてる水着だ・・・これにしようかな」

セシリア

「私のイメーჯカラーは青色なので・・・コチラのパレオが付いた水着にしますわ」

本音

「ならお会計しちやおうよ♪」

簪

「いい物を買えたね」

鈴

「最高のモノが変えたわ！」

セシリア

「ラウラさん達と合流しないといけませんね」

ラウラ

「シャルロット・・・これは少し際ど過ぎではないか？」

シャル

「そんな事無いよ!!ラウラってば最高に可愛いよ!!」

ラウラ

「だが、この水着は私には似合わないと思うのだが・・・」

シャル

「この可愛いラウラを全世界の人達が見たら、きっとファンクラブが出来るくらいに可愛いよ！」

ラウラ

「そんなにか？」

シャル

「試しに、ユウマさんに可愛いラウラの写真を送ってみようかな」

ラウラ

「兄さんに送るのだけは辞めてくれ!! 恥ずかしくて顔を直視できなくなる!」

シヤル

「なら、林間学校当日まで内緒にしておかないとね」

ラウラ

「・・・ああ」

ラウラ達が水着を買い終わった頃・・・

ユウマ

「お、こんな所に俺が前から探してたMA-1のジャケットが売ってるじゃん!!」

「これかなりのレアもんなのに・・・季節外れの商品だから在庫品で売ってるのかな・・・」

店員

「そちらのジャケットは、先日倉庫を整理した時に見つけたんです。掘り出し物なのは分かっているんですけど、今は夏なのでお買い得品として売っているんですよ」

ユウマ

「これ買います!」

店員

「ありがとうございます♪」

ユウマ

「先にお会計してから、少し店内を見ても良いですか?」

店員

「どうぞ♪ジャケットは如何なさいますか?」

ユウマ

「店内は、冷房が効きすぎてるので着ておきます」

俺は、ジャケットを羽織って店内の洋服を見始めた・・・

ユウマ

「おお・・・かなりの掘り出し物が多い店だな。年代物のジーンズ・俺の琴線にビビッと来るモッズコート・ミリタリーブーツ・・・最高じゃないか!」

俺は、気になったものを端から試着していく・・・

ユウマ

「店員さん、これ全部下さい」

店員



「こんなに沢山・・・ありがとうございます」

「全部合わせて、このお値段になります・・・」

ユウマ

「8万か・・・安いな。丁度で」

店員

「お買い上げありがとうございます！」

ユウマ

「また来ます」

「いや〜良い買い物をしたな。掘り出し物がこんなに沢山買えるとは思わなかったぜ」

俺が、意気揚々と買い物袋を引っ提げて歩いていると・・・

ババア

「ちよつと!!この料理に髪の毛が入ってるじゃない!!今すぐに全部の料理を作り直しなさいよー!」

「それと、今回のお代は無料にしません!」

ボーイ

「お客様、大変申し訳ありませんが当店は料理人全員がスキンヘッドなので髪の毛が入

る可能性は有りません。適当な文句を言うのはお止めください」

ババア

「客に向かつてその態度は何よ!!お客様は神様でしょうが!!」

ユウマ

「うわゝ・・・老害拗らせたババアが居るよ。店員さんも大変だな・・・少しババアを懲らしめてやるか」

俺は、店内に書いてあつた警備室への直通番号に一報を淹れた後、オープンカフェの中に入ると・・・近くに居た店員さんにお金を渡して、赤ワインの入ったピッチャーを持つて来て貰つた

それを受け取つた俺は、ババアの居る席に向かうと・・・

ババア

「今のご時世は女尊男卑主義なのよ!!男風情が女性に楯突くんじやないわよ!!」

ボーイ

「老害拗らせたババアは今すぐにお金を払つて出て行つてください。アナタのような迷惑な客は神様でも何でもありません」

ババア

「五月蠅いわよ!!今すぐに私の言う事に従いなさいよ!!」

ユウマ

「おおつと!!手が滑ったあ!!」

バシヤツ!!

ババア

「何するのよ!!」

ユウマ

「いやあく身の程を弁えない老害に思い知らせてやろうと思ひまして。お前の人間としての醜さをな」

ババア

「私のお気に入りのスーツをよくも!!」

ユウマ

「それがお気に入りのスーツ?」

「そんなダサいスーツ良く着れるな。でも、俺のお陰で真つ赤なスーツに早変わりだな」

ババア

「男の分際で・・・ISを使えないくせに偉そうにするんじゃないわよ!!」

ボーイ

「もしかして、アナタは男性ＩＳ操縦者の朝霧ユウマさんですか？」

ユウマ

「そうですよ。俺の知名度って案外低いんですね」

ボーイ

「そんな事は有りませんよ。世界中継で発表されていましたから」

ババア

「男でＩＳ操縦者・・・嘘でしょ」

ユウマ

「これで分かったか？女が偉い時代はもう終わってるんだよ。今は男女平等主義が基本だぜ？」

「世界各国の研究機関が、男でも使えるＩＳに近いものを作ろうと日夜研究してるって言うのに・・・醜い醜態を晒すんじゃないやねえよ」

「お前の行動は女性達の風評被害になるって気づかぬえのか？」

ババア

「何を言ってる・・・」

お客さん

「いい加減にしてくれませんか？年増のヒステリーなんて醜くて見ていただけません。早く

「ここから消えてください！」

「アンタみたいなババアのせいで私達が全員白い目で見られるのよ!!今すぐに出ていきなさいよ！」

「そうよそうよ!昔の事にしがみついて生きてるババアは出て行ってよ！」

「それにこの入った髪は毛……どう見てもアンタの髪は毛じゃありません?こんなパープル色の髪の人って店内に貴方だけですよね?自演乙ですね」

ババア

「くっ……どいつもこいつも私を馬鹿にして」

ユウマ

「馬鹿にしてるんじゃないよ、正真正銘の馬鹿なんだよ」

警備員

「先ほど通報を頂いて駆け付けました！」

ババア

「警備員!今すぐにコイツ等を捕まえなさい！」

警備員

「捕まるのはアナタですよ。業務妨害・迷惑条例違反で警備室に来ていただきます」

「その後は、警察に引き渡しますので」

ババア

「ちよつと!!何で私が捕まらないといけないのよ!!」

ユウマ

「それが理解できないからアンタは老害なんだよ。今すぐに刑務所にでも行つて来いよ」

「きつと怖いお姉さん達が歓迎してくれるぜ?」

ババアは、警備員に連れて行かれた……

ボーイ

「皆さん、大変ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。コチラからのお詫びとしてドリンクを一杯サービスさせていただきますのでご容赦を」

ユウマ

「なら、俺からはデザートの代金をお支払いするのでこの後もお食事を楽しんでください。では俺は失礼します」

お客さん

「あの……こんな事を言うのはご迷惑だと思っんですが、写真を撮らせてもらう事は可能でしょうか?」

ユウマ

「俺ですか？写真なら良いですよ。一緒に撮りましょうか？」

お客さん

「お願いします！」

それから10分程、撮影会が行われたのは言うまでもないだろう

ユウマが撮影会を行ってる頃、一夏と箒は・・・

一夏

「箒の好きな色って何色だ？」

箒

「白色と赤色だな・・・」

一夏

「なら、この辺りの水着が良いんじゃないか？」

箒

「そうだな。少し考えさせてくれ」

一夏

「近くに居るから、決まったら呼んでくれよ」

箒

「分かった」

一夏

「箒が決めるまで俺も自分の買い物をするかな……そう言えば、来週って箒の誕生日だったよな」

「誕生日プレゼントは何が良いのかな……リボンが良いかな。赤色と白色をあしらったリボンがあれば良いけどな」

一夏は、雑貨屋に入って箒に渡す誕生日を探し始めた……

箒

「一夏のI Sのレッドフレームは、私のブルーフレームの兄弟機だったな……双方のイメージカラーを合わせた水着を選んだ方が良いだろうか……」

「だが、私の好きな色の水着を選ぶのが良い気もする……よし、この白色のビキニにしよう」

「一夏は綺麗だと言ってくれだろうか……」

箒は、一夏に連絡をして合流した……



ユウマ

「すみません、これを全部 I S 学園まで配送お願いできますか？」

受付

「畏まりました。では、コチラの伝票にご記入ください」

ユウマ

「書けました」

受付

「コチラで承りました。4日以内で到着すると思います」

ユウマ

「お願いします」

「いや、調子に乗って買い過ぎたな。ビンテージモノの洋服をこれでもかかって言うくらい買ったから持ちきれなくなっちゃったぜ」

ラウラ

「ココに居たのか兄さん」

ユウマ

「ラウラ達は買い物は終わったのか？」

ラウラ

「しつかり買えたぞ」

シャル

「良い物が買えたんだよ♪」

セシリア

「来週の林間学校が楽しみですわ！」

鈴

「私のスタイルの良さにビックリすれば良いわ！」

簪

「私も良い物が買えました」

本音

「私も可愛いのが買えたんだ〜♪」

一夏

「お待たせしました」

箒

「すまない、少々時間が掛かってしまった」

ユウマ

「目的は済んだし、帰りますか」

俺達は、買い物を終えて学園に戻った・・・

## 林間学校

今日は、林間学校当日・・・

千冬

「各自準備は出来たか？準備が出来次第バスに乗り込め。目的の旅館までは半日程で着く」

「バスの中では、基本的に何をしても良いが、迷惑を掛けないようにな」

ユウマ

「ちくちゃん、俺もバスに乗らないとダメか？」

千冬

「基本的にはバスに乗ってもらいたいんだが・・・お前は自家用車で行っても良いぞ」

「その代わり、マドカと一緒に乗せて行つてやつてくれ。マドカは、まだ人付き合いに慣れていないからお前が話し相手になってやつてくれ」

ユウマ

「はいよ。車持つてくるわ」

俺は、駐車場からポルシエを持ってくる・・・

生徒達

「ウソ?! ポルシエが自家用車ってお金持ちなの?!」

「私も助手席に乗せて貰いたい!」

「ユウマさんって、確か大統領の息子さんなんだよね?」

東

「ゆ〜くんは既に東さんの恋人なんだから狙っちゃダメなんだからね!」

生徒

「狙いませんよ。東先生とユウマさんがラブラブなのは学園内で有名ですから」

「それに、先日の執事とメイドさんの記事が雑誌に載ってましたけど、あんなラブラブな写真見たら応援したくなっちゃいますよ」

「だから安心してラブラブしてくださいね♪」

東

「みんな・・・ありがとう♪」

マドカ

「ユウマさん・・・よろしくお願いします」

ユウマ

「はいよ。助手席に乗ったらシートベルトしてな」

「何か曲はかけるか？」

マドカ

「なら、セリーヌをかけて欲しい」

ユウマ

「洋楽が好みか。待ってる、今アルバムをダウンロードするから・・・よし、出来た」

「んじゃ、安全運転で行きますか」

道中・・・

千冬

「マドカも少し人付き合いが出来るようになってくれれば、今後の学園生活に馴染めると思うんだが・・・」

摩耶

「こればかりは時間を掛けて少しずつ慣れていくしかないと思いますよ。焦っても良い結果は生まれませんよ」

千冬

「そうだな。私達でサポートしていこう」

シャル

「ラウラって、ポーカーフェイスでババ抜きやっても顔に出ないから強いよね」

ラウラ

「軍人だからな。これ位は出来て当たり前だぞ」

セシリア

「ですが、不意打ちには弱いようですわね♪」

簪

「ユウマさんの話題を出すと、少し感情が出てくるから分かりやすくなる」

本音

「らうらうは、照れると可愛い♪」

鈴

「次はポーカーやるわよ!!ロイヤルストレートフラッシュで勝ってみせるんだから!」

箒

「イカサマをしないとロイヤルストレートフラッシュは揃わないぞ。余程の幸運の持ち

主なら別だが」

一夏

「とりあえずトランプ配ろうぜ。ホイホイっと」

鈴

「それじゃあ、私から行くわよ。順番は時計回りでいきましょう」

「オールチェンジよ！」

シャル

「僕は2枚チェンジかな」

ラウラ

「私は3枚チェンジだ」

セシリア

「私は1枚チェンジですわ」

簪

「1枚チェンジで」

本音

「全部変えちゃいま〜す♪」

箒



「私はパスだ」

一夏

「試しに全部変えてみるか」

鈴

「それじゃあ、オープン！」

「ワンペアね」

シャル

「ツープエアだよ」

ラウラ

「フォーカードだな」

セシリア

「スリーカードですわ」

簪

「ツープエアだよ」

本音

「フラッシュだよ♪」

箒

「フォーカードだ」

一夏

「お？ストレートフラッシュだ」

鈴

「私が一番役が弱いじゃない!!」

ラウラ

「こればかりは運勝負だ。諦めろ」

鈴

「もう一回よ!!」

千冬

「お前達はもう少し静かに遊べないのか」

一夏

「千冬姉もポーカー、一緒にやるか？」

千冬

「織斑先生だ。まあ、たまには良いだろう」

バスの車内は、楽しそうな声がしていた・・・

ユウマのポルシェ・・・

ユウマ

「暑くないか？マドカ」

マドカ

「丁度良いぞ。ポルシェというのは乗り心地が良いな」

ユウマ

「多少カスタムしてあるからな。乗り心地重視のセッティングにしてあるんだよ」

マドカ

「ユウマさんはお金持ちなんだな」

ユウマ

「別に大富豪じゃないぞ？働いて、貯金したお金で買ったただけだ」

「給料は貰い過ぎてる自覚は有るけどな」

マドカ

「私も、ドイツの代表候補生になればお給料は貰えるだろうか」

ユウマ

「そりゃあ貰えるさ。仕事をしているんだからな」

「今度、母さんに打診しとくよ」

マドカ

「よろしく頼む」

「話は変わるのだが、ユウマさんはその……私と同じ強化人間なのか？」

ユウマ

「説明すると少し面倒なんだけど、俺は受精卵の時点で遺伝子を弄くって生まれた強化兵って奴だな」

「普通の人より強靱な肉体・天才的な頭脳・あらゆる兵器を扱える適応能力を持って生み出されたコーディネーターが俺さ」

マドカ

「コーディネーターって何？」

ユウマ

「ココとは違う世界で発展した遺伝子工学によって、生まれる前の受精卵の段階で様々な改良を施すんだよ」

「上手くいけば生まれてくる赤ん坊の見た目も自由に換えられるって謳い文句で流行った、一種の人種改良だ」

「俺は、コーディネーターの中でも最高傑作と言われたスーパーコーディネーターなんだよ」

マドカ

「スーパーコーディネーター？」

ユウマ

「俺が元居た世界は、コーディネーターとナチュラルって言う人種が居たんだ。自然の摂理に従って生まれた人がナチュラルだ」

マドカ

「じゃあ、この世界の人達のほとんどはナチュラルなの？」

ユウマ

「この世界にコーディネーターは俺しか居ないからな。ナチュラルもコーディネーターも無いさ」

マドカ

「それじゃあ、私や千冬姉さんや一夏兄さんは何なの・・・」

ユウマ

「プロジェクトモザイカ・・・織斑計画だったか。人工的に天才を作り出そうとした愚かな研究は、篠ノ之東と言う天然物の天才が生まれた事で頓挫した計画だな」

マドカ

「私は、千冬姉さんのスペアとしてクローン技術で生み出された存在だから・・・そんな

私が生きていて良いのかな・・・」

ユウマ

「生まれた理由は人それぞれさ。俺は自分の境遇を恨んじやいないよ」

マドカ

「何で？」

ユウマ

「俺の周りには素敵な人達が大勢いるからさ。みんなが俺を認めてくれたから今の俺が居るんだよ」

「マドカの事は、俺も束さんも母さんも父さんも千冬も一夏もみんな大切な家族だと思ってる。だからマドカは変な事を考えずに、俺達に甘えれば良いんだよ」

「それにクラスのみんなだつて良い人達ばかりだぞ。少し心を開けば明るい未来が待ってるかもしれないだからさ」

マドカ

「・・・ありがとう。ユウマさんはお父さんみたいだね」

ユウマ

「おいおい、俺はまだ18歳だぞ？父親になるには早すぎるぜ」

マドカ

「イヤ♪」

ユウマ

「良い笑顔でイヤって言われてもねえ．．．せめてお兄ちゃんにしてくれよ」

マドカ

「兄さんは一夏兄さんが居るから駄目。だからお父さん」

ユウマ

「はあ．．．人前ではお父さんだなんて言うなよ」

マドカ

「善処するね」

ユウマ

「これでちゅちゃんのおみの種は1つ消えたのかな？」

「お、目的地の旅館に到着したな．．．ちゅちゃん達と合流しますかね」

マドカ

「あ、本音ちゅくん！部屋まで一緒に行こう」

本音

「まどまどだあ♪良いよ一緒に走ろう♪」

千冬

「ユウマ、この短時間にマドカに何があつた・・・」

ユウマ

「マドカの心に刺さつてた不要な楔を抜いたんだよ。これで千冬の悩みの種は消えるんじゃない?」

千冬

「そうか・・・お前に任せて正解だつたよ」

ユウマ

「今度から朝霧ユウマのお悩み相談室でも開こうかな」

千冬

「それはそれで繁盛しそうだな・・・だが辞めておけ。お前に惚れる女が増えるぞ?」

ユウマ

「俺は束さん一筋だから大丈夫だもん!」

千冬

「その口調は気持ち悪いぞ」

ユウマ

「ちくちくちゃんつてば辛辣なんだから」

千冬



「ほら、部屋に案内してやるから行くぞ」

ユウマ

「は〜い」

女将

「遠くからようこそおいで下さいました。どうぞごゆっくりお過ごしくださいませ」

ユウマ

「数日間お世話になります」

千冬

「ユウマの部屋は1人部屋を用意してある。IS実習に関してはユウマは不要だろう」  
「釣りをするでも、市街地に行くでも、部屋でのんびり過ごすのも許可する。問題は起こすなよ」

ユウマ

「なら、市街地に出掛けてくるわ。ISの部品で欲しいの有るから」

千冬

「了解した。夕食までには戻って来いよ」

ユウマ

「了解」

市街地……

ユウマ

「部品屋は何処かな。サイコフレームが売ってたら良いな」

「つて、サイコフレームが売ってる訳ないか。I S コアの材料が買えれば儲けもんだな」

「とりあえず、チタン合金をインゴットで欲しいな。後は、パラジウム触媒と半導体……これで全部か」

買い物後……

ユウマ

「良い物が沢山買えて、俺は大変満足である」

「さて、旅館に戻りますかね」

その頃、林間学校組は・・・

千冬

「各自整列!!これよりI S 実習を行う!」

「専用機持ちは経験の浅いモノにI S の使い方を教えてやれ」

一夏

「千冬姉、ユウマさんは何処行つたんだ?」

千冬

「アイツは買い物だ。国家代表レベルのアイツにI S 実習は必要ないからな」

ラウラ

「確かに、兄さんにI S 実習は要らないな」

セシリア

「今日の実習は何をするのですか?」

千冬

「もうじき来るさ」

真耶

「キャア〜!!誰か止めて下さ〜い!!」

千冬

「またこのパターンか・・・何をやってるんだ・・・」

ユウマ

「ちくちゃん、ただいま」

真耶

「朝霧君、退いてくださーい!!」

ユウマ

「嫌だね♪H i ーッガンダム展開！ワイヤーアンカー！」

真耶

「キヤア〜!!」

ユウマ

「真耶ちゃんってばドジっ子さんなんだから」

真耶

「ドジっ子呼びは辞めてください！」

ユウマ

「だって事実だし。元代表候補生なのにI S 操縦で盛大に間違えるって教師としてどうなのさ」

真耶

「面目有りません・・・」

千冬

「教師としての面目が無くなったところで話は変わるが、代表候補生たちには模擬戦をやってもらおう」

「相手は、山田先生が務める。精々頑張れよ、小娘達」

セシリア

「ユウマさんはお相手をするのですか？」

ユウマ

「俺？別に良いけどセシリア達の心が折れると思うよ。俺、勝負となるとマジで相手するから」

ラウラ

「辞めておけセシリア。兄さんと模擬戦をすると誰も勝てんぞ」

「私でさえ10分持ちこたえるだけで精一杯だからな」

セシリア

「・・・でしたら遠慮させていただきますわ」

ユウマ

「その方が良いさ。俺とタイマン張れるのはちくちゃんだけじゃない?」

千冬

「ほお・・・なら私の専用機を用意するでしょう。それでタイマンといくぞ」

ユウマ

「この前ちくちゃんにインパルスガンダムあげたじゃん。それをちくちゃんの専用機にカスタマイズしてあげるから我慢しなさいよ」

「何なら俺のIS並にオーバースペックにしても良いよ」

千冬

「では頼もう」

ユウマ

「はいよ」

東

「ちくちゃん! ゆーくん! ISのカスタマイズするなら東さんも混ぜてよ!」

千冬

「なら、大人しく仕事をしろ」

東

「あいあいさー!!」

千冬

「さて、最初は誰に模擬戦をしてもらうか・・・」

ユウマ

「セシリア、鈴、行って来い」

セシリア

「私と鈴さんですか？」

ユウマ

「セシリアは中距離から長距離向けのISだろ？」

「鈴は近距離から中距離向けのISだ。コンビネーションを意識する組み合わせだからな」

「実戦だと思ってやってこい。勝てなくても構わないよ」

「もし真耶ちゃんに一発でも攻撃が当たれば、俺が特別にセシリアと鈴に適性を測って専用武器を作ってやるよ」

セシリア

「ホントですか!!」

鈴

「冗談じゃないわよね!」

ユウマ

「ユウマ君嘘つかない」

鈴

「行くわよセシリア！」

セシリア

「参りましょう、鈴さん！」

ユウマ

「頑張つてね〜」

千冬

「2人を焚きつけるのは良いが、山田先生に勝てる勝算は有るのか？」

ユウマ

「無いよ。あくまで若人の成長の為だよ」

「強い人と戦う事と、場数を踏んで経験値をあげるしか成長は出来ないからね」

「何事も当たって砕けるだよ、ちゅちちゃん」

千冬

「お前なあ・・・」

ユウマ



「それじゃあ、俺は旅館に戻るね。結果は後で教えてね」  
キュピーン!!

ユウマ

「何だか面倒事が起きそうな予感・・・」

東

「ゆ〜くん大変だよ〜!!」

ユウマ

「東さん、どうかしました？」

東

「今さっき、レオナさんから緊急メッセージが届いたんだよ!!」

「アメリカで開発中だった戦闘用ISの銀の福音《シルバリオ・ゴスペル》が暴走したみたいで、日本に向かってるんだよ!!」

「しかも、テロリストが犯行声明を出してISをジャックしたんだって!!」

ユウマ

「また面倒な事しやがって・・・」

東

「今スグに対処しないと大変な事になっちゃうよ!」

ユウマ

「一夏達じや荷が重すぎるか・・・千冬と真耶ちゃんに協力してもらうか・・・」

東

「ちくちゃんはインパルスガンダムが有るけど、まくちゃんは専用機が無いよ?」

「東さんのビルトファルケンは改装中だし」

ユウマ

「俺の手持ちの I S は今 H i l l ガンダムしか無いからなあ・・・試作中の I S なら有るけど、完成までは程遠いし」

「ビルトビルガーは、システム面で問題が有って使えないし」

東

「箒ちゃん達の I S 借りる?」

ユウマ

「無理だな。箒たちの I S は操縦者専用設定されているから、今から設定を変えると元に戻るかの保証がない」

東

「なら如何すれば・・・」

真耶

「何かありましたか？」

千冬

「さつきから如何した？」

東

「実はね……」

東は、2人に状況を説明した……

真耶

「如何しましょう……そんな事に生徒の皆さんを巻き込む事は出来ませんし」

千冬

「何処のテロリストだ……そんなバカげた事をしでかす奴らは」

ユウマ

「如何する……一夏達じや戦闘用ISの相手は無理だぞ」

東

「ゆ〜くんとち〜ちゃんにお願いするしかないよね……」

千冬

「仕方ない……ユウマ、行くぞ」

ユウマ

「はいよ、ちくちゃん」

千冬

「真耶、生徒達の事頼んだぞ」

真耶

「はい！」

東

「必ず帰って来てね！」

ユウマ

「朝霧ユウマ・・・Hiーッガンダム出る!!」

千冬

「織斑千冬・・・ソードインパルスガンダム出るぞ!!」

真耶

「東先生・・・生徒のみんなには内緒にしないとイケませんね・・・」

東

「そうだね・・・東さんも出撃出来たら良かったんだけどね・・・」

上空・・・移動中

ユウマ

「いくら内蔵エンジンが縮退炉搭載していても、スペックが分からない相手に何処までやれるか・・・」

千冬

「何世代かも分からないISが相手だからな・・・セカンドシフトでもされたら更に面倒な事になるぞ」

ユウマ

「そればかりはISのコア次第だからなあ・・・コアと対話でも出来れば戦わない道も有るんだろうけど」

千冬

「来たぞ！」

福音

「・・・・・・・・・・」

ユウマ

「生体反応アリ・・・パイロット乗せた状態で暴走してるのかよ！」

千冬

「これではコアを破壊して止めたとしても、パイロットを殺してしまう・・・シールドエネルギーを削って止めるしかないか」

ユウマ

「暴走してるＩＳにシールドエネルギーの概念が有ると思えないけどな・・・」

福音

「・・・・・・・・」

ピピッ!!

ユウマ

「クソツ!!ロックオンしてきやがった!」

「そっちから手を出して来たんだから、壊れても文句言うんじゃねえぞ!!」

「ターゲットロック!!行け、フィンファンネル!」

千冬

「高速で動く相手にソードシルエットは不向きだな・・・換装、フォースシルエット!」

「並のＩＳの装甲でビームサーベルの威力に耐えられるか試してやろう!」

福音

「ピピピッ!!」

バシユン!!

バラバラララ!!!

ユウマ

「おいおい・・・広範囲のオールレンジ攻撃って、正気の沙汰じゃねえぞ!!」

千冬

「VPS装甲で耐えられるのか・・・」

ユウマ

「今は考えるのは後回しだ!!フィンファンネル展開!フィールドバリアー!」

千冬

「この・・・ブリュンヒルデを嘗めるな!!」

その時、一瞬だけセンサーに不審な反応が有った・・・

ユウマ

「何だ、今の反応・・・」

フレイ

「死になさい!!このクソ野郎!!」

千冬

「ユウマ!!後ろだ!」

ユウマ

「クソツタレ!! 何で俺の察知能力に引っ掛からないんだよ!」

フレイ

「よくも私を刑務所にぶち込んでくれたわね・・・」

ユウマ

「お前は・・・フレイ・アルスター!」

フレイ

「私は強化人間に生まれ変わったのよ!」

「アンタなんかもう怖くないのよ!!」

ユウマ

「この野郎!! フィンファンネル!」

フレイ

「サイコフィールド!!」

ユウマ

「ウソだろ!! 俺のフィンファンネルを無効化しやがった!!」

千冬

「ユウマは下がっている! 接近戦なら如何だ!!」

フレイ



「今の私に勝てる奴は居ないのよ!!」

「サイコブレード!! 行きなさい!」

ユウマ

「こんな武装知らねえぞ!! 軌道が可笑しくて読めねえ!!」

ザシユ!!

ユウマ

「ガハッ!!」

バチバチッ!!

フレイ

「I Sのコアを破壊できたみたいね・・・これでアンタは終わりよ!」

「あれから最悪だったわ・・・でも、ハデスって邪神っていう男と契約したら、こんなに  
凄いちカラとI Sを手に入れる事が出来たわ」

「これでアンタを殺してあげるわ!」

千冬

「ユウマから離れろ!!」

「ココは一旦撤退するぞ!」

ユウマ

「クソツ!! Hiールガンダムのコアが破壊された・・・オマケに腹に風穴開けられたぜ・・・」

千冬

「喋るな! 出血が止まらなくなるぞ!」

ユウマ

「もう止血は出来てるよ・・・でも、マズい事になったな」

千冬

「あの女は誰だ!?!」

ユウマ

「オータムとスコールと桜花とマドカを従わせて、テロ行為を行ってたクソ女・・・フレイ・アルスターだよ。刑務所にぶち込んだはずなんだがな・・・」

千冬

「アイツがマドカを・・・許さんぞ!」

ユウマ

「今は作戦を考え直さないと無理だな・・・」

旅館……

東

「衛星映像が確認できないよ〜!!」

真耶

「東先生、あまり画面に咬み付いても進展しませんよ?」

東

「だつて〜」

千冬

「東!!急いで手当の用意をしろ!!」

東

「え……ゆ〜くん!!」

真耶

「急いで医療セットを持ってきます!」

東

「一体何があつたの?!」

ユウマ

「俺が前に刑務所にぶち込んだクソ女が復讐しに来やがった．．．お陰でISが壊れちゃった」

東

「ゆ〜くんが負けちゃうなんて．．．」

ユウマ

「俺だつて負けること位あるだろ．．．急いでISを用意しないと」

東

「駄目だよ!!今は休んでなきや!」

真耶

「朝霧君、今すぐに手当てしますね!」

千冬

「私は少し今後の事を考える」

臨時の医務室．．．

真耶

「血は止まっていますけど、無理はダメですからね!」

ユウマ

「・・・少し眠ります」

俺が眠ると、真つ白な世界に意識を飛ばされた・・・

ユウマ

「さて、あのクソ女をぶっ飛ばすには如何したらいいかな」

???

「お前はチカラを手に入れたら、破壊を楽しむのか？」

ユウマ

「誰か知らないけど、俺は破壊に興味は無い。誰かの可能性と未来を守ればそれで十分なんだよ」

???

「そうか・・・お前なら託しても良いかもしれないねえな。受け取るか？神にも悪魔にもなれる魔神皇帝のチカラを」

ユウマ

「魔神皇帝・・・まさかアンタは!!」

兜甲児

「自己紹介が遅れちゃったな。俺は、兜甲児だ」

「マジンガー乙とマジンカイザーのパイロットをやってるぜ！」

ユウマ

「知ってるさ。兜甲児の活躍は、俺が居た世界ではゲームやアニメで描かれていたからな」

「ドクターヘルとの戦いの事もある程度は知っているよ」

甲児

「なら話が早いぜ!! I S するのは良く分かんねえけど、神様が協力してくれるってんだから大丈夫だと思っぜ」

ユウマ

「神様……それってアマテラスさんか？」

甲児

「その人だぜ。今からマジンカイザーの操縦方法のレクチャーといこうぜ」

ユウマ

「頼むよ、甲児さん」

甲児

「甲児で良いぜ。その方が呼びやすいだろ？」

ユウマ

「ならそうさせてもらおうよ、甲児」

緊急作戦会議室・・・

真耶

「朝霧君は眠ってしまいましたよ」

千冬

「ユウマがやられる以上、我々では太刀打ちが出来ない可能性が高い」

束

「それに、手持ちのISほとんど無い以上束さん達じゃ対処できないよ・・・」

一夏

「千冬姉!!ユウマさんが怪我したって本当なのかよ!!」

ラウラ

「兄さんは無事なんですか!!」

千冬

「お前達は部屋に居ろ。今は作戦会議中だぞ」

シヤル

「織斑先生、今回暴走しているＩＳってアメリカのＩＳなんですよね」

千冬

「そうだ」

簪

「なら、アメリカに協力要請は出来ないんですか？」

千冬

「並のＩＳでは勝ち目はない。それこそ戦略兵器を以てしても勝てはしないだろうな」

鈴

「国家代表が戦ってもダメなんですか？」

束

「ゆくくんは、今現在の世界最強のＩＳ操縦者だよ？ 国家代表が出張って来ても役に立たないよ」

千冬

「それに、あのクソ女を地獄に叩き落とす必要が有るからな・・・」

キュイン！キュイン！キュイン！



真耶

「織斑先生！2機のISがコチラに向かって来ています！」

千冬

「チツ!! 緑でも無い奴らが今変わろうとしている世界を破壊する気なら、私は鬼になつてもお前達を地獄に落とすだけだ！」

ユウマの部屋・・・

ユウマ

「戻って来たか・・・さて、捕らわれてるパイロットを助けて、ビツチ女を地獄に落とすてやるか」

俺は、旅館を出て・・・浜辺に向かった・・・

ユウマ

「いきなり本番だけど、男は度胸だぜ!!」

「カイザーパイルダー!! ゴー!!」

俺が、その言葉を叫ぶと・・・俺の体は赤い光に包まれて、カイザーパイルダーに姿を変えた・・・

「マジンゴー!!」

次に、マジンガー好きなら一度は叫んでみたい言葉を叫ぶと・・・海の中からマジンカイザーが現れた

「パイルダーオン!!」

マジンカイザーの頭部にドッキングすると、カイザーの目が光り・・・システムが完全起動した

「よし!!カイザースクランダー!・ゴー!」

そうすると、背中から量子変換されたカイザースクランダーが出てきた・・・

「待ってろよクソビッチ・・・お前は必ず地獄に叩き落としてやる!」

上空・・・

フレイ

「アイツ等は何処に行ったのよ!!こうなったら、辺り一帯破壊して炙り出してやるわ!」  
「アンタもさっさと攻撃しなさいよ!!」

ユウマ

「そうはさせるかってんだよ!!ターボスマッシュヤーパンチ!」

フレイ

「キヤアア!!この、よくも私を殴り飛ばしたわね!!」

「死になさい!!」

ユウマ

「誰が死ぬか、このクソ女!!」

旅館・・・

真耶

「織斑先生!!正体不明のロボットが福音たちと交戦しています!!」

千冬

「何?!」

東

「あんなロボット、東さん知らないよ!!」

ラウラ

「・・・マジンカイザー・・・」

千冬

「ラウラ・・・何か知っているんだな!!」

ラウラ

「以前、兄さんが好きなロボットの絵を描いている時に見せてくれたスーパーロボットだ」

「まさか・・・兄さんなのか？」

真耶

「朝霧君が居ません!!」

千冬

「あのバカ!!真耶、お前も来い!」

真耶

「分かりました!」

上空・・・

フレイ

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・何で私の武器が効かないのよ！」  
ユウマ

「超合金ニューZαがお前のシヨボい武装で傷つくわけねえだろ!!」  
福音

「・・・」

ズガガガガッ!!

ガキンッ!!

ユウマ

「無駄無駄無駄!!」

フレイ

「なら、ミサイルを喰らいなさい!!」

ユウマ

「ミサイルなんて、あつという間にスクラップにしてやるぜ！」

「ルストトルネード!!」

フレイ

「ミサイルが一瞬で風化したって言うの!!ならビーム兵器で!!」

ユウマ

「効かねえって言うてんだろうが!!」

フレイ

「何なのよ!! 私は選ばれた人類なのよ!! 虫けらが邪魔するんじゃないわよ!」

ユウマ

「俺が虫けらなら、お前は役に立たねえゴミ野郎だ!!」

「ゴミは処分しねえとなあ!!」

フレイ

「嫌よ!! コツチに来るんじゃないわよ!」

「アンタ!! 私を助けなさいよ!」

福音

「・・・いい加減に私の可愛い I S を操ってるんじゃないわよ!!」

「この子に破壊活動なんて絶対にさせない!!」

フレイ

「この!! 私の支配から逃げられると思わないでよ!!」

ユウマ

「お前はココで終わりなんだよ!! 至近距離でコイツを喰らいやがれ!!」

「ファイヤーブラスター!!」

フレイ

「キヤアアア!!」

福音

「最後にケジメだけは付けてもらおうわよ!! シャインスコール!」

バラバララッ!!

フレイ

「・・・こんな所で死ぬわけにはいかないのよ・・・ハデス、私を助けなさいよ!」

アマテラス

「残念ですが、邪神ハデスは私が消滅させましたよ」

フレイ

「は?」

アマテラス

「死神系の神の分際で、創造神である私の管轄する世界に手を出すと如何なるかを身をもって証明してもらいました」

「アナタの魂は既にハデスの呪いで穢れています・・・ユウマさん、その愚か者を消滅させて魂を私の元へ送ってください」

ユウマ

「まるで死神だな・・・分かりました」

「覚悟しやがれ、フレイ・アルスター!!」

「光子力エネルギー、フルチャージ!!」

フレイ

「イヤ〜!!」

ユウマ

「魔神皇帝の怒りを思い知れ!!」

「カイザーノヴァ!!」

バシユン!!

フレイ

「ギャアア!!!」

アマテラス

「・・・魂の回収は完了しました」

「ユウマさん、お体は大丈夫ですか？」

ユウマ

「今は大丈夫です。この後は暫くは休みますけど」

アマテラス



「今回は、私の管理が至らず申し訳ありませんでした」

ユウマ

「済んだ事ですし、もう良いですよ」

アマテラス

「それと、ご報告しなければいけない事が有ります・・・ハデスの仕業で、2機のガンダムのI Sコアが破壊されました・・・」

「それにより修復する事が出来なくなりました・・・幸いRシリーズはコアは無事でしたが、I S本体を破壊されてしまい、修理する場合バンプレイオスの状態でしか修復する事が出来ません」

「Rシリーズを作り直す場合は、かなりの時間を要します・・・如何しますか」

ユウマ

「俺の方もHiールガンダムを破壊されました。なので、当面はマジンカイザーは目立って使えないので・・・何かしらの機体をコチラで用意します」

「その間に、バンプレイオスの修復をお願いします」

アマテラス

「畏まりました・・・今回は、本当に申し訳ありませんでした」

ユウマ

「俺は気にしていませんよ。それではまたお時間が有りましたらお話ししましょう」

福音

「ふう・・・ウィルスの除去を完了。一度福音のシステムを消去しないとイケないわね」  
「そつちのアナタ、怪我は大丈夫？」

ユウマ

「ISのお陰で傷は塞がってるから大丈夫だ」

福音

「申し訳ないんだけど、私のISはこれから初期化させるから、私を浜辺まで運んでくれないかしら？」

ユウマ

「それくらいならお安い御用だ。背中に乗ってくれ」

ナターシャ

「自己紹介が遅れちゃったわね。私は、ナターシャ・ファイルスよ」

ユウマ

「朝霧ユウマだ。それじゃあ出発するぞ」

ナターシャ

「よろしくね」

千冬

「ユウマの奴・・・どうして危険を冒してまで出撃するんだ！」

真耶

「まあまあ・・・朝霧君は、何か考えが有ったんじゃないですか？」

千冬

「帰ったら説教だ！」

ユウマ

「あ、ちくちゃん！福音の暴走止めて来たよ〜」

千冬

「この大馬鹿者が!!病み上がりの状態で出撃するな！」

ユウマ

「仕方ないでしょうが!!マジンカイザーじゃなきゃ、あのクソ女をブツ倒せなかったんだから！」

千冬

「なら、せめて一言くらい言ってから出撃しろ！」

ユウマ

「緊急事態だから大目に見なさいよ！」

千冬

「やかましい!!」

真耶

「まあまあ・・・お2人共少し落ち着きましよう。今は、大事にならなかつた事を喜びましょう」

「それに、そちらの女性に事情を聴かないといけませんし」

千冬

「仕方ない・・・今回は大目に見るが、今度同じ事したらお仕置きだな」

ユウマ

「分かったよ・・・ちくちゃんのお仕置きは受けたくねえよ・・・」

旅館・・・

ユウマ

「ただいま〜」

東

「ゆうくんのお馬鹿〜!!」

ユウマ

「ゴヘツ!!」

東

「東さんを心配させたんだから、ゆうくんは東さんの事をお嫁さんにしないといけませ  
ん!」

「ゆうくん覚悟は良いかな?」

ユウマ

「結婚は卒業してからじゃダメですか?」

東

「東さんをお嫁さんにしてくれるなら許しましょう!」

千冬

「話しは終わったか?」

ユウマ

「終わったんじゃない?」

ラウラ

「兄さん!!怪我は大丈夫なのか!!」

ユウマ

「大丈夫大丈夫。傷は塞がってるから」

ラウラ

「しかし、マジンカイザーをこの目で見られる日が来るとは思わなかったぞ」

ユウマ

「俺だって、まさかマジンカイザーに乗るとは思わなかったよ」

箒

「ユウマさん、一応傷の手当てをしますので、お腹を見せてください」

ユウマ

「多分大丈夫だと思うけど、よろしく頼むよ」

一夏

「あれが俗にいうスーパーロボットなんですか?」

ユウマ

「男のロマンのスーパーロボットだな。俺が大好きなロボットがマジンカイザーだ」

鈴

「アンタばかり狡いわよ!! I Sを乗り換え放題なのが不公平よ!」  
セシリア

「鈴さん、ユウマさんは特別な方ですわ。私達は、I Sの全ての能力を引き出せてはいません」

「そんな私達がI Sを乗り換えても、宝の持ち腐れになってしまいますわ」

シャル

「ユウマさんは凄いな。僕達代表候補生が子供にしか思えなくなってくるよ」

千冬

「代表候補生は子供同然だからな。技術的にも未熟だから精進しろよ、小娘達」

真耶

「私も元代表候補生ですが、まだまだ至らない所が多くて困っているんですよ?」

東

「代表候補生なんて無くしちゃえばいいのにね」

ユウマ

「仕方ないだろうね。何処の国もI Sの色んなパターンデータの欲しいだろうからな」

「今後のI Sの発展に乞うご期待ってね」

簪

「ユウマさん！マジンカイザーを見せてください！」

ユウマ

「良いよ。マジンゴー！」

簪

「・・・カツコいい!!」

本音

「かんちゃん、良かったね〜♪」

束

「マジンカイザーって凄いいね。ちよつと調べても良い？」

ユウマ

「駄目ですよ!!」

束

「だよね〜」

ナターシャ

「御取込み中の所大変申し訳ないんだけど、私の福音の解析を手伝ってもらえないかしら」



「あのクソ女のウイルスが少しでも残ってたら、大変な事になりそうだから」

マドカ

「フレイ・アルスターの事か？」

ナターシャ

「そうよ!! アイツのせいで、私の可愛い福音が大量殺戮兵器になる所だったんだから!」

東

「そういう事なら、東さんがウイルス除去をしてあげようじゃないか♪」

ユウマ

「大丈夫ですか? 仮にも、邪神が作ったウイルスですよ?」

東

「東さんは神様は信じてないもん♪」

箒

「仮にも神社の娘が言っではいけない事を言わないでください!」

東

「箒ちゃんが怒った〜!!」

ユウマ

「今のは東さんが悪いです」

千冬

「確かにな」

一夏

「女将さんからお茶貰ってきたぞ」

千冬

「これから私とユウマと束は、福音の解析に入る。お前達は、真耶の言う事に従うようにな」

一夏

「分かったよ」

即席の解析室・・・

束

「さて、パパッと解析しちゃいますか♪」

ユウマ

「俺の方で、ウイルスの除去を並行して進めていきますから、束さんは解析の方よろしく」

東

「この天災東さんに任せなさい！」

ナターシャ

「東博士って、いつもこんな感じなの？」

千冬

「そうだな．．．子供の頃からこんな感じだ」

ナターシャ

「天災って凄いのね．．．」

ユウマ

「何だよ、このウイルスは．．．データラメな法則で組み立てるな．．．頭悪そうな構造してるぜ」

「こんなウイルスは消去して、ゴミ箱にポイっとね」

東

「I Sの方はシステム系に問題は無さそうだよ」

ユウマ

「ウイルスの除去は完了と．．．コッチのお仕事は完了であります」

東

「東さんのお仕事も完了であります！」

「はい、もう大丈夫だよ。システム系に問題は無かったし、ゆくくんがウイルスを除去してくれたから暴走する心配も有りません！」

「この子を一度解体して新しくIS作るのも有りだし、この子をこのまま使うかは君次第だよ」

ナターシャ

「ありがとうございます……」

ユウマ

「お仕事も終わった事だし、俺は寝る！」

東

「東さんもお仕事が一段落したので、ゆくくんと一緒に寝ます！」

千冬

「1時間だけだぞ」

ユウマ&東

「おやすみなさい！」

千冬

「さて、ナターシャと言ったか？」

ナターシャ

「ええ」

千冬

「これから如何するんだ？」

ナターシャ

「如何しようかしら・・・アメリカに戻つても、また福音が戦闘兵器にされそうだし、職して何処かのテストパイロットにでもなろうかしら」

千冬

「なら、ドイツに来ると良い」

ナターシャ

「ドイツに？」

千冬

「ドイツは今、優秀な人材を募集しているからな。ユウマに頼めば大統領と交渉してくれるからな」

ナターシャ

「そうね・・・一度聞いてみようかしら」

千冬

「私の方から簡単に伝えておく。後は頑張れよ」

ナターシャ

「ええ」

1時間後・・・

ユウマ

「少し寝て、目も覚めた事だし・・・マシンカイザーの詳細スペックの洗い出しをやりますか」

ナターシャ

「少しお話良いかしら？」

ユウマ

「どうぞ〜」

ナターシャ

「君って、ドイツの大統領の息子さんのよね？」

ユウマ

「義理の息子ですけどね〜」

ナターシャ

「もし私がドイツに行きたいって言ったら、出来るかしら」

ユウマ

「出来ますよ。俺は、一応スカウトの権利も持っているんで」

「特務隊のメンバーの任命は俺の一存で決められるようになってるんで。如何します？ドイツに移住します？」

ナターシャ

「お願い出来るかしら？」

ユウマ

「なら、俺の方で手続きしておきますね。数日後に、大使館の人が説明に来ると思うんで、色々聞いてみて下さいね」

ナターシャ

「ありがとう」

ユウマ

「それまでは、IS学園の俺の部屋に滞在して良いですよ。俺は、東さんの部屋に転がり込みますから」

ナターシャ

「色々ありがとう」

ユウマ

「お気になさらずに」

「よし！マジンカイザーのスペックの洗い出し終わり！！我ながら規格外のスペックしてよなあ……」

「マジンカイザー以外のISを用意しないといけないんだよなあ……何作ろうかな」

東

「話しは聞いちゃったもんね♪」

「ゆ〜くんの新しいISは東さんが作ってあげるよ♪」

ユウマ

「なら、東さんにお任せします。ビルトビルガーは結局システム面の不具合で完成は当分見送りの状態ですし」

「東さんの任せなさい！！それじゃあ待っててね、ゆ〜くん！」

ナターシャ

「嵐のような人ね、東博士って」

ユウマ

「底抜けに明るい人ですよ。でも、繊細な人です」

「俺の恋人でも有ります」



ナターシャ

「若いつて良いわね・・・」

ユウマ

「ナターシャさんだって、十分若いじゃないですか」

ナターシャ

「私は、今まで軍一筋だったから・・・あまり出会いが無かったのよ」

ユウマ

「ナターシャさんは美人だから、相手は引く手数多だと思いますよ」

ナターシャ

「そうだと良いんだけどね・・・」

ユウマ

「さて、俺はココに居てもやる事はもう無いんで帰りますね」

ナターシャ

「合宿はやらないの？」

ユウマ

「一応負傷者扱いなんで、帰つてのんびり療養します！」

「ちくちゃんに一言言つてから帰りますかね」

千冬

「福音の解析も終わったな．．．アメリカに抗議のメールを送らなければな」

東

「東さんにお任せ♪猛烈に批判するメール送っておくね！」

ユウマ

「お疲れ様です。俺の方は終わったんで、I S学園に帰ります」

千冬

「一応病み上がりだからな、安全運転で帰るんだぞ」

東

「林間学校が終わったらデートしようね♪」

ユウマ

「ナターシャさんの事を学園長に紹介しないとイケないんで、俺の車に乗ってもらえますか？」

ナターシャ

「お願いね」

ユウマ

「それじゃあ、帰ります」

俺は、ナターシャさんを助手席に乗せて・・・IS学園に戻り、学園長にナターシャさんが暫く俺の部屋に滞在する事を伝えると無事に許可を貰う事が出来た・・・